て、輕く頭を下げた。船長は、何か怒鳴りながら、井上の横面を、大きな手で、ピシヤリと張付けた。井上が眞赤になつて、

『奴ツ、何を爲るか』

思はず怒聲を張上げて、立向はうとした。船長は透さず、井上の腰の邊りを蹴る。

『あツ』

と、いつて、井上は倒れた。伊藤は慌て、其中に割つて入り、井上の怒るを抑へた。その伊藤の耳を引張つて、帆柱の方へ指さした。思ふに彼方へ行け、といふのであらう。井上も、同じやうに引張られて、伊藤と共に、帆柱の下へ來た。船長は、椅子に倚つて、其前に、伊藤を坐らせ、大きな足を突出して、頻に手眞似で、靴を磨げ、といふのであつた。井上は、水夫に連れられて、汚ない船の掃除を、爲せられるのであつた。

其日の事は、それで濟んだが、二人を使ふ事の無遠慮は、實に甚だしいものであつた。何ういふ理由で、斯んな眼に逢はされるのか、二人には、少しも解らなかつた。保證金のつもりで、五千兩といふ大金を預けてあるのに、こんな亂暴な使ひ方をされるのは、果して何の爲めであるか、それが少しも解らないのであるが、言語不通の哀しさには、それを掛合ふ事も出來ぬが、一日や二日ならば格別、先の長い航海に、喧嘩しながら行く事もならず、イギリスへ着く迄は、何處へも寄らないのだから、船を下りて、自由行動を、取る事も出來ない。今は全く、捕囚になつた人と同樣で、いくら腹が立つても、仕やうがないのだ。

船長が、無遠慮に二人を、使ひ廻すのは、遠藤の生兵法が、その原因になつたのである。少しばかり覺えて居る、英語を使つて見たさに、ネビゲーションを繰り返して、船を濟く眞似をしたから、ケセウイツキが、此一列は、水夫の事を修業にゆくのだな、と早呑込みをして、その趣を、船長に話したから、上海を出る時、すでに五人は、水夫として、取扱はれて居たのだ。從つて、新樣な待遇は、當に二人ばかりが、受けて居るのではなく、本人の遠藤も、

此通りの扱ひを受けて、ロンドンまでは、泣ツ面で行つたのである。

それであるから、一列が、ロンドンへ着いて、此事情が解ると、遠藤は、一同に責められて、閉口したといふ事である。

長州藩士として、攘夷論を唱へ、夷人を、禽獸視して居たものが、斯ういふ事になつては、既う三文の價値もない。

五

船は印度洋へかゝつた。暑い赤道直下の航海、食ひ物には、漸く馴れたが、氣候の變化には、未だ馴れて居ない。それに、印度洋へかゝつてからの天候が、實に險惡なつて來て、四日も、五日も、雨の續いた果が、暴風雨になつて了つた。それが、二三日つゞいたので、小山のやうな波が、甲板を洗つて、船は、木の葉の如く舞ふから、船の生活に馴れぬ二人は、恰で死人も同樣になつて、甲板の上で、働きは出來ない。同僚の水夫に、金をやつて荷物の間に、寢させて貰つた。

其頃から、伊藤は、下痢症に罹かつて、頻に下痢するが、藥も思ふやうに呑めなかつた。養生をしたいとは思つても　食物が、意の如くならぬ。今の歐洲航路は、一萬トン以上の大船で、醫者も居れば、看護婦も居て、藥や食物も思ふやうになるから、恰で病院に居るやうなものだが、七百トン位の、昔の帆前船では、監獄にも劣つて居る。手眞似や顏付で、藥を求めても、どんな間違ひをされるか判らない。下痢する所へ、下し藥でも呑まされては、猶ほ困る。只天運にまかせて、自然の平癒を、待つ外はなかつた。

暴風雨は、漸く收まつたが、その餘勢で、波は高かつた。名にし負ふ、印度洋の高波、とても日本の近海では、見る事の出來ぬほど、物凄い光景である。ド、ド、ド、ドブンと、うち込んで來る時は、船の傾斜く事もはげしく、動もすれば、足を奪られさうになる。頗る危險ではあるが、水夫の少い船であるから、船長に命ぜられた仕事は、厭應

いへぬ。伊藤の病氣を庇ふて、井上が、二人前の働きを爲るのであつた。
彼是れするうちに、波も靜まり、船の動搖も少なくなつた。今日は、甲板に出て、井上の働く、其跡について伊藤も、働く振はして居るが、數日つゞいての下痢に、身體は綿の如く、疲れ〳〵て、ヒヨロ〳〵になつて居る。下痢は、未だ止まず、その度毎に、ズボンの取脫しをしなければならぬが、最早それさへ出來ぬほど、弱つて居るのだ。ズボンを穿いた儘、大小便の垂流しをやるので、その臭い事は一通りでなかつた。

『オイ〳〵、伊藤、しつかりしろ、何だ其醜體は……』

『いくら叱られても、己れは、最早死ぬ外はない』

『心細い事をいふな。貴樣が死ねば、己れ一人だ。しツかりしてくれ』

『此容體では、とてもイギリスまでは行けぬ』

『病氣は、氣の持ちやう一つだ。しツかりしてくれ』

『いくらしツかりしろ、といふても、ビチ〳〵出るのぢやからしやうがない。己れも、氣味は悪いが、堪忍して居るのぢや』

『貴樣のダンブクロから、黃色い水が、ボタ〳〵垂れて居るぞ』

『もう垂れ流しと、極めた』

『汚ない奴ぢや』

『汚なくてもしやうがない』

『貴樣も、長州の伊藤ぢやないか、少しは元氣を出して、しツかりして居ろ』

『オイ、井上』

『何だ』

『少し艱みがある』

『どんな事か』

『此ダンブクロを、洗つてくれんか』

『馬鹿な事をいふな。此場合に、どうする事も、出來ぬぢやないか』

『そんな、不親切な事をいふな。その海へ、投げ込めば、すぐ綺麗になる。此暑さなら乾きも早からう、どうか賴む』

井上も、困つたがしやうがない。伊藤のズボンを脫がせて、汚ないのも臭いのも堪忍して、細い紐で、しツかり結へて、海へ投げ込んだ。寄せては返へす、波に晒されて、ズボンは、忽ち淸潔になつた。それを引上げて、少しの間、釣して置いたら、すぐ乾いて、サラ〳〵になつた。伊藤は、心から嬉しさうに、

『井上、すまんな』

『何の、御互ぢや。少しは氣持がよいか』

『うむ、實に快くなつた』

『そりやア、何よりぢや』

『ついでに、猶う一つ賴みがある。聞いてくれ』

『何んな事か』

『外でもないが、快く便をさせてくれんか』

『えツ、何ぢや。便をさせてくれと』

『あの欄干の外で、一度やつて見度い』

『それは困つたな』

『賴む、工夫をしてくれ』

六

井上も、之れには困つた。いかに、伊藤の頼みでも、大きは男を抱へて、大小便をさせる、事は出來ぬ。けれども、伊藤が、泣くやうにして頼むので、それを無外に、打消して了ふ事も出來ず、何とか工夫してやらう、と、頻に考へ込んだ。

小さい帆前船で、荷積專門であるから、便所らしい便所の設けはなく、欄干の外部へ、舷に取付けた、二本の木があつて、それに足を載せて、便を遂すやうになつて、居るのだから、海の上に、尻を出して、大小便は、垂流しになるのである。

井上は、いろ〳〵と、工夫を廻らした末、一條の綱を以て、伊藤の胴中を括り、その一端を、帆柱へ結へて、自分は、伊藤の側に居て、欄干を跨ぐ、手傳ひをしてやる事にした。

『これなら、安心して行れるぢやらう』

『やア、有難い。これなら大丈夫ぢや』

伊藤は、非常に喜んで、井上の親切を謝し、例の木に跨がつて、印度洋へ、大小便の垂流しをやつた。病氣の苦痛もあつたらうが、愉快な事であつたらう。

この頃から、伊藤の病氣も、追々快くなつて來て、下痢も止まり、腹痛も、せぬやうになつた。只だ不自由なのは食物丈けのことだが、金の力で、他の水夫が、相當に心配してくれて、スープの量も殖えるし、肉は、能く叩いてくれるから、柔かくて食ひよくなつた。江戸を出る時に、和蘭の辭書を、持つて來てあつたから、伊藤は、それと首ツ引で、頻りに勉強を始めた。尤も、伊藤は、來原良藏に從いて、長崎に居た時、幾分の修業もしてあつたので、夷人ばかりを對手にして、不自由を感じながらの勉強は、存外に進歩もはやく、ロンドンへ、着く時分には、朝夕の挨拶

や、手元の小用位には、どうか斯うか、自由の利くやうになつた。

未だ、スエズの運河もなく、阿弗利加の外廻を、ぐるりと廻つて行くのだから、喜望峰の沖を、大廻りに廻るのであつた。航海としては、此方が面白いかも知れぬが、不自由勝ちな、帆前船で風の力にのみ依る、航海では、餘り感心出來ぬ。

横濱を出てから、五ケ月餘りの海上生活、その苦辛と勞力は、實に非常なものであつた。井上が、能く此時の事を、物語つては、

『斯ういふ苦勞を、一途にして來たのぢやから、今日に至つても、伊藤との交情は、眞の兄弟以上である。意見の相違から、時に喧嘩をする事はあつても、それは一時の事で、とても喧嘩別れに、なるやうな事はない。死生を共にした友人ほど、慕はしいものはない』

と、いつて、著者などにも左樣いつては、水ツ鼻と涙を、一しよに拭いて、述懐したことがある。

船は、ロンドンへ着いて、稅關の檢査やら、その五月蠅ことは一通りでないが、澤山の船舶が、着いて居て、夷人の押合ふやうにして、駈け歩く、すべての調子が、日本に居て想像したのとは、大に相違して居る。混雜のうちにも、秩序は、整ふて居て、忙しさうではあるが、仕事の運びは、片端から、ドン〳〵定いて行く。

長い間の航海で、いくら馴れて居ても、人間の情で、船が着いて、稅關の檢査が濟むと、船員は、先を爭ふて、上陸して了つた。

流石に、船長と、事務長丈けが殘つて、井上と、伊藤を加へて、船には四人居るのみであつた。先着の三人は、今何うして居るか、いづれ此船が着いた、と聞いたら、迎ひにやつて來るとは思ふが、それは、何時の事か、迎ひに來なければ、判らない。伊藤の病氣は快くなつたが、まだ疲勞が癒へぬから、見た所では、どうしても病人のやうだ。

伊藤が健康なら、その附近丈けでも見物にゆくのだが、今は其れさへ、思ふやうにならなかつた。

倫敦より横濱まで

一

伊藤は、疲れ切つた體を、帆柱に倚せて、ボンヤリとして居る。

『オイ、どうした』

『まだ疲れがあつて、足元が危ない』

『しかし、顏色は大分、よくなつたぞ』

『此處が、イギリスかと思ふたら、氣にゆるみが出て、一層疲れを覺えた』

『もう安心ぢや。今に迎ひに來るぢやらう』

『何しろ、腹が減つてしやうがない。何か、買ふて來てくれんか』

『そりや困る。道が不明ぬ上に、何を買ふにしても、同じやうな家のつくりで、看板は、皆な横文字ぢやから、何處で、何を賣つて居るか、さらに判らぬ。もう少し待つたら、誰れか來るぢやらうから、それまで、待つて居ろ』

『イヤ、見當をつけて行けば、判らぬ事もあるまいから、行つて來てくれ』

『そんな、勝手な事をいふても、不可よ』

『是非行つて來てくれ、その位の事はしてくれても、可からう』

『變な事をいふ勿。己れが、今までに心配して居た事が、貴樣には、解らぬか』
『それは、能く解つて居るが、食物位は、買つて來てくれても、可からう』
『可し〳〵、承知した。病人と爭ふても、仕方がない。買つて來てやる』
『そりや、有難い』
所へ、上陸した水夫の一人が、何か忘れ物をした、といふて、歸つて來た。それを見ると、井上は、いくらかの金を、其奴のポケツトへ押込んで、
『この友達が、何か食ひ度い、といひますから、買ひ物の案内してくれませんか』
と、怪しげな英語で、賴み込んだ。ポケツトへ、押込まれた金の利目は、流石にえらいものだ。
『おう、よろしい。食ひます物うります所、私數へます。歸ります時、あなた一人、歸るよろしい』
行く時は案内してやるが、歸る時は、一人で歸れ、といふのでは、ちと困るが、そんな事を爭ふて、もし厭だといはれたら、折角の案内料を無駄にするから、井上も、覺悟をきめた。
『よろしい〳〵、歸る時、私一人よろしい』
『料理屋ゆきますか』
『さやう』
水夫は、首肯きながら出かける。井上は、其跡から、從いてゆくのだが、稅關の門を出ると、腰にさしてある、矢立を出して、之れから筋を引きはじめた。歩く道の筋を引きながら、曲り角の數を間違へぬやう、また目印になる家を書き込むのであつた。
道筋の書取に忙しいので、町の狀況を見る暇はないが、それでも、繁昌の光景は、よく判るので、只だ舌を捲いて驚くばかり、殊に、町家の宏壯な狀を見ては、今迄の攘夷が、恥かしくなつて來た。

小さい料理屋へ來て、案內者の水夫が、話してくれたので、柔かい肉の煮たのと、外に三種ばかりの物を、買ふ事が、出來た。歸りは、水夫に離れて、道筋を書いた紙を賴りに、ブラ〳〵と、やつて來たが、どうも其筋書が、違ふやうに思はれてならぬ。よく考へて見ると、前に來た時と、反對に見る可きを、矢張り書き込んだ儘に、見て居たから、それで違つたのだ。自分ながら可笑しくなつて、獨り吹出した。往來の夷人は、忙がしさうに歩きながらも、井上の顏や姿を、ヂロ〳〵見るので、失禮な奴だとは、思つたが、何をいふにしても、少しも解らないのであるから、ぢツと堪へた。頭髮の容子、洋服の着こなし、顏の色、すべてが違ふから、怪しむのも無理はない。
漸く船へ歸つて來ると、伊藤は、帆綱の卷いたのに倚りかゝつて、熟く寢て居た。井上は、之れを見ると、疳積聲を出して、呼起した。
『おう、井上か』
『井上かとは何だ、己れが、之れほど苦んで、貴樣の食物を、買ひに行つて居るのに、貴樣は、寢て居るとは、何だ』
『そんなに、怒るな、己れは、待ち草臥れたのだ』
果は、井上も苦笑して、伊藤の前へ、買つて來た物を出したので、井上の疳癪は收まつた。

二

翌日になると、ヂヤーヂンマヂソン會社の支配人が、山尾、遠藤、野村の三人と共に、迎ひに來てくれた。
『やツ、山尾が來たぞ、遠藤も、野村も見える。彼等も、無事で着いて居た』
井上が、喜びの餘り、放外な聲で、斯ういふたのを聞き付けて、伊藤も、立上つて見た。
平生は、鬼とでも組打をする元氣の連中も、萬里の波濤を侵して、此異國へ來ては、友達が慕はしくなつて、互に

手を取り、果は抱き合ふて、喜ぶのであつた。

『よく無事で居てくれたのう』

『お前等も、達者で可かつた』

『どうぢや。航海中の狀況は……』

『隨分ひどい事であつたが、それでも、斯うして無事に、御互が顏を見合ふと、何ともいへぬ嬉しさぢや』

『しかし、伊藤の血色が良くないやうぢやが、どうかしたか』

『うむ、己れは、病氣になつて困つたよ』

『左樣か、そりやア不可。もう良いのか』

『病氣は癒つたが、未だ疲れがあるので、弱つて居る』

『それにしても、生命があれば、良いとせねばならぬ』

『井上には、一通りならぬ厄介になつた』

『井上が居てくれたので、貴樣も仕合せぢやつた。貴樣が一人であつたら、或は死んで居たかも知れぬ』

『全く左樣ぢや』

それから、井上が、航海中の物語りを爲るやら、伊藤の病氣について、詳しい話をするやら、はては、例の虐待事件に及ぶと、遠藤が、頻りに弱つたやうな、顏をして居る。野村は笑ひながら、

『オイ、それについて、面白い事があるのぢや。己達も、酷い目に逢つて、實は閉口したのぢやが、その原因は、遠藤から起つたのぢやよ』

『ふゝーむ。そりや、何ういふ理由か』

『遠藤が、生噛りの英語から、此災ひを惹起したのぢや。ネビゲーションからの一件から、水夫の志願と間違へられ

たのぢや。可笑しいぢやないか』

井上は、眼を圓くして、遠藤を睨んだ。遠藤は、面目惡さうにして、

『惡氣でした事ではない。物の間違ひといふのは、斯ういふ事をいふのぢや』

『馬鹿にするな。貴樣は、全體、よけいなことをする、これから氣をつけろ』

『イヤ、恐れ入つた』

斯んな事をいふて、時間が經つのを、會社の支配人は、默つて待つて居る。言語は解らないが、其態度で、大凡は想像がつくから、互ひに嬉しさうにして、話し込んで居るのを、妨げるでもない、と思つて、その話の切れるのを、待つて居たのだ。

山尾等三人から、支配人の事を聞いて、伊藤と、井上は、改めて禮を述べた。それから一同は、支配人につれられて、會社へ來て、更に社長の邸へ、案內された。

翌日は、理髮店へ、連れて行かれて、頭髮の手入れをして貰つた。歸途に、洋服店へ行つて、新しく洋服の註文をした。二日ほど過ぎると、新調の洋服を着て、會社へ出かけた。社長は、一同の生れ變つた、容態を見ると、一人一人に、手を振つては、

『ゼントルマン〳〵』

と、いつて喜ぶ。一同も、何となく嬉しいやうな、氣が爲るのであつた。

先づ英語の稽古をする事になつたが、那邊へ行つても、お斷りで、引受けてくれるものがない。東洋の未開國から變な奴が、遣つて來た、といふので、厭がつて引受けてくれない。斯うなると一同も、いくらか心細くなつて、今更に攘夷論などを、唱へた時の復讐を、されるやうな感じがした。

此連中の事が、追々に評判になつたので、此に特志の人が現はれた。大學の教師で、ウヰルヤムソンといふ人の夫

人が、之れを聞いて、英語を教へてくれる事に、なつた。支配人に、連れられて、その夫人に、面會して見ると、如何にも物柔しい調子の、親切らしい人であつたから、一同も大喜びで、これから毎日のやうに、通學する事になつた。教へる人が親切で、教へられるものが熱心であるから、其進歩は、著しかつた。

二

遠くから見て想像したのとは、全く違つて居たのを、事毎に感じるやうになつた。會社の支配人が、親切に、休み時間を利用しては、諸方へ連れて行つてくれる。流石に、世界一の稱ある、大都會の事とて、見るもの聞くもの、すべてが珍らしくて、今迄の攘夷思想などは、藥にしたくも無いやうになつた。

スペルとリーダー、餘り面白いものではない。毎日同じやうな事を、繰り返して居るので、甚だ詰まらないやうには思ふが、どうも仕方がないから、教へられる通りに、導かれて行く。

『こんな事で、何うかなるのかな』

『さうさ。同じやうな事を、くり返して、毎日のやうに、ビーエーベー、ビイアイビイ、では、何だかつまらんやうな、氣がする』

『しかし、日本のいろはと同じで、こんな事を、いふて居るうちに、どうか斯うか、解るやうになるのぢやらうよ』

『まア、仕方がない。辛抱しよう』

日が經つて、月を重ねるうちに、少しは解つて來る。東西南北、いづれを見ても、異人ばかりであるから、言語の解らない爲めに、不自由は一通りでない。その不自由が、却つて勉強の基に、なるのだ。はやく解るやうになり度いの一心から、奮發の氣も起るし、覺えた語が、役に立つた時の嬉しさ、それが又少からず、勉強の刺戟にも、なるのであつた。

今日は、パーリヤメントへ、連れて行かれる事に、なつて居る。パーリヤメントが何いふものか、といふことはよく解らないが、一通りは聞かされて、政治について、會議をする所である、といふ丈けの事は、解つて居るから、一同も樂みにして、時刻の來るを、待つて居るうちに、支配人が、やつて來て、これから、パーリヤメントへ行く事になつた。

日本の國會、それがパーリヤメントである。マグナカルタが、日本の憲法で、英國の政治は、すべてパーリヤメントから、割出されて來る。長い間の習慣で、自治の精神から、國政に臨む異人は、自制克己の力に、富んで居る。政治家の責任を、重んずる事は、實に立派なもので、日本の政治家の、無責任なるに比して、あまりの相違である。

明治六年の征韓論から、西郷隆盛と、共に辭職した、板垣退助が、後藤象次郎、副島種臣、江藤新平の三人と相談して、民選議院設立の建議をしたのが、我國に於ける、國會政治の基因と、なつたのである。古澤滋と、小室信夫の二人が、英國から歸つて來て、君民同治の政體の說明をして、パーリヤメントや、マグナカルタの話を、聞かせた。それに基いて、板垣等が、建議をしたのであつた。

板垣は、此建議の趣旨を、實行させ度い、と思つて、全國の遊說を始め、漸く明治十四年の十月十二日になつて、國會開設の大詔が下つた。我國會の始めは、英國のパーリヤメントに始まつたのであるが、憲法の制定は、却つて獨逸のグナイストに學んで、伊藤博文、伊東巳代治、金子堅太郎、井上毅氏の四人が、專ら起草したものである。

パーリヤメントへ來た一同は、何が何だか、少しも解らないが、互に討論して其主張を、爭ふて居る事丈けは、よく解つた。しかし、討論されて居る問題は、何ういふ事であるか、それは更に解らなかつた。日本の事について、議論が出て居るのではないか、といふ想像はついた。ジヤパンとか、ジヤパニースとか、いふ言が聞えるから、何でも、日本の事を、いふて居るには違ひない、と思つて、一同は、謹んで聞いて居た。否、聞いて居た、といふよりは、見て居た、といふた方が、可いかも知れない。そのうちに、拍子の音と共に、パーリヤメントは閉會になつた。一同

も、何だか解らないが、外へ出て來て、ホツと、息を吐いた。

四

下宿へ歸つてから、想像談に、花が咲いて、一頻りは賑かであつた。

『今日のパーリヤメントは、全體、何を論じて居つたのか、少しも解らなかつたが、ジヤパンといふ事を、しきりに繰返へして居た所から、想像して見ると、何でも我々の事を、いふて居たのらしいが、何ういふ事を、いふて居たのかな』

『さ、そりやア一寸解らんが、我々の事を、いふたに違ひない。その證據には、ジヤパニースと、いふて居たではないか、ジヤパニースといへば、日本人の事であるから、我々が來て居るから、氣をつけろ、とか、何とか、いふて居たのだらう』

『左樣だ〳〵、それに違ひない』

『しかし、それ丈けの事ではなからう。何か外に、論じて居たのだらうが、それの解らないとは、まことに殘念の至りでは、ないか』

斯んな話で、時刻を移すうちに、ウヰルリヤムソン夫人から、迎ひが來たので、一同は、すぐに出かけて行つた。

パーリヤメントにおいて、臨時に會議を開いたのは、下之關の砲擊一條について、愈々長州藩と開戰す可く、その軍事費を、決定をする爲めであつたが、聞いて居た五人には、その意味が、解らなかつたのである。此砲擊一條は、下之關を通過する、英、米、佛、蘭、四ケ國の商船を、不意に砲擊したのが問題になつて、四ケ國の公使から、幕府と長州藩へ、嚴重の掛合に及んだ、けれど一向に要領を得られない。其處で、兵力に訴へて、爭ふ事になつたのである。

ロンドンへ來てから、一年近くになるので、英語も、少しは解るやうになつて、新聞の雜報位は、和英辭書と首ツ

引で、どうか斯うか其意味丈けは、汲み取る事が出來る。會話も、相當に進んで居たのだ。ウヰルリヤムソン夫人の、親切な教授は、存外に、五人の進歩を、速めたのであつた。

『おう、皆さん、おはやう』

と、夫人は、相變らず、お世辭がよい。五人も、それ〳〵に挨拶して、傍らの椅子についた。

『昨日のパーリヤメント、どうありましたか』

『少しも解りません』

『ジヤパン大名毛利さん、いくさあります』

『ゑツ、毛利、いくさありますか』

『さやう』

『どういふ理由ありまして……』

『毛利さん、下之關砲臺ありますか』

『あります』

『その砲臺から、和蘭商船うちました』

『へー』

『佛蘭西、亞米利加、英吉利商船通ります。皆な擊ちました』

『へー』

『條約ありますから商船ゆきました。それうちます事亂暴あります。公使かけあひましても、話し解りません。德川政府かけあひましても、少しも解りません。この度、いよ〳〵いくさあります。昨日のパーリヤメント、その入費、いくら出しますこと、會議ありました』

『へー』

『そんな譯ですか』

『此處に、ロンドンタイムスあります。ごらんなさい』

初めて聞いた、國元の事變、自分等の出發後に、起つた事とて、一同は、少しも知らなかつたのだ。タイムスを開いて見ても、よく讀めないから、ぢつと眺めて居るばかりだ。しかし、夫人の話で、大體は解つて居る。誰か知らぬが、下之關で、外船砲撃を、行つたものがあるに、違ひない。自分等は、今でこそ、開國主義に、なつて居るが、曾ては攘夷主義で、御殿山の英公使館の燒打さへ、行つた事がある位であるから、國元に居ては、世界の大勢も判らず、從つて外船砲撃を行るのも、無理はない、と思つた。乍併、之れが爲めに、四ケ國と開戰するやうの事があつては、それこそ一大事である。その結果を豫測すれば、到底勝利は覺束ないから、左樣ならぬうちに、調停の勞を取つて、毛利家の安泰を、謀らねばならぬ、と、疾くも覺悟は決いたが、それにしても、夫人の承諾を得なければ、歸國の手續きが出來ぬので、兎に角、五人は、別室に退つて、一應の相談を、爲る必要がある。

五

夫人の許を得て、別室に退つた五人は、歸國についての相談をはじめた。

『オイ、えらい事になつたのう』

『全體、誰が行つたのだらう』

『商船を砲撃するとは、亂暴も甚太しい事だ』

『攘夷などいふ議論が、實際に行はれぬ位の事が、國元の奴等に解らぬとは、實に困つたものぢや』

『オイ〳〵、そんなに偉さうなことは、いへぬぞ。我々も、ツイ此頃までは、其仲間であつたのぢやから、餘り惡く

はいへまいぜ』

『それも左樣ぢやな、ハツハ、、、、、』

伊藤は、膝を進めて、

『まア、待て、そんな事をくり返しても、今更に致方はないのぢやから、此上は、何とか善後の策を建てねばなるまい。それについての相談をはじめようぢやないか』

と、いふた。井上は、之れに同意して、

『無論、それが大切ぢやが、貴樣に、何か考へがあるか』

『うむ。己れには、相當の考へがある』

『それは何ういふのか、先づ其れを、いふて見ろ』

『己れは、斯う考へる。我々のうちから二三人、まづ歸國するのぢや。藩公はじめ、重役に說いて、世界の大勢といふものは、斯うなつて居る、といふ事を、充分に鼓吹んで置いて、今度の砲撃は、甚だ宜しくなかつたのみならず、此後の爲めにも面白くないから、速く和議を講ずるが可い、との事を、大に論じて、藩論を、開國に攻めさせ、今度の事については、四ケ國に對して、相當の挨拶を爲せるやうにするのが、差當つての急務である、と思ふが、汝等は、何う考へるか』

『成程、それが可からう』

『しかし、誰が歸るか、まづ其れを極める必要がある』

『それは、誰でも可い。相談の上で、誰にでも極めようぢやないか』

『さア、誰にするかな』

野村は、之を聞くと、

『皆な揃ふて歸らうか。今誰が歸るか、といふた所で、それは容易に極まるまい。寧そ皆な歸るとした方が、一番可からう』

伊藤は、之を遮つて、

『そりやア不可、斯うして遣つて來て、皆な歸るのは、餘りに馬鹿らしい。五人でも一人でも、その說の行はれるのは同じ事であるから、せめて二人位にして置いて、あとの三人は、充分に修業して、歸る事にしたら、どうか。今度歸る二人は誰にするか、それを極めるには、何とても方法はあらう』

遠藤も、山尾も、伊藤の說に贊成した。井上も、同樣の意見であつたから、野村も、自說を撤回して、これから歸國するのを、誰にするかと、その相談に移つた。

遠藤は、頻に考へて居たが、

『どうぢや。これは、伊藤と井上に、歸つて貰うことにした方が可からう。我々が、跡に殘らうぢやないか』

と、發言した。誰も歸り度いのだが、遠藤に、斯ういはれると、强ひて爭ふ事は出來ぬ。それで、歸國は、伊藤と井上に、決したのであつた。

一同は、復たび夫人の前に出て來た。夫人は、ニコ〳〵しながら、

『只今、相談いたしましたが、私と井上が、歸國する事になりました』

と、先づ伊藤が發言す。井上は續いて、

『どうか、我々兩人の歸國を、許して下さいませんか』

之れを聞くと、夫人は、手を振つて、

『不可ません』

『なぜ、不可ませんか』

『國へ歸つて、何しますか』

『此いくさの仲裁いたします』

『何ツ、いくさの仲裁いたします、ホ、、、、、』

夫人は、一笑に附し去らうとした。

それは、無理のない事だ。此連中を、子供のやうに思つて居る、夫人の眼から見れば、伊藤と井上の兩人が、たとへ歸國した所で、此いくさの仲裁が、出來る筈はなく、急に歸り度くなつたので、斯んな事を、いひ出したものと、思つたのだ。五人が、毛利の家來である事も知らず、今迄に何んな事をして居たのか、それも知らないので、從つて、兩人の歸國には、同意を與へないのであつた。

六

夫人が、承知してくれなければ、會社の方でも、歸國の周旋は、してくれまい。夫人の不承知は、一同の身分も、能く分らず、歸國の目的たる、戰爭の仲裁をする、といふ事について、そんな事が、出來るか何うか、それに疑ひのある爲めであつた。段々押問答の末、漸く其事情が解つたから、此上は一切を打明けて、歸國を許して貰ふ外はない、となつて、先づ井上から、

『私等が歸國したい、といふのは、此方に居るのが、厭になつたからでは、ありません。實を申せば、私等は、毛利の家來であります』

と、いふた。之れを聞くと、夫人は、眼を圓くして驚いた。

『ほー、皆さん、毛利大名の家來ありますか』

『左樣』

『ジヤパンさむらひありますか、何故、イギリスへ來ましたか』

『私等は、初め夷人さん嫌ひありましたが、今好きになりました。世界の事知りませんものは、皆夷人さん嫌ひあります。私等も大嫌ひありました。イギリス公使館燒きました人、實は私等あります』

夫人は、ます〳〵驚いて、

『ほう、皆さん、公使館やきました』

『火を放けましたのは、此人あります』

と、伊藤に指さしたので、伊藤は、眞赤になつて恐れ入つた。

『私は、火を放けましたけれど、その道案內は、井上あります。山尾も、一途にゆきました』

『皆々、恐い人ばかりあります』

『しかし、今は其樣な事いたしません』

『よく解りました、自分の惡い事、ざんげいたします人、皆宜しい人あります』

『私等は、世界の事、よく解りました。これから夷人さん、交情よく致したいと思ひます。此いくさすること不可ません、毛利殿樣、私等の意見を述べまして、いくさせぬやう致します』

『おう、それ誠によろしい』

『私等の歸りますこと、許して下さい』

『よろしい、盡力いたしませう、誰歸りますか』

『私伊藤、歸ります、外の人、皆殘ります』

夫人の疑ひは、一切晴れたばかりでなく、今は却つて一同に對する、好意の深くなるばかりで、歸國後の事についても、いろ〳〵の注意をして、くれるのであつた。

夫人に別れて、旅籠へ歸つてから、タイムスを擴げ、辭書と首ツ引で、どうか斯うか、パーリヤメントの議事の大要が解つた。

『オイ、こりや却々大變だぞ。四ケ國の軍艦が、十九隻といふのぢやから、容易な事で防ぎはつくまい。はやく歸つて、和議の周旋をせねば、君家の一大事にならう』

『どうも、困つた事が出來たものぢや。全體、誰れが行つた事か知らぬが、商船を砲擊するとは、亂暴にも程度のあつたものぢや』

『己れと伊藤は、此事で歸つても、また直きに出て來るから、貴樣等は、大に勉强して居てくれ』

伊藤と井上が、いろ〳〵と跡の事について、相談を始めた。第一に困るのは、金の事であるから、それは持つて來たのを、殘らず渡して、置く事にして、兩人は、どうせ日本へ歸るのだから、船賃と幾何かの小使錢があれば、それで充分だ、といふ事になつて、殘るものは充分に勉强して、世界的の知識を蓄へ、他日の奉公に資する事を約束して之れから會社へ、揃ふてやつて來た。

會社の主人は、ウヰルリヤムソン夫人から、大體の話を聞いて居たが、更に一同から、詳しい事を聞いて、伊藤と井上いふやうな事まで、行屆いた話もあつて、それから船の方へ、聞き合せてくれると、上海へ行く蒸汽船はあるが、これは船賃が頗る高いので、懷裡都合から、止める事にして、二三日後れて出帆する、帆前船へ、來た時の待遇と、同じ約束で、乘せて貰ふ事にした。但し、今度は、水夫の取扱ひ丈けは、豫め斷つて置いて、いよ〳〵兩人は、歸國の準備にかゝつた。

七

今日は、伊藤と井上が、船へ乘込むので、山尾、遠藤、野村の三人は、稅關の棧橋まで、送つて來た。

『それぢやア、無事で』

と、遠藤が、先づ挨拶をした。山尾と、野村も、兩人の手を握つて、

『何分頼む。頑固な奴等ばかりぢやから、馬鹿な災に逢はぬやう、大に注意してくれ』

『それは心配するな』

會社からも、支那人がやつて來た。ウヰルリヤムソン夫人も、來てくれた。歸る兩人は、氣を強くして居ても、殘る三人が何となく悄氣て居るので、兩人も、氣が沈んで來た。

出帆の號鐘が、鳴りはじめたので、一同は、棧橋へ下りた。船は、徐かに棧橋を離れかけた。兩人は、欄干に倚れて、

『健康でやれ』

と、いふ。三人も均しく、頭を下げて、會釋した。船は、追々沖へ出る。もう棧橋が、見えなくなつた。

一度でも、遠洋航海の經驗があると、二度目には、左迄に苦いと思はぬが、それでも暴風雨になると、ナカ〳〵樂でない。マダカスカルの沖に來た時、非常な暴風雨になつて、いよ〳〵海底の藻屑になるのか、と、思ふた事もあつて、此際の苦みは、一通りでなかつた。四ケ月の海上、膽を冷したのは、此時丈けで、それからは天候もよく、まことに樂な航海であつた。

船は、横濱へ着いたが、妄りに上陸の出來ないのは、自分の頭髮が、西洋風になつて居て、體には、洋服をつけて居るから、此儘上陸して、萬一にも、見咎められた時は、國禁を犯した、罪人に、ならねばならぬ。之れには兩人も少からず苦心したが、幸に船長が、歸國の目的も知つて居たし、上陸の至難しい事情も、察してくれたので、いろいろと心配して、兎に角、チヤヂンマヂソン會社の支配人を、呼んでくれた。

前年のガールとは違つて、今度は、ハリソンといふ人が、代つて支配人になつて居た。けれども、此連中の事は、ガールから聞いて居たので、存外に、親切な取扱ひであつた。

『公使のオールコツクさん、只今來て居ります。私、これから相談してくる、よろしいか』

『どうぞ、さうして下さい』

『しばらく、待つよろしい』

ハリソンは、すぐに領事館へ、やつて來て、オールコツクに面會して、兩人の事を話した。兩人の爲めには、オールコツクが江戸に居てくれたのが、非常に好都合であつた。此人は、頗る日本に同情して居て、何につけても、利益を謀つてくれた。殊に、其左右には、シーボルドも從いて居たし、サトーも居た。また、ラウダも居てくれたから、萬事が都合よく、運んだのである。

シーボルドは、長く日本に殘つて、敎育の事に、力を盡してくれた人。ラウダは、外務省へ、顧問として雇はれ、明治の初めに、外交上の事に、不馴の役人に對して、いろ〳〵と敎へてくれたほどの人で、今の外交官の古手のうちには、此人に敎へられたものは、ナカ〳〵に多い。サトーは、十年ほど前に、公使として、我國に來た。之れも親切な人として、今に其德を頌するものが、ある位だ。

下之關事件は、四ケ國公使の感情を、損なふたに違ひぬ、といふほどには、堅い覺悟は、有つて居なかつたのだ。つまる所、亂暴に、商船の砲擊をしたから、その談判を開いたけれど、幕府と毛利が、互ひに責任を遁れようとして、談判の果しがつかぬから、止むを得ず、戰爭とまで運んで來たのであつて、もし相當の條件を容れてくれたら、何時でも平和の手段を取らう、といふのであつた。所へ、イギリスから、伊藤と井上が、その調停の爲めに、引返して來たといふので、オールコツク始め、他の三人も、大に喜んで、兎に角、面會して話を聞いて見よう、となつた。ハリソンも、非常に喜んで、すぐ船へ引返して、此事を、

兩人に告げたから、その晩、コツソリ上陸して、兩人は、イギリス領事館へはいつた。

八

領事館の一室には、公使のオールコツクと、書記のサトー、それにシーボルドと、ラウダの四人が、伊藤井上の來るを待受けて居る。

兩人の身分について、多少の疑ひは、有つて居ても、兎に角、講和の取計らひを爲る、といふので、幾分の期待はして居たのである。

軈て、兩人が、遣つて來て、すぐに話は、媾和の方法に、移つた。

『毛利さんへ、媾和の話、何うしてします。あなた、毛利さん逢ふ事出來ますか』

『それは、出來ます』

『見込みありますか』

『充分あります』

『あなた、毛利さんの家來、何役ありますか』

此質問には、兩人とも、答へに苦んだ。その身分を明白にいへば、信用はされまいし、といふて、質問された以上全く答へぬ事は出來ない。一時の所、何とか胡魔化して置く外はない、と思つて、伊藤は、

『私の役、家老あります』

『はゝア、家老……家老……』

と、二三度くり返しながら、考へて居た。家老は、大名の爲めに、大切な役目で、政治的にいへば、大臣である。それにしては、兩人の容子が、あまりに輕いので、疑はしく思つたのらしい。

オールコツクは、傍の書棚から、一冊の帳面を取出して、しきりに調べはじめた。これは、大名の軍役を、調べてある帳面で、家老の名は、すべて記入されてあるのだが、實に用意周到なものだ。

『毛利さん家老、伊藤、井上、ありません』

と、いひながら、オーコツクは、手を振つた。井上は、例の一本調子で、斯ういふ場合には、すぐ行詰まつて了ふが、伊藤は、存外に平氣であつた。

『その調べは、何年ですか』

『一昨年あります』

『私等は、昨年就任ましたのですから、その帳面には、まだ記入してないのでせう』

伊藤の答は、如何にも巧いものであつた。併し、それの僞りである事は、公使等にも、解つて居るが、それ迄にして盡力しようといふ志を察してやれば、その僞りも、眞としてやらねばなるまい、と、善意に解釋して、

『おう、家老よろしい。解りました』

此答へを得て、兩人は、ホツと息を吐いた。

『あなた、國へ歸りまして、その返事ありますこと、幾日かゝりますか』

『左樣う、下之關迄三百里あります。普通に歩いて、三十日は費かりますが、此度の事は急ぎますから、馬で駈けまして、十二三日は費かりませう。往復の日と、毛利さんへ、相談します日を加へますと、どうしても三十日は、待つていたゞき度いです』

『否、いけません。三十日費かります。あまり長いことありますから、どうぞ三十日、待つて下さい』

『それでは困ります。往復丈けでも、十五日位では困りますから、十五日待ちませう』

オールコツクが、待てぬといふのも無理はないが、伊藤の三十日待て、といふのにも、道理はあつた。いづれにし

ても、道程が遠いのであるから、その往復に、要する日數は、どうしても、認めるのが、當然である。乍併、さう長く待つのは迷惑であるから、何とかして其日數を、縮める工夫を爲ねばならぬ。その工夫がつかずに、双方が、

『待て』

『待てぬ』

で、爭ふては、相談の纏まる時がない。

此時に、シーボルドが、口を入れた。

『此方の軍艦で、送つてやつたら可からう』

と、いふた。オールコツクは、しばらく考へて、

『よろしい。此方の軍艦で送りませう』

これで、相談は極つたが、他の公使が何といふか、それは、オールコツクが引受けてくれたら、大丈夫とは思ふが、それでも、返事を聞くまでは、ナカ〳〵心配であつた。その返事を待受ける間。一兩日は、横濱見物に、時間を費して居た。

九

オールコツクの照會に對して、他の三公使からも、同意の旨を、答へて來た。其處で、伊藤井上は、再び領事館へやつて來て、オールコツクと、相談する事になつた。軍艦で送る事は極まつても、那邊まで送るか、と云ふ事が、まだ極まつて居ないのだから、これを極めなければならぬ。送り放しに、歸すのなら何でもないが、兩人からの返事を聞く爲めに、サトーが同行するのであるから、その待合せにも、都合の良い所を、選ぶ必要があつた。

『下之關は、何うでせうか』

と、井上がいふのを聞いて、オールコツクは、眼を圓くした。

『否、下之關危ぶない。普通の商船通ります。發砲いたしますほど危ぶない所あります』

成程いはれて、見れば、その通りであつた。商船の通行にさへ、砲撃を加へる位であるから、軍艦と見たら、必ず見遁すまい。それでは、喧嘩の上塗を爲るやうなものであるから、軍艦を、着ける場所を極めるは事は、至極やさしいやうで、その實は、ナカ〳〵面倒な事であつた。オールコツクは、大きな地圖を擴げて、

『これを、御覽なさい』

伊藤と、井上が、その地圖を見ると、實に驚く可き精巧なもので、我日本國の全部である。

『那邊、よろしいか』

『那邊に、しませうか』

と、同じやうな事をいふて、しきりに地圖を、見つめて居たが、

『此處、いけませんか』

オールコツクが、指さした所を見ると、それは、豐前の姫島であつた。伊藤は、思はず手をうつて、

『宜しい、其處よろしいです』

姫島から富海までは、一直線の海上、僅かに五六時間で行けるのであるから、極く都合が良い。軍艦が待受けるにしても、毛利の領海を、離れて居るから、萬一の危險もない譯である。

相談は、之で極まつて、バロサ號といふ、英吉利の軍艦で、兩人は、送られる事になつて、サトーの外には、エンスリーといふ人も、通譯官の資格で、同行する事になつた。その他、和蘭と、佛蘭西の士官が、一人づゝ乘込み、馬關海峽の視察として、コモーランド號といふ、小さい軍艦も同時に出帆する事になり、いよ〳〵横濱を離れて、姫島へ向つた。

萬事が、斯ういふ工合に、好都合に運んでゆくのは、伊藤と井上の運が良かつたので、生命がけで働いたのは、無論の事であるが、運勢も伴はねば、人間の出世はむづかしいものだ。五人揃つて、英吉利へ出かけたのに、此問題が起つて、歸國することになつて、伊藤と井上が、歸る事になつたら、伊藤と井上の出世は、あれ迄にならなかつたかも、知人が殘つて、山尾、遠藤、野村の三人が、歸る役目になつたのが、即ち人の運といふものである。もし、此二れぬ。それから、オールコツク等の同情で、歸國の手順が、好都合に運んだのも、此方から企てた事でない丈けに面白い。併し、此事の至難しいのは固より云ふ迄もない事で、一歩を誤れば、自分の生命のないのは勿論、毛利の存亡にも、關するほどの、大問題であつた。事の成否は、しばらく措いて、伊藤や井上のやうな、身分の低いものが、ぞれほどの問題に、直接の關係を有つたのは、即ち二人の爲めには、此上もない出世の端緒であつて、實に好運の人といふ可きである。

下關の商船砲撃

一

去年から今年へかけて、長州藩は、實に多忙を極めた。内外多事とは、斯ういふ場合を、指していふのだらう。昨年の外國商船砲撃から、延いて、今年の下關戰爭に到る迄、その間の混雜といふたら、それは〳〵非常なものであつた。英、米、佛、蘭の四ケ國が、十九隻の聯合艦隊を以て、いよ〳〵攻め寄せて來るまでの徑路は、一應述べて置く必要がある。

全體、德川幕府が、開國貿易の條約を、結んで居るのに、その條約國の商船を、無遠慮に砲撃する、といふやうな、亂暴を働いては、國の信用が保てるものではない。交際するから來ても可い、といはれたので、喜んで遣つて來る商船を、途中に待伏せして、之れを砲撃する、といふのだから、實に無法千萬である。

併し、それには、攘夷の勅があつて、之れを遵守しての砲撃だ、といふ口實はあるが、一應は、幕府の意見も確めるのが、事の順序であらう。尤も、その手順をふむ事になれば、幕府の方では、之れを差留めるに極まつて居るから、それで何等の交渉もせずに、不意の砲撃をやつたのではあらうが、どう考へても、正當の遣方とはいへぬ。

朝廷から、沿海の諸藩に對して、攘夷の勅を下して、その期限を、文久三年の五月十二日と定めてあつた。その日までに、外夷は、日本の國境から、逐拂つて了へ、といふのである。此詔を受けて、迷惑に思つた諸侯もあらう

が、また之を喜んだ諸侯もある。その喜んだ諸侯の一人が、卽ち毛利であつた。毛利は、德川に對して、關ケ原以來の怨みがあるので、何か機會さへあれば、一と騒ぎやらう、と考へて居たのは、決して一朝一夕の事ではなかつた。三百年の長い間、一日として之れを、忘れた事はないのだ。嘉永の歳に、外夷が渡來して、それから開國攘夷の議論が起つて、一年毎にむづかしくなつて來た。毛利は、德川が、開國の方針を極めたから、そこで攘夷に傾いた。殊に朝廷の御趣意が、攘夷であると見て取つたので、此問題を、巧く利用して、德川虐めに取りかゝつたのである。

下關の海峽を控へて、その領地が、横に長く續いて居るのは、攘夷を實行するに、最も好都合であつた。外國の船が、日本へ來るのには、此海峽を通過する事になるから、砲臺を築いて、通りかゝりの外國船に、砲撃を加へたら、必ず面倒な問題が起るに、極まつて居る。それが原因になつて、德川幕府が、窮地に陷るだらうから、どこまでも、之れを利用して、德川に對抗してやれ、といふのであつた。

五月十日の晩、亞米利加の商船、ペンプロックといふのが、此海峽を通りかゝると、折柄の潮流が、甚だ險惡であつたから、しばらく潮待をして居る事になり、錨を下して、休んで居たのだ。此邊の潮流は、非常に宜しくない。上の方と、下の方と、逆に流れて、それが殊に激しいので、何時も不馴の航海者は、酷い目に逢ふのであつた。

砲臺で、見張りをして居たものが、はやくも之を見付けて、すぐに此旨を、報告したから、

『それツ、夷人の船が居るさうぢや。はやく撃つて了へ』

と、いふ意氣込みで、癸亥丸と、庚申丸の二隻で、ペンプロック號の方へ、不意に、砲撃を加へた。ペンプロック號の方では、意外の砲撃に驚いて、いろ〳〵の信號をしたけれど、固より信號などの解る筈もなく、まして、逃げ出した。癸亥、庚申の二隻は、之れを逐討に、散々苦めて引上げた。

初めて、攘夷が、うまく行つた、といふので、萩と山口へ、急使を遣り、さかんな祝盃をあげて、その勝利を觀し

た。

對手が、戰鬪準備のない商船であるから、何の苦もなく擊拂つたが、それを目出度いといふて、大喜びであつたのだから、實に馬鹿らしい事、此上なしだ。

二十三日には、佛蘭西のキヤンシヤンといふ船が通つた。二十六日には、和蘭のメジユーザといふ船が通つた。此二隻も、前日のペンプロックと同じやうに、不意の砲撃を受けて、散々の體で、横濱へ引返へした。此時は、砲臺から砲撃したのであるが、山縣有朋が、狂介といふた時代で、その指揮をして居たのだから、面白いぢやないか。

二

前に擊たれた、二隻の商船が、横濱へ、逃げ返つて、下之關の狀態を報告したから、各國公使の間にも、いろ〳〵の議論があつて、先づ取り敢ず、亞米利加の軍艦、ウイオミングといふのが、充分に戰鬪の準備を整へて、下之關へやつて來た。

此事は、長州藩の方でも、すぐ判明つたから、各砲臺では、大砲に彈丸を込めて、今や遲しと、待ち受けた、所へウイオミング號は、やつて來たので、それを見ると、各砲臺から、一時に砲撃を始めた。けれども、ウイオミング號は、平氣で進んで來る。見る〳〵うちに、海岸へ近づいたから、癸亥丸と庚申丸、それに壬戌丸の三隻が、同時に乘出して、ウイオミング號に、砲撃を加へた。ウイオミング號の方では、近づけて置いて、それから應戰を始めた。

今までは、戰鬪の準備なき商船であつたが、今度のは充分に覺悟して來た軍艦であるから、どうして容易に負けるものでない。そのうちに敵彈は、遠慮なく飛んで來て、トウ〳〵庚申と壬戌の二隻は、擊沈されて了つた。殘る癸亥丸も、散々に擊られて、僅に擊沈を免れたまでの事であつた。

併し、その擊沈された船から、敵艦へ乘込んで、斬死をしようと焦つたものもあるのだから、その頃の武士の元氣

は、實に素晴しいものであつた。

此時、横濱には數隻の、佛蘭西軍艦が、來て居たので、水師提督のジヨレース少將は、長州藩の亂暴を怒り、兎に角、一應は之れに酬ひなければならぬ、とあつて、タンクレード號と、セミラス號の二隻を、下之關へ、差向ける事にした。

此二隻が、下之關へ着いたのは、六月五日の事であつた。砲臺と軍艦の間に、それから盛な戰鬪が開始された。佛艦は、先づ砲臺に向つて、全力を盡して、砲撃を加へると、忽ちにして砲臺は、沈默して了つた。その隙を見て、小さい方のタンクレード號を、海岸へ近づけ、かねて準備してあつた、陸戰隊を、ボートで運び、砲臺へ乘込ませた。此一戰に、長州の方は、酷く負けて、砲臺の大砲は、すべて破壞されて了つた。その代り、再度の接戰で、敵兵を大に苦めて、少しは面目を立てる事が出來た。

砲臺の戰鬪力を、滅茶々々にはしたが、タンクレード號も、非常な損害を受けて、進退自由ならず、田ノ浦沖で修繕してから、漸く横濱へ引上げた、といふ事である。

今日から見れば、まるで子供の喧嘩にも、均しい事であるが、その頃の事にして見れば、ナカ〳〵に評判の戰鬪であつた。大體に於て、長州の方の負けにはなつたが、藩士の士氣は、却つて之れが爲めに鼓舞されたのであるから、毛利の爲めには、此戰鬪のあつた方が、可かつたかも知れぬ。

却說、各國の公使は横濱に集まつて、協議を遂げ、聯合して德川幕府へ、談判する事になつた。

所が、幕府の方では、曖昧な事ばかりいふて、容易に此責任を負はうとしないから、かけ合が面倒になつて來た。

『德川幕府に於て、責任を負はぬといふなら、此方では勝手に、毛利の方へ、かけ合に及ぶが、宜しいか』

と、いふ照會に對して、幕府は、

『宜しい。さういふ事にしてくれ』

と答へた。更に公使側から、

『かけ合の末、或は再び、開戰の運びになるかも知れぬが、それでも宜しいか』

と、いつて來たので、幕府は、

『更に差支へがない』

と、はツきり答へた。

其處で、毛利の方へ、談判に及ぶと、毛利は、斯う答へた。

『朝廷の勅に由つて致した事であるから、此方に責任はない。日本六十餘州は、天皇陛下の御支配であるから、大名が、朝廷の命令に從ふのは、當然である』

それから公使は、此答辯に由つて、朝廷へ照會すると、朝廷は、

『日本の政治向きは、德川幕府に一任してあるから、大名の爲した事については、幕府へ、かけ合つてくれ』

と、いふのであつた。

是れでは、殆ど談判の歸する所がないから、公使は、本國政府へ、此旨を報告した。

それから種々の曲折もあつて、終に四ケ國の政府が、聯合して毛利を攻めよう、といふ事になつた。伊藤や井上は倫敦で、此事を聞いて驚いたのである。

下之關の商船砲撃の始末は、大略此通りであるが、文久の歳も暮れて、元治元年となつて、いよ〳〵聯合艦隊が、下之關へ、攻め寄せて來る事になつた。此どさくさの最中に、長門守は、上京する事になつたのであるから、藩の內外は、非常な混雜であつた。

伊藤と井上が、豐前の姫島に着いたのは、元治元年の六月廿三日の事であつた。夜の五ツ時といふから、今の午後八時頃、英吉利の軍艦に送られて、漸く此處まで來たのであるが、取敢ず周防の海岸へ、小船で漕ぎつけるにしても何人かに賴んで、その用意をさせなければならぬ。兎に角、土地の有力者を、聞き合せて見たが、庄屋の古庄寅次といふ者が、土地に於て、萬事の取締をして居るといふので、古庄を訪ねる事になつた。

暗く寂しい路を、漸くやつて來て、古庄の表戸を叩いて、頻りに呼び起したが、家の內では、何かコソ〳〵と、囁いて居るのみで、更に出て來るものもなかつた。

『オイ、變だな、どうしたのぢやらう』

『さうぢやのう、返事をしたやうぢやつたが、一向出て來る樣子のないは、どういふ譯ぢやらう』

『何か、ゴタ〳〵やつて居るが、何だか變だぞ』

井上は、少し癇癪を起して、はげしく戸を叩くと、猶ほ家內は、ゴタ〳〵して、容易に出て來さうもない。伊藤は俄に氣がついた、といふ風で、

『こりや不可、この服裝を見ろ』

と、自分の體へ指さした。井上も、手を拍つて、

『成程、こりや、不可哩』

『とに角、船へ引取つて、服裝を變へて來よう』

『それが、可からう』

英吉利へ、行つて以來、洋服姿を、怪しく思はなくなつた、二人は、橫濱へ着いても、その儘、服裝を變へずに居たのだ。姫島へ着いても、迂濶して居て、洋服姿の儘、上陸して、古庄の門口に立つたので、家內のものは、其の姿を覗き見して、恐らく夷人と、思ひあやまつたのに違ひない。それで、ゴタ〳〵して居て、容易に戸を開けてくれないのだらうと、氣がついたので、二人は、直に船へ引返して、かねて橫濱から用意して來た、日本服に着かへて、また上陸して、古庄を訪ねると、今度は、すぐに開けてくれた。それでも、頭髮が、違つて居るので、まだ何となく、變に思つて居るやうだ。

『我々は、決して怪しいものではない。橫濱へ行つて居た、長州のものであるが、海へ渡り度いと思ふて、小舟の用意をして貰ひ度いが、どうぢやらうかな』

『へへー、周防へ渡るんで御座いますか』

『左樣ぢや』

『へー』

『實は、毛利樣の御用で、橫濱へ行つて居たものぢやが、急に萩の御城下へ、行かねばならんのぢや、どうか船を出してくれ』

伊藤は、懷裡から金を取り出して、それを紙に包んで、

『さア、これは船賃ぢや。また乙れは、其方へ禮金のしるしぢや。取つて置いてくれ』

『へー』

『至急に、心配たのむ』

話の樣子では、毛利の家來に違ひない。頭髮の結ひ振りの、變つて居るのも、何か仔細があるらしく思はれる。是れは其要求に應じて、船を出さぬと、跡の祟りが恐ろしい、と思つて、

『よろしう御座います。船を出しませう』

『さうか、それは忝けない』

『何しろ、夜更けて御座いますから、曉天まで、御待ち下さいませ』

『急ぐのぢやから、直に何うぢやらう』。
『船子が、何と申しますか』
『船賃も、望み通り出す、酒料も遣はさう。何とか盡力してくれまいか』
古庄も、終に說きつけられて、船を出す事になつた。
それでも、却々手間取るのは、田舍の人の平生である。殊に船子は、時間に少しも構はぬから、二人の急ぐ割に、はやく支度は出來ぬ。そのうちに、漸く船の用意も出來て、二人は乘り込んだ。古庄は、船まで送つて來た。
斯くて、富海へ着いたのは、正午頃であつた。かねて用意して來た、深編笠を冠り、人目を避けて、上陸した。長く散髮になつて、居たので、未だ本當に、髷に結ふ丈けに、髮が長くなつて居ない。山口へ乘込むまでは、知る人に逢ふのは、却つて迷惑であるから、顏をかくして行かう、と、するのであつた。
三田尻の代官に、湯川平馬といふ人があつた。井上の極く友情のよかつた人で、伊藤も、一兩度は逢ふて居る。よく他の話の解る、情合のある人であるから、此人に賴んで、山口まで、無事に行けるやうに、盡力して貰はう、といふので、道を急いで三田尻へ、遣つて來た。
その頃に、代官や郡奉行と云へば、非常に權力を持つたもので、湯川が、三田尻に於ける勢ひは、領主の毛利侯に亞いで、ナカ〳〵偉いものであつた。
『たのむ、たのもう』
と、大きな聲で訪ふた。執次の家來は、
『どーれ』
と、應へて出て來た。
『湯川殿、御在邸ならば、御目にかゝりたい』

『ハツ、誰方樣で御座りますか』
『些と仔細あつて、姓名は申かねるが、かねて湯川殿とは、御懇意にいたしたもので御座る。宜しく申上げて下され』
何だか變な奴だ、とは思つたが、その頃には、斯ういふ事は有勝であるから、執次のものも、強ては押返さぬ。
『しばらく、御待ち下さい』
と、いつて、奥へはいつた。二人は、玄關に立つて、湯川の出て來るのを、待つて居る。

四

『ハツ、申上げます』
『何事か』
『只今、お玄關へ、怪しき武士二人、御面會いたし度い、と申して、控へて居ります』
『姓名は……』
『仔細あつて姓名は申されぬが、かねて御懇意にいたし居るものなる由、申居ります』
『ふふーむ』
湯川は、しばらく考へて居たが、やがて立上つて、玄關の次室へ、出て來た。
襖の隙から、覗いて見ると、顏は見えぬが、その姿には見覺えがある。ずツと玄關へ出て、
『御訪ね下されしは、誰殿で御座る』
『湯川氏、その後は……』
編笠を脫つて、先づ井上が挨拶した。
『やツ、井上氏か』

『相變らず御健勝で、何よりの事で御座つた』

伊藤も、笠を脱つて、

『まことに御久しう御座つた』

『やア、俊輔どのか』

湯川は、驚き且喜んで、

『さ、お上り下さい』

『御免……』

二人は、湯川に從いて、座敷へ通つた。湯川は、聲をひそめて、

『何日歸られたか』

『昨夜、姫島へ着いて、すぐに富海へ、小舟で漕ぎつけ、すぐ樣御訪ね申したのぢや』

『左樣で御座つたか』

『さて、湯川氏、その後の藩の狀態は、何ういふ風で御座る』

『僅に一年の間に、その變り方は、非常で御座つた。京都は、薩藩と會津藩が聯合して、何事も思ふまゝに振舞ひ、それが爲めに、我藩は、禁裡守護職を停められました』

『それは意外千萬、全體どういふ理由で御座つた』

『何の罪ともなく、只だ京都を逐はれる事に、なり申したのぢや』

『ふゝーむ』

『その事については、國司、益田、福原の三國老が、只今上京中で御座れば、いづれ眞の事情は、明白に相成るで御座らう』

『桂小五郎殿は、如何なされたか』

『今は、行方不明で御座る』

之れを聞くと、伊藤は驚いた。井上も驚いたらうが、伊藤の驚きは、一層ひどかつた。

『桂先生、どこへ行かれたか、御存じないか』

『多分は、京都に居られる事と想像いたすが、更に何の音信も、ないやうで御座る』

『それは、驚き入つた』

『何に致せ、京都は、以前と違ひ、全く佐幕派の力が、一ばいで、如何とも致しやうは御座らぬ』

湯川は、自分の知り得た事丈けは、すつかり物語つたので、二人にも、大體の事情は呑み込めたが、それにしても、僅に一年の間に、世の態が、之れまでに變らう、とは思はなかつた。

二人からは、交々に密航の事情を打明け、西洋の有樣などを物語り、今度の下關の戰爭について、之を無事に、治め度い爲めに、立歸つて來た次第も、詳しく語つた。

『實は、斯ういふ次第で、歸國いたしたので御座るが、貴殿の御盡力にて、山口まで、無事にはいれるやう、ひとへに御配慮を、願ひ度く存ずるが、如何で御座らうか』

湯川は、しばらく考へて、

『宜しう御座る。山口まで、御送り申さう』

『それは、忝ない』

『しかし、攘夷派の勢力は、今も却々に、さかんで御座れば、よほど御注意なさらぬと、その目的は遂げられませぬぞ』

どこ迄も、同情を持つた、湯川の注意には、二人も、頻に感謝した。

山口までは、僅の道程であるが、その間には、關所もあり、過激な攘夷派の出沒もはげしく、うつかりすると、二人の身の上が危ないから、これには湯川も、ひどく心配した。二人も、目的を果すまでは、大切な身であるから、注意の出來る丈けは、注意しなければならぬ。湯川の考へでは、二人を、自分の支配下の役人として、山口へ、急行させる事にして、何處までも、代官の用向といふ事にしよう、といふのであつた。それより外に、二人を、山口へ送りつける、安全な方法は、なかつたのである。二人も、それに滿足して、準備の出來るのを、待ちうけた。

編笠の代りに、頭巾を借りて、早輪に乘つた。代官湯川平馬家來、何の何某と、書いた、木札を附けた轎、それに乘つたのだから、先づ安心の出來る譯だ。

山口の城下、竪小路の萬代利七をいふのは、土地でも、屈指の豪商であるが、かねて井上が、懇意にして居たし、井上の家とは、遠い續き緣にもなつて居る。それへ落付く事にして、轎を急がせた。

普通ならば、大手を振つて、親族や友人に、出迎へをされる筈の關國であるが、今は左樣もならぬ。一つ間違へば、生命にも拘るほどの、危ふい事になつて、居るのだ。城下へ着いてから、殿樣に、拜謁の出來るまでの手順も、いろいろと考へねばならぬ。それも、人に知られぬ、苦心の一つであつた。

そのうちに、山口へ着いた。萬代に逢ふて、一と通りの事を話し、これから殿樣へ、拜謁を願ふ手續きを、するのであつた。

五

殿樣に、拜謁の出來るまでは、他のものに自分等が、歸つて來た事を知られては、都合が惡い。湯川の話にも、攘夷黨は、未だ却々に高い、といふ事であるから、自分等の眞意を聞かぬうちに、故障の起るやうな事があつては、折角に歸つて來た甲斐がないのみならず、日本の爲めにも、また毛利の爲めにも、甚だ不利である、と考へて、萬代の家のものにも、堅く口留をした。けれども、殿樣に、拜謁の手續きをするには、誰かに逢はねばならぬ。その人を得ると、得ざるとに由つて、大事は定まるのであるから、それについては、却々に苦心をした。

『オイ、井上、どうする』

『さ、誰れかに秘密、逢ふて見たいが、誰にしようか』

『汝は、交際が廣いのぢやから、誰か善い人を、考へて見なさい』

『それが、却々むづかしいのぢや。唯だ懇意にして居た丈けでは、うつかり逢へんよ』

『役人のうちでは、毛利登人が良い、と思ふが、どうぢやらう』

『それは、己れも、左樣思つて居るが、それまでに、誰れか一人、味方をつくらねばならんから、それに苦むのぢや』

『どうぢや、當家の主人に、相談して見ようか』

『馬鹿なツ、利七に何が解るか』

『イヤ、さうでない。斯ういふ時は、却つて利七のやうなものに、話して見ると、存外に良い智惠の出るものぢや。まア、兎に角、利七を呼ばう』

井上は、輕く見て、容易に同意しなかつたが、伊藤は、利町人ではあるが、斯ういふ事情で歸つて來た、井上や伊藤を、泊まらせてゐる位であるから、一般の町人とは、少しく違ふ所はある。二人に呼ばれて、利七は、相談を受けた。つまりは、毛利登人に、關係をつける迄の、連鎖になる人を、誰れにしたものか、といふの相談であつた。利七は、しばらく考へて居たが、

『左樣いふ御役を、なさる御方には、かねて井上樣の御仲間の御一人、杉德輔樣は、如何で御座いますか』

井上は、思ひ出したやうに、膝を打つて、

『おう、さうぢやツた、杉ならば良い、と思ふが、此地に居るかしら』

『この頃、おかへりになられました』
『どこへ、行つて居つたか』
『亜米利加とやらへ行かしやツて、この頃歸つて來られましたのぢや』
『うむ、左樣か、それは猶更ら、好都合ぢや。すぐに呼んで、貰ひ度い』
『宜しう御座います。私が行つて參りませう』
『左樣してくれたら、一層好都合ぢや』
と、相談は、忽ち運んで、利七は、杉を迎ひに行つた、
後年の杉孫七郎が、卽ち此時の德輔である。井上とは、特に深く交つて居たが、井上等の英吉利へ、行つた跡で、幕府の使節が、亜米利加へ行く、といふので、毛利の方からも、誰れか一途に送らう、となつて、杉が、行く事になつた。それであるから、杉は、既うハイカラになつて居たのだ。
利七から、事情を聞いて、杉は、直ぐに遣つて來た。
『やア、井上か、おう、伊藤も一しよか、先づ無事で、結構ぢやツた』
『お前も、壯健で何よりに思ふ』
『己れは、亜米利加から歸つて來て、初めて貴樣等が、英吉利へ、行つた事を知つたのぢや。よく奮發をしたものぢやと思つたよ。身體に故障がなくて、可かつた』
『お前も、變りがなくて可かつた』
杉は、伊藤を顧みて、
『まア、伊藤も、大奮發ぢやツたな』
『うむ、己れも、行つて來た』

『井上の遣連れでは、隨分困らせられたらう。何しろ、我儘な奴ぢやからな』
『イヤ、その心配は少しもなかつた。却つて己れの方が、ひどい厄介をかけたよ』
と、これから滯在中の奇談やら、途中の珍談で、しばらくは話が賑はつた。
『時に、頼みがある』
『何ぢや』
『利七から、一通りは聞いたであらうが、己れ達が、今度歸つて來た理由は、夷人と戰爭をさせまい、と思つての事ぢや。そんな事をやられては、此國が滅びてしまふ。貴樣も、亜米利加へ、行つて來たら、世界の事も解つたらうが、今は夷人を對手に、戰爭などを行る時でない。それを能く說明して、先づ君公に、世界の有樣を、御話し申上げ度い、と思ふが、それには、毛利登人に、骨折を頼み度いのぢや。お前から、登人へ一應相談してくれる事は、出來まいか』
『可し、承知いたした。己れから、相談して見よう。彼れは、話の解る男ぢやから、喜んで面會をするぢやらう』
『どうか、頼む』
何でも、事が都合よく運ぶ時は、斯ういふ風になるもので、杉が、亜米利加歸りの時であつたのは、二人の爲めに此上もない好都合であつた。登人さへ、諾といふてくれたら、それで、長門守に、面會は出來るのであるから、二人は、杉の歸りを待ち受ける事になつた。

六

杉から、一通りの話を聞いて、毛利登人は、井上と伊藤に、面會する事を、喜んで承知した。すぐに杉と連れ立つて、萬代方へ、遣つて來た。

登人は、杉と同じやうに、二人に、同情して二人の便宜のよいやうに、取計らつてくれる、といふのであるから、二人も大喜びで、腹藏なく意見を吐いた。登人からも、遠慮のない質問をした。その說明には、二人も、ナカ〳〵努めた。

終に、登人は、長門守への執次を、引受ける事になつて、すぐ城内へ行く。

藩士から見れば、二人の英吉利行きは、脫藩して密航したのであつて、殊に、國の禁制を犯して、夷國へ行つたのであるから、恰も罪人の如く、思つて居るが、長門守は、自分が、密に命じて、洋行させたといふ關係から、却つて二人の無事歸國を、喜んだのみならず、歸つて來た、事情が事情であるから、登人の執次に對しては、惡く思つて居ない。其處で、二三の老臣とも、相談の上、明日の午前に、井上へ、對面を許さうと、いふ事になつた。

歸國して來た、二人へ、同時に對面を許さず、先づ井上ばかりといふのは、ちと變な事ではあるが、當時の事情では左樣する外はなかつた。伊藤は、さきに士分に取立てられたけれど、只だ士分といふのであつて、未だ殿樣に、御目見得を許されて居ないので、今すぐに、井上と同時に、對面を許す、といふ事にならなかつた。何でもない事のやうではあるが、その頃の武士として、御目見得以上と、以下とでは、格段の相違があつて、以下の人は、殿樣の前へ出る資格がなかつた。苦勞は、井上と、同じやうにしても、身分の卑い爲めに、對面は許されなかつた。

登人から、此事を聞いた時、伊藤は足摺をして口惜しがつたが、どうも仕方はなかつた。

『オイ、井上、しツかりやつてくれ、己れは、身分が卑いので、拜謁が出來ぬさうだ。貴樣が、一人で行くのぢや。充分にやつてくれ、賴むぞ』

『よろしい。己れは一人でも、二人丈けは働く、決して心配するな』

『どうか、賴む』

翌日になつて、井上は、城内へ行くと、行き逢ふ誰彼は、皆驚きの眼を瞬つて、

『やツ、井上が、どうして歸つた』

と、皆同じ事をいふ。井上は、

『いづれ詳しい事は話すが、今日は、拜謁ぢや』

『えツ、拜謁と、ふゝーむ』

誰一人として、奇異の感にうたれざるものはなく、脫藩の上、夷國へ渡つたものが、ふらりと歸つて來て、すぐ拜謁が出來る、といふのだから、誰にしても、變に思ふのは當然であつた。

他の驚くほど、井上は得意になる。肩を張り、大手を振つて、登城した。

長門守は、重役老臣の四五人を、左右に置いて、井上に、對面するのであつた。

『おう、聞多か、珍らしいのう』

『ハツ、御健勝の體を拜し、恐悅至極に存じまする』

『其方も、無事で可かつたのう』

殿樣は、意外に御喜びであつた。井上は、どれほど嬉しいか判らぬ。

『此度の歸國は、何の爲めか、また英吉利國の狀態も、聞いて見たい、どうぢや』

『ハツ、恐れ入りまする、これより歸國の次第を申上げまする』

是れから井上は、諄々として世界の大勢を說いた。携へて來た、世界の地圖を擴げて、大に文明國の有樣を、恰も見るが如くに說いて、さらに此度の、外國との開戰について、無遠慮の意見を述べた。

長門守は勿論、老臣や重役までが、すつかり感心して了つた。殊に、今迄の考へと違つて、夷國の狀態が、非常に進歩して居る事は、漸く悟り得たのである。井上は、益々雄辯を揮つて、戰爭の恐る可き所以を說いた。

『右樣の次第に御座りますれば、何卒この度の開戰については、御再考のほど願ひ上げまする。萬一にも、和議御望

みと御座りますれば、私共二人に於て、夷人に對する掛合は、御引受け仕りまする。御當家の御名折に、相成りますまいやうの儀は、決して仕りませぬゆゑ、御任せ下さるやうに、偏に願ひ上げまする』

と、殆ど二た時に渉つて、歸じ立てた。長門守は、

『其方の誠意は、余も、能く相解つた。乍併、今直に之れを決する事にもなるまい。父上の御思召も如何あるか、また老臣どもの考へも、一應は糺して見ねばならぬ。其方等は、萬代方に差控へて、余の沙汰を、待ち受けるやう致せ』

『ハツ』

拜謁は、之れで濟んだ。井上は、別室へ下つて、老臣や重役を集め、いろ〳〵外國の話をして、其日は歸つて來た。

七

『どうぢや、うまく纏まりが、つくかな』

伊藤は、心配相な顏付で、斯ういふた。井上は、苦笑ひを漏して、

『うむ。どうも至難しさうぢやよ』

と、答へた。伊藤は、意外に思つて、

『そりや、どうしてか』

『どうも、かうもない。己れのいふ事が解らぬらしい』

『えツ、貴樣のいふ事が解らぬ』

『君公には、お解りになつたやうぢやが、老臣や重役には、どうも解らぬ』

『貴樣が解るやうに話さぬのぢやらう』

『そんな事はない、己は、能く解るやうに話したのだが、何分にも疑惑を有つて聞くのぢやから、しやうはない』

『疑惑とは、どういふ事に疑惑があるのか』

『多分は、己れを、夷人の間者と思つて居るらしい』

『怪しからん』

『いくら何といふても、その疑惑があるから、とても駄目ぢや』

『しかし、君公にさへ御解りがあれば、それで可いではないか』

『君公にばかり御解りがあつても、老臣や重役に解らねば、矢張り君公の御思召を遮ぎるから、つまりは駄目になるのぢや。生命がけで歸國した、己れ達の苦心も、水の泡ぢやよ』

『ふーむ』

流石に二人も落膽して、しばらくは顏を、見合せて居た。

それから、萬一の場合には、どうしたものかといふ相談になつて、その夜は一睡もしなかつた。

翌日の正午過になると、毛利登人が、訪ねて來て君命を傳へる、といふのであるから、伊藤は、次の座敷に退つて井上のみが登人の前に、手をついて控へた。

『君命を傳へる』

『ハツ』

『此度、其方等の歸國は、偏に祖國を思ふの情より出たる、至誠の爲めである事は、君公に於かせられても、よく御存じではあるが、さればとて、濫論は、既に開戰と、一決致し居る事ゆゑ、今更に變更は相成りがたし。他日、或は其時期も參るであらうが、此場合には、潔ぎよく夷人と、一戰を試むる外はなきに依つて、此旨を、井上へ申聞かせよ、との事で御座つた』

斯ういふ御沙汰では、もう致方はない。井上は、

『まことに殘念千萬の儀とは存じますれど、君公の御思召とありましては、唯だ服從の外は御座りませぬ』

登人は、如何にも氣の毒だ、といふ同情もあつて、頻りに慰めてくれた。

『足下等の苦衷は、千萬御察し申すが、事此に至つては、致し方もあるまい。速かに夷人の方へ、此旨を御傳へ下されい』

『委細心得ました』

『伊藤氏にも御面會申さうか』

『どうぞ、御逢ひ下され』

伊藤は、登人に面會して、種々と事情も述べれば、意見も吐いたが、つまりは、それをいふだけの事で、一たび下つた君命を、動かす事は出來なかつた。

『而て、足下等は、是から何とせらるゝか』

『一應は先方へ、和議の見込みなき事を答へて、身を退くといはれるが、いづれへ退かれるか』

『身を退く外はありませぬ』

『さ、それについては、未だ確といたした、考へは御座らぬ』

『念の爲め申入れ置くが、實は、足下等の處分につき、重役の間に、いろ〳〵の說も御座れば、一時いづれかへ身をかくされたら、どうぢや』

『拙者等に、處分とは……』

『脫藩の罪を犯すのみならず、國禁を破りての密航、この儘にいたし置ては、幕府への申譯も相立たず、また藩中の取締も出來ぬ、といふので御座つた』

『ハヽー』

『右樣の次第で御座れば、一刻も速く、身をかくす事、然る可しと存ずる。そのうちには、我等より御取做し仕る故、先づそれ迄は……』

『御厚志のほど、有難く存じ申す』

登人は歸つた。跡に二人は、しばらく辭もなく、互に顏を見合せては、太い息を吐くばかりであつた。

『どうする覺悟か』

と、伊藤は、井上に向つて、斯ういふた

『行き詰るまで、行く丈けぢや』

井上の答へは、極めて無雜作ではあつたが、憂愁の色は、顏に現れて居た。

『姬島沖まで引返して、何とか答へてやらぬと惡いが、それは何うする』

『これから、直ぐ行かう』

八

『左樣か』

自分等の身の振方は、いづれ後の事として、先づ夷人の方へ、和議の事について、有體の事を通ずるのが、差當つての仕事であるから、二人は、手早く仕度を整へた。

萬代は、始終を聞いて、二人に同情はしたけれど、是も同情するといふ丈けの事であつた。

二人は、早轎に乘つて、これから三田尻へ急いだ。湯川にも逢ふて、一通りは事情を打明け、それから小船を雇ふて、姬島沖に待つて居る、英吉利の軍艦へ行く。

英吉利公使の代理として、サトーは、軍艦に待つて居たが、伊藤と井上からの返事は、約束の期限になつても、更に音沙汰なしであるから、その翌日には、出發の準備にかゝつた。ところへ、二人は、小船で乘りつけた。

たとへ、一日は後れても、二人が、やつて來たので、サトーは喜んでくれた。

『毛利さん、どうありましたか』

サトーの方から乘出して、斯う質かれたので二人は、恥かしい氣がした。井上は、思ひ切つて、

『毛利さん、少しも解りません』

『どうなりました』

『和睦は出來ません。どこまでも戰爭するさうです』

『えツ、いくさします』

『さやう』

『和睦の希望ありませんか』

『さうです。いくさする、といふて居ります』

『ふーむ』

二人から、是れ迄の經過を、詳しく傳へて、

『斯ういふ次第ですから、私の力にも及びません。此上は遠慮なく、戰爭して下さい』

『よろしい、よく解りました。これから、横濱へ歸ります。いくさ、それからあります』

『しかし、サトーさん』

『何あります』

『いくさしても、また和睦の時來ると思ひます。その時は私參りますから、よろしく願ひます』

『よろしい〳〵』

其處で、二人は、サトーに別れ、三田尻の海岸から上陸して、身をかくして了つたが、杉德輔と毛利登人には、その隱れて居る所を、そツと知らせて置いた。

サトーは、空しく横濱へ引返して、此旨を、オールコックへ復命した。此に於て、各國公使は、更に會議を開いて、いよ〳〵下關へ攻寄せる事を決した。四ケ國の聯合艦隊十九隻は、日ならずして下關へ着く。戰爭は、是れから始まるのであつた。

毛利の方では、京都へ先發した、國老の三人が、まだ何ともいふて來ないうちに、池田屋の事件が知れたので、一同の憤慨は非常なものであつた。殺された藩士は、僅に數名であるが、その計畫の大半は、藩の方針と違はぬのみならず、京都にかくれて居る、桂小五郎も、その謀議に、與つて居た事は、大概のものは知つて居る。その裏をかゝれて、慘殺を恣まにされたのであるから、血氣の連中が、非常に憤慨したのも、無理はない。それに、新選組の爲ず所は、極端に幕府を、佐ける心からであつて、その一擧一動は、すべて毛利の方へ、觸れてくる。於、此、長門守の決心も堅くつて、いよ〳〵出發する事になつた。

是れには、老臣のうちに、相當の反對もあつたが、長守門は、一切しりぞけて、親ら上京して、大に佐幕派と爭ひ、朝廷を諫奏する、といふ氣込みを以て、供揃へも充分に整へ、山口の城下を、出發した。

此間に、京都では、既に戰爭が始まつて居たのだが、現代のやうに、電話や電報の便がなかつたので、長門守は、少しも其事情を知らず、豪い勢ひて押出した。船で、瀨戸內海を横切り、藝州多度津へ着いた時、京都から注進があつて、

『九月十七日の早天から、京都では開戰になつて、終日の戰ひも、毛利勢の負けとなつて、寺島忠三郎、久阪玄瑞、入江九市、眞木和泉等は討死し、國司、益田、福原の三國老は、僅に敗兵を纏めて、今引上げの最中である』

といふのであつた。

流石な、剛情の長門守も、是れには驚いて、何と施す可き術もなく、しばらくは悵然として居られた。

京都が、此有様とあつては、今更上京した所で、何うする事も出來まい。大阪までは行ける、としても、京都へはいる事はむづかしい。強てはいらうとすれば、また戰爭をせねばならぬ。此小人數では、とても左樣ことは出來るものでない。さればとて、此儘歸國するのも、殘念である、と、頻に悶えて居た折柄、國元よりの注進で、英、米、佛、關四ケ國の軍艦が、いよ〳〵下關へ、押寄せて來る、との事であるから、是にも對手にならねばならぬ。前後に、敵を引受けては、如何に藩士が奮戰しても、結局の勝利は覺束ない。此場合には、戰爭を一方づけて了ふ外はない、といふ事になつて、兎に角、三田尻まで、引返す事になつた。

京都の戰爭の結果としては、幕府が、毛利へ對して、充分に責める事が出來る。理窟は何うあらうとも、宮城に向つて砲撃を加へた、といふ一事で、毛利を朝敵にして、兵を起して來るに、極つて居る。同時に、夷人が、下關へ軍艦で、押寄せて來ては、前後の大敵に對して、如何ともしやうがないから、どちらかと和睦して、戰爭を、一方にして了はねばならぬ、といふ事は、誰が考へても、此上の策はないのだ。斯うなつて見ると、井上や伊藤のいふた時に、はやく夷人と、和睦して置けば可かつたのだが、今となつては致方がない。長門守の一列は、漸く三田尻へ着いて、宮市の天滿宮へ、假の本陣を定めた。

潜伏中の伊藤井上

一

高杉晋作は、來島又兵衞の上京を阻止めようとして、却つて來島に嘲罵された所から、すぐ其足で、上京して了つた。藩命に依つて、來島を、抑へに行つたものが、その復命もなさずして、自儘に上京した、といふのは、甚だ宜しくない、とあつて、京都の藩邸に居殘つて居る、乃美織江に命じて、高杉に、歸國を申渡す事にした。高杉も、種々理窟はいふて見たがつまりは、歸國する事になつて、二三の藩士に送られて、萩の城下に、歸つて來た。その罪狀の取調などは爲る必要もなく、無斷上京の點丈けで、直に謹愼を命ぜられ、親戚の大澤といふ人の家に、預けられた。

此事は、伊藤と井上が、英國へ向つて出かけた、後の出來事であるから、二人は、少しも知らなかつた。今度歸つて來て、始めて其事情を聞いたので、すぐにも見舞に行く可きであつたが、何分にも大切な用事に、忙殺されて居て、まだ見舞をする暇がなかつた。然るに、講和の事も駄目になつて、二人は一時、身をかくす事になつたので、此際に見舞をすれば、敢て出來ぬ事もない、といふ所から、殊に、井上は、高杉と、深い交際があつたので、是非行き度い、といふ氣になつて、

『オイ、伊藤、已れは、高杉に逢ふて來るぞ』

『そりや宜しくない。今しばらくは、姿を見せぬ方がよい。萬一の事でもあると、折角の苦心も、水の泡になる。お前が、高杉を訪ねよう、とする、友情の美しい事は、改めていふ迄もないが、さればとて、それが爲めに、大事を誤るやうの事があつてはならぬから、此際は、止めた方がよからう』

『貴樣の心配も、無理ではないが、しかし、高杉の窮明を聞いて、之れを見舞つてやらぬは、友人の情誼にも、缺ける譯だ。殊に、高杉丈けには、己れの心も打明けて、我等二人の身の上に、萬一の事があつた場合には、その跡を引受けてくれるやう、頼んで置く必要もあるのぢやから、己れは、何うしても出かける、つもりぢや』

『宜しい。それでは、行つてくるがよい。けれども、高杉に逢ふたら、すぐ引返して來い。外へ行つては、不可ぞ』

『よし。それは、大丈夫ぢや』

伊藤が承知したので、井上は、支度して出かけた。

大澤の家は、山口の城下に在るので、萩の山の中からは、大部道も遠い。その途中は、流石に、井上も心配ではあつたが、幸ひ誰れも、井上と知るものは、なかつたらしい。漸く山口へ着いて、大澤の家を訪ふた。

『おう、井上か』

『やア、久しかつた』

『どうして、來たか』

『高杉に、逢ひ度うて來たのぢや』

『えツ、晋作に……』

『うむ、高杉が、押籠られて居る、と聞いて、態々やつて來たのぢや』

『足下は、今どういふ身分ぢや。それを能く考へて見るがよい。高杉を、見舞になどといふ、饒に大膽な男ぢやのう』

『とに角、逢はせてくれ』

『そりや不可。逢はせる事は出來ぬ』

『何故、不可か』

『何故かといふて、彼れは謹愼中ぢや。足下も、明るい身分ぢやあるまい』

『その通りぢや』

『それで、高杉に、逢はせる事が出來るか。よく考へて見るがよい。馬鹿々々しいにも、程度のあつたものぢや』

大澤は、後日の迷惑を思ふて、しきりに拒むのであつた。井上の方は、豫ての覺悟であるから、少しも撓まぬ。

『高杉が、謹愼を命ぜられて居る事は、承知の上で參つたのぢや。しかし、一切の人に、面會を許さぬ、との御沙汰が、下つて居るとも思へぬ。それともに、高杉には、如何なる人の面會も許さぬ、といふ事に、なつて居るのか。それを判然、聞いて置き度い』

井上は、長門守の左右に侍して居たから、斯ういふ事には、よく通じて居る。高杉は、謹愼を命ぜられて居るが、必ず何人にも逢はせぬ、といふほどに嚴重なものでない位の事は、知り抜いて居るから、その急所をついたのだ。もし、大澤が、何人にも逢はせぬ事に、なつて居る、と答へたら、誰かに逢つた事を、他日になつてから證明して、大澤を責めてやらうの考へであつたらしい。大澤にも、それは能く解つたから、此上に強て、拒む事は出來ず、どうも仕方がないから、逢はせてやらう、といふ氣になつて、

『實は、誰にも逢はせぬ事に、なつて居るのではあるが、他ならぬ足下の事ではあり、高杉と、平生の交際も深いのであるから、秘密にて、逢はせて進ぜよう、だが、この事は何處までも、內分にたのむ』

『よろしい、それは、大丈夫ぢや』

二

百獣の王といはれる、獅子の如き猛獣でさへ、一たび檻の中へ入れられたら、温柔しさこと羊の如くなる。高杉は長州藩士中の獅子であるが、今は囚はれの身となつて、座敷牢のうちに、眠つて居る。京都の敗戦も、下關の敵艦襲來も、只だ風の便りに聞くのみで、如何に焦るも、今は如何ともする事が出來ず、只だ空しく憤慨するのみであつた。

『オイ、高杉どうした』

牢格子を、コツ〳〵叩きながら、聲をかけたものがある。漸く眠りから醒めた高杉は、

『誰れか、やかましい奴ぢや』

と、いひながら振返つた。

『己れぢやよ』

『やツ、聞多か』

『おう、高杉、どうした』

『無事で歸つたか』

『貴樣も、よく達者で居たな』

二人は、格子を隔て、互に其身の無事を、祝し合ふたのであつた。

『どうして、歸つて來たか』

『さ、それには、種々の物語りがある』

『左樣ぢやらう』

『少し話して行き度いが、そこへ、はいらうか』

『うむ、それが可からう』

『どうして開けるのか』

『鍵は、大澤が持つて居る。それを借りて、此錠を開けてくれ』

『よし、承知いたした』

井上は大澤の居間へ、ヅカ〳〵はいつて來た。

『もう濟んだのか』

『イヤ、まだ話はすまぬ。これから彼の中へはいつて、ゆつくり話さう、といふのぢや』

『えツ』

『鍵を貸してくれ』

『ば、ば、馬鹿な事を申すな』

『貸せぬか』

『貸す事は、出來ぬ』

『今、高杉の話では、大澤から鍵を借りて開けろ、といふのであつたが、是れ迄にも、左樣いふ事が、あつたに違ひない。どうしても貸せぬ、といふなら、無理にとはいはぬが、その代り、己れは、藩廳へ自首するぞ』

『何を自首するのか』

『大澤が秘密で、高杉に逢はせてくれたが、まことに申譯のない事をした、といふて、自首するのぢや』

『怪しからん。そんな馬鹿な事を、されて堪まるか』

『それでは、貸してくれるか』

『さ、それは……』

『貸すか、貸さぬか、はツきり返辭をしろ』

大澤は、トウ〳〵閉口して、鍵を貸した。

『どうも、貴樣のやうな奴に、情をかけるのは、却つて害をなす、實に驚き入つた奴ぢや』

『ハツハ、、、、、そんなに怒るな』

『これが、怒らずに居られるか、忌ま〳〵しい事ぢや』

井上は、大澤の口小言を、聞き流して、座敷牢の前へ來た。やがて、錠をはづし、格子を開いて、はいつた。

久し振りの對面に、異れる互の境遇だ。二人は、無限の感慨にうたれて、しばらくは、手を取り合ふて、涙にくれるのであつた。

『貴樣が、英吉利へ渡つた後、己れは馬鹿な事から、斯ういふ目に、逢つて居るのぢや。しかし、貴樣も、苦勞をした事であらう』

『己れは苦勞しても、體は自由ぢや。貴樣は、斯んな所へ入れられて、さぞ殘念であらうが、しばらくの辛抱ぢや。そのうちには、改めて迎ひに來るぞ』

是れから、井上は、今度の歸國について、その考へを、一通り語つた。夷人との和議を謀つて、自分等の希望は破れたが、近く其希望も、行はれる事があらう、といふ事も、語つた。高杉は、思はず嘆息して、

『まことに、殘念な事ぢや。己れが、外に居たら、大に働いて、貴樣の希望も、何とか目鼻がつかうに、今の身の上では如何ともする事が出來ぬ。此上は、貴樣と、俊輔の力で、毛利の社稷を救ふてくれ、この事は、幾重にも頼む』

『己れは生命がけでやるが、己れや、伊藤の身に、若し變事があつたら、その跡は、貴樣が引受けてくれ』

『そりや、引受けるが、此境遇ではしやうがない』

『イヤ、さう力を落すものではない。おきに許されて、元の身になるは、知れて居る』

互に大事を、語り合ふて、自分等の身に、變事のあつた時は、その跡をたのむ、といふのであるから、實に當時の志士の面影と、心事の頼母しさが、現はれて居る。いくら話つても、話のたねはつきぬ。時刻も長くなつたので、大澤の心配も察して、

『今日は、これで別れやう。また、其うちに逢ふ事にする。隨分身を大切にしてくれ』

『己れよりは、貴樣の身が、今では危ない。あまり外出せぬ方が、可からう』

『うむ、それは心配するな』

盡きぬ名殘と、いふほどの事ではないが、綿々の情を殘して、井上は、高杉に別れて、大澤の家を出た。

その跡から、尾けて來る、武士があつた。井上は、少しも知らぬ容子で、ぶらり〳〵と、やつて來たのは、寂しい屋敷町の曲角、不意に背後から、

『井上ではないか』

と、聲をかけられて、流石の井上も吃驚した。

二

『どうも、酷肖て居る、とは思つたが、今頃、この邊を、歩いて居やう、とは思はなかつたので、彼の小路から尾いて來たのぢや。どうして此邊を歩いて居る。危ない事では、ないか』

と、續けさまにいはれて、井上は、答へる間が、なかつた。

人であつた、粟屋太中であつた。

『おう、粟屋氏か、意外の所で御目にかゝつた』

『夷國から歸られた、といふ事は聞いたが、そのうちに、再び姿をかくされたので、實は其行方を、捜して居たのぢ

や』

『それは、何とも恐縮の至りで御座つた』

『今更、彼是れ、いふも詮なき事ではあるが、彼の儘に、一度の便りもせぬとは、足下も、薄情の致し方ではないか』

『イヤ、それをいはれては、面目次第も御座らぬ。彼の砌りに、志道の方へも、詳しい仔細を、いはず、只離縁の申込みを致した儘で、出立いたしたので御座つたが、却つて其仔細を、いはなかつたのは、深い考へのあつて、致した事ぢや。いづれ、貴下にも、御話はいたすが、今日は、是れにて御免蒙る』

『まア、待たつしやい』

『ちと取急ぐ、用事も御座れば』

振切るやうにして行かう、とする、井上の袖を抑へて、

『何としても、此儘御別れ申す事は相成らぬ。兎に角、拙宅まで、御同道下され』

『今日は、御勘辨下され』

『イヤ、それは相成らぬ』

と、彼是れ争ふて居るうちも、人目を憚る身の井上は、頗る弱つた。粟屋は、井上の袖を、抑へて放さぬ。遂々、井上は、粟屋の爲めに引張られて、其宅へ連れられる事になつた。

粟屋が、何故、井上を、無理に引張つて行かう、とするのであるか、それには、深い事情が、あるのであつた。井上が、英吉利へ行く時に、志道の方へ、離縁の申込みをしたのみで、その事情は、少しも申送つてないのみならず、粟屋には、手紙もやつてなかつたので、志道家から、粟屋へ、嚴重の掛合があつて、粟屋は、非常に迷惑をしたので、どうしても此解決は、粟屋が、つけなければならぬ事になつて居たのである。殊に志道の娘、即ち井上の妻が、乳呑子を抱へて、粟屋を尋ねては泣くので、粟屋も、困り切つて居たのだ。井上が、歸國したとの噂が、ぱツと立つたの

で、その娘は、いふ迄もなく、志道の親戚は、それ〴〵に、やつて來て、粟屋を責めるから、粟屋は、實に弱り切つた。しかし、井上の行方が判明ぬので、頻に尋ねて居た所へ、井上の姿を見付たから、どうしても此際に、その始末をつけてしまはねば、あとの事が面倒になるから、そこで、井上を、抑へて放さなかつたのである。

『全體、足下は、何うしたといふものぢや。可愛の子まで、生んだ妻を、この儘に、見捨てる覺悟か』

井上は、如何にも困つた、といふ顔付で、

『それをいはれては、一言も御座らぬ。が併し、粟屋氏、拙者の苦衷も、お察し下さい。脫藩同樣に拔出して、夷國へ渡る身は、いづれ重い處分を受けねばならぬ。左樣なつた場合に、養家へ累を及ぼしては、いよ〳〵以て相濟まぬ、と思つて、離縁を申込んだ迄の事で、縁戚の關係さへ、絶つて置けば、拙者が、何う處分されやうとも、累を志道家へ及ぼす恐れはあるまい、と、斯う考へての事からで、決して輕薄の心から、致した事では御座らぬ、貴下に、不滿を抱いて居たのは、何共相濟まぬが、しかし、拙者の身にもなつて考へて貰ひ度いのぢや』

『御道理千萬、貴下の御苦心は、御察し申すが、拙者の立場にも、御同情下され』

双方が、同じやうな事をいふて、互に苦しい境遇を、語るのであつた。粟屋は、考へて居たが、思ひ切つた樣子で

『然らば、御尋ねいたすが、足下は、志道家へ復歸せらるゝ御考へか、それを聞いて、置き度い』

『さ、それは……』

『實は、その儀について、志道家から、我等へ、度々の談じもあつて、何と答への致しやうもなく、これには閉口致

して居るのぢや、足下の腹臓なき意見を、聞いて置かねば、先方へ、答へのいたしやうもないによつて、これ丈は答へて下され』

英吉利へ、渡る時には、ホンの一時のつもりで、離縁を申込んだのであるが、今となつては其儘に、志道家へ、復、歸し度いのが、井上の希望である。けれども、粟屋に對しては、まさかに左様ともいへず、さればとて迂濶して、言質を取られては、跡が面倒になる。井上も、此質問には、何と答へてよいか、鳥渡苦んで居る。粟屋は、井上の躊躇する、容子を見て、頻に返答を聞かう、とするので、井上は、いよ〳〵困つて了つた。

四

折柄、ドヤ〳〵と、はいつて来たのは、志道の娘に、親戚の女が附添ふて、井上を遁すまいとて、粟屋の知らせを得て、やつて来たのだ。

之れを見ると、井上は、いよ〳〵困つた。今更に、逃げ出す事もならず、只だ腕を拱んで、考へて居るばかりだ。粟屋は、頻に眼を働かせて、井上に附きまとへと、教へるのであつた。井上が、洋行する時に、志道の娘は、既う孕んで居たのだ。生れて漸く笑ふ事を、覚えた位の、可愛の嬰兒を、抱いた儘で、井上の側へ坐つた。

『よう御歸り下さいました。御留守中に生れましたのは、此兒で御座います』

と、いひながら、井上の膝へ、嬰兒を載せた。斯うなつては、井上も、絶體絶命、どうする事も出来ぬ。膝に載せられた、嬰兒の顔を見ると、ニコ〳〵笑つて居る。天下の大事に、身を委ねて、妻子に對する、愛情を捨てた、とはいへ、流石に 腸も、九斷されるの思ひであつた。

『妾に、不都合がありますのなら、如何やうにも御詫をいたしまするゆゑ、どうぞ邸へ、御歸り下さりませ。左樣なりませぬと、妾が、父母に合す顔が、御座りませぬ』

と、はや涙が先きになつて、跡の辭がない。井上は嬰兒を、妻の手に渡して、

『お前に左樣いはれては、何と答へる事も出來ぬが、お前は何の不都合もなく、又、拙者としても、何の不足はないのぢや。たゞ武士の意地といふものがあつて、事と場合に依つては、愚愛の絆も絶たねばならぬ。どういふ事情から、左樣いふ事になつたか、といふ次第は、いづれ判明る時節もあらう。今は只だ、拙者の思ふ儘にしておいてくれ。昔の人の詠んだ歌に、取るは憂し取らねば物の數ならず捨つ可きものは弓矢なりけり、といふのがある。拙者は、今、それと同じ境遇に居るのぢや。お前も、武士の妻として、それ位の事は、心得ても居らう。今日は、何事もいはずに、此儘歸つてくれ。たのむ〳〵』

剛情な井上も、眼に涙を浮べて、しきりに說き諭す。附添の女も、粟屋も、只だ黙然として、此狀を見て居るのみであつた。

やがて、井上は、二十五兩の包みを出して、妻の前に置いた。

『これは、僅少の金子であるが、どうか子供に、衣物でも、つくつてやつてくれ』

といふて、さらに粟屋に向ひ、

『粟屋氏、拙者の心も、解つたで御座らう。いづれ再會の時、また詳しい話は致す。今日は、是れで勘辨してくれ』

と、いひながら、井上は、立上つて行かうとする。それを、妻は、引留めよう、としたが、今度は粟屋が、一同を制して、

『井上の苦心も、察してやらつしやい。跡は、拙者に、まかせて下され』

終に粟屋も、井上に同情して、一同を制するやうに、なつた。井上は、其隙に、外へ出て、ホツと息を吐いた。

これで懲々したから、もう晝間は、歩かぬ事にして、大澤の家で、日のくれるのを待たう、と、復たび引返して來

ると、

『オイ〳〵、其處へ行くのは、井上ぢやないか』

また、背後から聲をか　たものがある。井上は、ギヨッとして振返つた。

『やア、井上、どうした』

意外にも聲をかけたのは、野村和作であつた。

吉田松陰の門下に於て、高杉と久阪を除いては、入江九市が、最も俊れて居た。その九市の弟が、此和作である。

『うむ、野村か』

『貴樣の居る所を、尋ねて居たのぢや。今出逢ふたのは、此上もない好都合ぢやから、さア一途に來い』

『どこへ行くのぢや』

『湯田の瓦屋で、山田宇右衞門殿はじめ、重役の人々が集まつて、藩の前途について、相談を爲る所ぢや。それについて、先日中から、貴樣にも、種々聞き度い事がある、と、いふて御座つた。此處で、貴樣に逢ふたのは、貴樣の爲めにも、好都合ぢやないか。とに角、一しよに來たら、可からう』

『左樣か』

『さ、行かう』

『まア待て、己れの意見を聞いて、どうするつもりか』

『各自の覺悟を定めよう、といふのぢや』

『それでは、同道いたさうか』

野村に連れられて、井上は、湯田へ、行く事になつた。

山口の城下から一里餘、湯田は、溫泉の湧く土地である。今でも、彼の方面は、唯一の遊び場所になつて居るのだ。

井上の兄、幾太郎の邸も、此所に在るので、湯田は、井上の爲めには、子供の時からの馴染の地であつた。多くの溫泉宿のうちで、瓦屋は、最も古い家で、藩の人達は、大概この家へ、遊びに來るのであつた。

山田の外に七八人、毛利の前途を氣遣ふて、今夜は協議を盡さう、といふのであつた。所へ、意外にも、野村が、井上を伴ふて來たので、一同は大喜びであつた。井上を、上座へ招じて、これから世界の事情を聞かう、とするのである。

五

京都の失敗に引續いて、下關へ、夷艦の襲來と、いふのであるから、藩士のうちにも、眞面目に考へて、毛利の前途を、憂へて居るものは決して少くはなかつた。山田の一列も、卽ちそれであつた。其うちの有志が、俄の思ひ立ちから、瓦屋に集つたものであつた。

『井上が來てくれたのは、何よりの好都合ぢや。とに角、夷國の事情から、聞いて見ようか』

と、いひ出したのは、山田であつたが、他のものも、之れに同意して、先づ井上に、種々と質問を始めた。

『我々が、日本に居て考へた事は、彼地へ行つてから、皆な破れて了つたのぢや。第一に、鎖國とか攘夷とか、いふ事の、甚だ間違つて居たのはいふ迄もなく、それは只だ、一場の夢想であつた、といふ事も、すつかり判明つたのぢや。世つて、攘夷を唱へたのは、全く世界に通用せぬ、頑迷な僻論であつた、といふ事界の開けた狀況は、日本に居て、考へて居るやうなものでは御座らぬ。假りに攘夷を行ふとしても、いざ開戰となれば、一と障へもなし得ず、敗軍する事は、明白ぢや。武器の及ばぬ事は、既に御承知の通り、兵士の訓練が行屆いて居る點も、今更說明するには及ばぬ。殊に、夷艦が、我兵船に、優れる事は、先般の海戰でも、御解りになつた筈ぢや。拙者が、斯く申せばとて、決して夷國の爲めに、辯ずるのでは御座らぬ。開戰後の勝敗は、暫く措い

て、攘夷は到底、永久に行はれるものでなく、所詮は、開國の外は御座らぬのぢや。而て見れば、今の場合に、前後の分別もなく、只徒に開戰する事は、眞に無謀の至りで御座る』

と、井上は、頻に非戰論を唱へるのであつた。聞いて居る人は、初め半信半疑であつたが、段々の說明を聞いて、何事にも、西洋諸國の進歩した狀態が、朧氣ながら解つて來る。左樣なると、今迄の攘夷思想に、幾分の動搖も起つて、何となく下關の戰爭が、危ぶまれて來た。

折柄、階下の方で、けたゝましく人の騷ぐ、物音が聞える。耳をすまして能く聞けば、男女の相爭ふ聲であつた。

『不可ませんよ。神代さま、そんな亂暴な事を、なさつては、私が困ります。御藩の旦那樣方に相濟みませんから、どうぞ御勘辨下さい』

『これツ、何で邪魔するか』

『それでも、二階は御貸切になつて居りますから、他の御方は御通し申す事は出來ませぬ』

『たとへ貸切にもせよ、神代直人が通るに、誰が故障をいふ』

『私が申します。そんな事をされては、これから商賣にさはりますから、御通しする事は出來ませぬ』

『えー、邪魔すると許さぬぞ』

『何と仰しやツても、これは不可ません』

しきりに、爭ふて居るのは、當家の女將と、かねて過激派に、其人ありと知られたる、神代直人であつた。互に押退けようと、するうちに、神代の力が餘つて、女將の胸をついた。固より女の事であるから、忽ち突倒されて、ばツたり廊下へ這ふ。

『あれツ、誰れか、來て下さい』

と叫ぶ聲は高かつたが、對手が惡いので、誰れも寄付くものはなかつた。

神代は、足音荒く、二階へ駈上つた。山田等の居る、座敷の障子を、さツと開いて、敷居越に、突ツ立つた儘、ぢツと、座敷を見廻して居る。

『臭い〳〵、これは臭いぞ』

と、いひながら、鼻を、ヒヨコつかせて居る容子が、如何にも、事有り氣に見えて、その憎たらしい態度といつたら張りつけてやり度く、なる位だ。神代は、やがて座敷へ、はいつて來て、井上の坐つて居る前へ、仁王立ちに、立ちはだかつた。井上は、神代の顏を、ヂロリと見た限りで、何ともいはぬ。一同も默まつて、その容子を見て居た。

『臭いと思つたら、此處に、犬が居た。さては、此犬の臭ひであつたか』

それは、井上に對していふのであつた。元來が、疳癪持ちの井上ではあるが、ぢつと堪へて、默つて居た。神代はいよ〳〵增長して、

『やツ、井上ぢやな。犬ぢやと思ふたら、矢ツ張り井上ぢやつた。ハツハ、、、、、』

井上も、今は勘忍袋の緒を切つて、ずつと膝を、乘り出した。

『その井上に、何の用事がある』

『貴樣は、大和魂を、夷人の國へ、忘れて來た、といふ事ぢやが、どうした』

『己れには、大和魂の持ち合せがないから、從つて忘れる筈もない』

『ふゝむ、大和魂を、知らぬのか』

『左樣ぢや』

『然と、大和魂を知らぬか』

『そんな物は、見た事もない』

『可し、見た事がないとあらば、拙者が、見せて遣はさうか』

『見せて貰はう』

『おう、これが大和魂といふ物ぢや』

神代は、一と足退ると、腰をひねつて、スラリと引抜いた。

六

井上の鼻先へ、三尺の秋水を、突き付けて、

『これが、大和魂といふものぢや、よく覺えて置け』

その刀を、ずツと、井上の顎の下へ入れて、少し前へ引くやうにしたから、井上の首が、刀の上に載つて居るやうに見えた。

『どうぢや。もう可いか、それとも、大和魂を、味はうて見るか』

飽迄も、喧嘩仕掛に出る、神代の無禮過言に、傍について居るものも、今は堪らへかねて、何とかいはうとした時井上は、

『大和魂は、大層冷たいものぢやな。此上味はうたら、嘸ぞ滿足の出來る事ぢやらう、ハツハヽヽヽヽ』

『うぬツ、生意氣の事を、吐かし居つて、ぶち斬るぞ』

と、いひながら、刀をひいて、一足さがつた。とたんに、井上も、立上つて、腰の小刀を拔いた。チヤリンと一合して、ばツと離れる。双方とも身構して、

『さア來い』

『何の糞ツ』

遂々はじまつた。

斯うなつては、最早捨て置けぬ。先づ野村が、その間へ割込んで、大手をひろげて遮つた。外のものも、堰しく立つて、双方を宥める。山田が、神代を引摺やうにして、階下へつれて行つた。井上には、野村が、緊かり抱きついて、

『まア、待て』

『放してくれ、もう勘辨相成らぬ』

『怒るのは道理ぢやが、對手が悪いから、しばらく堪らへろ』

『イヤ、對手が悪くても可い。己の覺悟がある。放してくれ』

井上は頻にもがいて、野村の手を、振放さうとする。外のものは、山田が、神代と談判して居る。

止むを得ず靜かになつた。階下の方では、山田が、

『たとへ、如何なる事情があればとて、我々の座敷へ、無斷でふみ込む、といふ法が御座るか、殊に、井上は、我々が無理から連れて來た珍客、それに對して、今の無禮は何事ぢや。餘りといへば怪しからぬ。ちと愼んだら、何うぢや』

流石に、山田は、身分ある人であるから、斯かる場合にも落付はあつて、何處となく重味もある。神代も、斯うなつては困るのであつた。

『尊公等に對しては、如何にも御無禮で御座つた。なれども、聞多の如き、夷國の廻し者は、此儘に致しては置けぬ、また、尊公等も藩に於ては、重き身分の方々では御座らぬか、然るに、彼れの如き、藩の仕置を破り、皇國の禁制を犯して、夷人と交る不都合の奴を、其儘に致して置かるゝのみならず、密かに面會なされては、藩中の取締もつきますまい。拙者の無禮は御詫申すが、此儀についての御返答を、承はり度い』

と、何處までも、車を横に曳く。喧嘩買の名人であつた。山田は苦笑しながら、

『その儀については、別に御答へをいたすに及ばぬ。拙者に不都合あれば、藩廳の方でも、何とか處分を、なさるであらう、夫迄待つて呉れ』

『流石は、山田殿ぢや』

御座らう。また、足下から、その旨を申出られたら、可いでは御座らぬか。それ等の事は、しばらく措いて、今日は御引取り下さい。それともに、我々を對手に、飽迄も爭ふお考へか』

『イヤ、左樣の考へは御座らぬ』

『然らば、速に御引取り下され』

『宜しい。折角の御辭ゆゑ、一時引取り申す。しかし、聞多には、申分が御座るに由つて、再度參るかも知れぬ。此儀は御含み置き下され』

『それは御隨意で御座る』

『では、御免蒙る』

神代は、テレかくしに、肩で風切つて行く。

二階へ引返した、山田は、一同が、頻りに宥めて居る、井上に向つて、

『ヤア、何とも相すまぬ、拙者の不行屆からぢや。何卒御勘辨下さい。神代には、深く戒めて置きました』

井上は、未だ餘憤が、收まらぬ容子であつた。

『勘辨相成らぬ奴なれど、御一統へ對して、差控へます』

『それは忝ない。彼のやうな禮儀も作法も知らぬ、亂暴者に出逢つては、どうにも致し方が御座らぬ』

野村は、殊に、井上に對して、氣の毒の感に堪へた。自分が、無理に引張つて來たのであるから、此場の責任は、自分に歸するのだ。

『オイ、井上、己れが、惡かつたのぢや。どうか堪らへてくれ、神代には、いづれ相當の掛合は致すが、しかし、折角の話も腰折がして、何となく氣が拔けた。これから酒にして、ゆつくり話す事に致さう』

と、いふのを抑へて、山田は、

『今日は、是迄に致して、井上には、一時引取つて貰はう。神代の奴、また來るかも知れぬから、大切な井上に、萬一の事があつてはならぬ、野村には、氣の毒ぢやが、井上を送つてくれ』

『宜しい。承知いたした』

是から井上は、野村に送られて、伊藤のかくれて居る、萩の山の中へ歸つた。

丁度、此時に、長門守は、途中から引返して、宮市へ着いたのであつた。どうしても、井上と伊藤が、下關の戰爭を無事に、をさめる段取に、なつて居たのである。

講和談判の顚末

一

宮市まで、引返して來た、長門守の一列は、評議を重ねた末、とに角、夷人の方と和睦して、專ら幕府に當らう、といふ事になつた。

幕府は、京都の一條から、默つてゐる譯はなく、無論の事、何とか掛合のあるは必定だ。さうなつた時に、下關の方で、戰爭をして居たのでは、如何に、毛利でも、前後の敵を、一時に引受ける事は、出來ぬ。幕府との爭ひは、假し毛利が負けるとしても、その損得は、同じ國民の間で濟むが、夷人と戰つて負けたのでは、左樣はならぬから、大に考ふ可き事である。依つて、先づ夷人と和睦して、幕府との爭ひが片付いてから、さらに夷人と、戰ふも遲くはない。取敢ず夷人と和睦する事にして、それには、夷人の方へ、その申込みを爲ねばならぬ。夷人の方では、むづかしい註文を出すに違ひないから、それに對しては、相當の談判を、爲る必要がある。左樣なると、伊藤、井上が、居てくれねば、どうする事も、出來ない。そこで、二人を呼んで、その意見を聞いて見よう、といふ事に決した。

二人が、潛伏して居る所を、よく知つて居るのは、毛利登人か、杉德輔であらうから、急ぎ呼び出せ、となつて、此旨を申付けた。

伊藤は、同志の密會があつて、その方へ、出かけた跡へ、毛利と杉が訪ねて來たので、井上は、伊藤の歸りを、待合す間もなく、すぐ二人に伴れられて、急ぎに急いで、三田尻へ、遣つて來た。

長門守の御前には、松島剛造始め、重役が打寄つて、評議の最中であつた。井上は、一と通りの挨拶をすませて、末席に控へて居た。

大體の方針が、和睦となつて居ても、未だ武士の負惜みで、つて、評議は、徒らに騷がしいのみで、少しも纏まりがつかぬ。松島は、井上に向つて、

『井上氏、御所存のほどを承はり度い。如何で御座るか』

と、突然に、質問をはじめた。井上は、席に着いてから、更に發言せず、只だ默然として居るうちに、眠氣を催したので、コクリ〳〵居眠りをして居た。之れを見た人々は、甚だ不快に思つたが、殿樣の前であるから、ぢツと堪へて居たのだ。

井上は、松島の質問を受けて、只だニヤリと、笑つた限りで、何とも答へぬ。松島は、少し焦れ込んで、

『足下の考へは、如何で御座るか、何とか意見の在る所を述べたら、どうぢや』

『何事について、意見を述べまするか。更に御尋ねの要旨が、解りかねまする』

『下之關へ、夷艦が押寄せて來る。それについての意見ぢや』

『ははア、その儀について、意見を述べよ、との事で御座りますか』

『左樣う』

『その儀についてならば、今改めて申上ぐる事は御座りませぬ。先般、御前に於て、詳細申述べてありまする』

妙に。ひねくツて出たので、松島も、ぐツと癪に觸つた。

『此處は、君公の御前で御座るぞ。只今の答へは怪しからぬ、そりや、本心で、いはつしやるのか』

『勿論で御座る』

『控へろ。無禮千萬な』

松島が、癇癪聲で、叱りつけると、井上も、負けては居ない。

『無禮とは、何が無禮で御座る。御尋ねに對して、聞き流しに致したら、無禮かも知れぬが、御答へをいたしたのが、何故に、無禮で御座るか』

『その答へが、無禮ぢやと申すので御座る』

『それは何故に……』

『先般の事を、根に持つて、左樣の事を申すのは、無禮千萬ぢや』

『しかし、拙者には、此以上の御答へは、出來申さぬ』

『斯樣の場合に、私の宿意を挟さんでの答へは、無禮のみでなく不忠で御座らう』

『これは怪しからぬ。不忠とは誰の事か』

『足下の事ぢや』

『何ツ、拙者が不忠で御座ると、ハツハ、、、、、』

松島は、益々怒つた。

『何が可笑しい。御前をも憚からず、大笑するとは、何事ぢや』

『可笑しいから笑つたに、何の不思議がある。足下の口から、不忠呼はりは可笑しい。全體、こん度の事は、何人の誤りからで御座るか、よく考へて御覽なされ、足下等が、深く外國の事情を知らずに、向不見の說を、立てたる爲めの結果では、御座らぬか。また、拙者が、先般、御前に於て、申述べた意見の行はれざりし爲め、今日の窮境に陷つたのでは、御座らぬか。それは皆な、足下等の意見の誤りではないか。從つて、藩の窮狀を救ふは、足下等の責任で御座る。今更に、拙者の意見を、御糺になる迄の事は、御座るまい。況して、不忠呼はりは、身のほどを知らざる、過言で御座らう』

今迄の不平を、一時に吐いたので、井上は、快よくあつたらうが、松島が其儘に凹垂れる筈はない。

一一

井上が、思ひの儘に、松島を、言捲くつたのは、聞いて居る人に、痛快の感じを與へたが、しかし、能く考へて見れば、自分等も罵られて居る事になるのだから、あまり快くもない。殊に、當の對手の松島は、猶更ら癇癪に觸つた。

『我等に對して、身のほどを知らざる、不忠者と申したな』

『如何にも其通り、それが、何と致した』

『うぬツ、怪しからぬ』

松島は、殿樣の御前である事を忘れて、膝を立直した。井上も、同じやうに肱を張つて、膝を進めた。一座の光景は、殺氣を帶びて來た。之を見て居られた、長門守は、

『兩人ともに、控へよ』

眞に鶴の一聲、松島も、井上も、ひとしく手をついて、頭を下げた。

『事は、我藩の興廢に關する、容易なるぬ儀ぢや。山口へ立歸つての事に致さう』

評議は、是れで打切りとなつて、すぐに供揃ひを整へ、山口の城下へ、急ぐ事になつた。

山口へ着いてから、早速、老臣や重役を集めて、再度の評議を始めた。そのうちに、大瞎太夫も、藪から來られて段々の評議を、續けた末が、いよ〳〵和睦の申込を、爲る事になつた。

其處で、井上を呼出して、此事を申付けた時に、井上は、

『御沙汰に從ひまして、和談には取かゝりますするが、御承知あらせらるゝ通り、容易ならぬ儀に御座りますれば、私し一人の力には及びませぬ。就ては、伊藤俊輔を、同道仕り度、御辭下し賜はりますやう、偏に願ひ上げまする』

と、伊藤の身分が低いから、此際に御目見得の資格を、つけてやらうとの考へで、井上は、斯ういひ出した。毛利父子も、伊藤の資格などを、いふて居る可きでないから、すぐに聞き届ける事になつた。

之れが爲に、伊藤は、漸く武士の格式を得たのであるが、直に談判委員になつて、井上と共に、下之關へ、向ふ事になつた。その正使には、家老次席の井原主計が、任命を受けて、外に杉孫七郎も、參加する事になつた。一行は取急いで、山口を出立して、下之關へ、遣つて來た。

外夷の軍艦が、押寄せて來た、といふので、下之關の沿岸は、非常な警戒であつた。殊に、此地は、奇兵隊の陣屋が在るので、士氣の昂奮は、一と通りでなかつた。

敵艦は、檀浦の沖に、繋かつて居るのであるから、それ迄、潸ぎつけて行かねばならぬ。何しろ、夷國から攻寄せて居た、といふので、人心は惘々として、何事も手につかぬ、有樣であつた。從つて、船夫の如きも、容易に承知しない。賃錢は、多く貰つても、二つと無い生命を失うては、算盤に合はぬ、とあつて、雇はれやう、としない。それを種々と說きつけて、結局は、不相應の賃錢を前渡して、辛うじて二隻の早船を支度させ、下之關の海岸から、檀浦のが、關の岬であるから、此なを得ぬ。此際、敵艦が遽せぬうちに、何處かの砲臺で、一發放つたから、他の砲臺でも、愈よ出かける時に、沿岸の砲臺を、堅めて居るものへは、それ〳〵に傳令使を走らせて、

『此一行が、歸つて來る迄は、決して發砲を致しては、相成らぬ』

と、傳へさせたのだが、今のやうに、電話や電信の便がない時代であるから、此傳令が遽せぬうちに、一發放つたから、他の砲臺でも、それに續いて、發砲した。終には、敵艦からも、之れに應砲する、といふやうな譯で、檀浦の海上は、砲煙の爲めに掩はれ、大きな火の玉が、飛び交ふ狀は、實に恐ろしい事であつた。

伊藤と、井上は、此有樣に驚いて、小舟の上に立上り、扇子を開いて、之れを打ふりながら、

『オーイ、オーイ、發砲しては不可ぬ、しばらく停まれ』

と、聲を限りに叫んだが、大砲の音に、聲を消され、一向に聞えぬらしい。

白い巾を、長い竿の先へつけて、之れを振廻せば、すぐ發砲を止める、といふやうな事は、まだ知らなかつた時代で、伊藤や、井上が、扇子を持つて、恰で踊つて居るやうにして居る。その狀を見て、毛利の方のものは、發砲の號令を、かけられて居るものと心得て、その砲聲は、いよ〳〵はげしくなるばかりであつた。

是れでは到底、敵艦へ、近づく事は出來ぬ。第一に、船夫が、ふるへて了つて、船を進めぬから、もう致方がない。此上は、成行に任せて、突當るまでやる外はなからう、と、相談を定めて、此一行は、空しく引返して來た。それから早馬で、山口の城下へ、かけつける事になつた。折角の講和も、當分は見越が、附かぬ事になつた。

三

長門守は、檀浦の沖で、既に戰爭を開始した、といふ報知があつたので、和睦の使節は、全體どうなつたのか、その消息が、少しも判明らないので、不安の念を以て、井上等の歸りを、待つて居た。

所へ、一行の歸着を、屆けて出たから、すぐに面會を許して、その報告を、聞く事になつた。大體の事は、毛利主計から申上げて、猶ほ詳細の事情は、井上から物語つた。それで一先づ、休息する事になつて、各自の控席へ退ると、間もなく長門守から、井上を、呼びに來たので、井上は、御前へ出る事になつた。

『其方等が、折角の骨折も、水の泡になつて、まことに殘念に思ふ。此上は、如何に致して宜しいか、其方の考へを、聞いて置き度い』

『事、此に到りましては、もはや致方が御座りませぬ。全力を盡して、戰ふの外は御座りますまい』

『余も、左樣に思ふ。今日と相成つては、戰ふの外はあるまいが、しかし、勝敗の見込は、どうぢや』

『さ、その儀につきましては、まことに遺憾ながら、敗戰致すに相違御座りませぬ』

『何と、敗戰の見込……ふゝーむ、味方の敗戰か』

『御意に御座りまする』

長門守が、不滿の容子に引替へて、井上は、存外に、平然して居る。

『味方の敗戰を見越して、猶戰ふの外はあるまいとは、何ういふ次第ぢや』

『今日と相成りましては、もはや戰ひは避け得ませぬ。當方にて、手を控へまするも、敵は攻寄せて參りませう。然る上は、勝敗に不拘、一戰を試むる外は御座りますまい』

『一應は道理ぢや。なれど、その敗戰を、徒に待つも如何、此際に處する方策はなきものか』

『それにつきましては、愚存を申上げたう、御座ります』

『うむ、それを聞かう』

『敵は、勝利を收め乍ら、上陸して城下までは、押寄せ參りませう。それを途中で遮ぎり、手痛き一戰仕りまする。卽ち小郡に、陣を張り、敵の押寄せるを待つて、擊破るので御座りまする』

『その見込は、相立つか』

『充分に見込は御座りまする。遠く隱れての砲戰では、到底及びませぬが、陸上に於て、互に近寄り、打物敎つての戰ひならば、必ず勝算御座りまする』

『小郡にて、敵兵を遮ぎり、城下へは密付けぬ、と、申すのか』

『否、それのみでは御座りませぬ。敵兵が、大に敗れて、兵氣の沮喪いたしましたる所へ、和議の申込みを致しますなれば、容易く之れに應ずるものと思ひまする』

『うむ、それも可からう。しかし、小郡を堅めるには、如何いたす所存か』

『新式の兵士一箇大隊、それに京都より、引上げました力士隊、それ丈けにて、事足りまする』

『その小人數にて、宜しいと申すか』

『三日間は、たしかに防戰仕りまする』

『指揮は、其方が致すか』

『却々以ちまして、私の力にては、到底むづかしう御座りまする』

『然らば、何者が、之れに當るか』

『高杉晉作へ、采配御預け下さるやう、願ひ上げまする』

『高杉晉作へ、采配御預け下さるやう、願ひ上げまする』

井上は、此機會に、高杉を救ひ出さう、とするのであるが、之れには、長門守も、鳥渡困つた。高杉は、座敷牢の中に居るのだから、井上が、いふ通りにはならぬ。

『それは、折角の事ぢやが、ちと至難しからう、と思ふ』

『何故で、御座りまするか』

『晉作は、不都合の事あつて、今は牢舍のうちに在る』

『その事は、よく承知いたし居りまする』

『それを、存じて居りながら、晉作に、采配を渡せ、とは、如何にも難題のやうに思はれるが、此儀は何うぢや』

『晉作の罪狀は、如何なる次第か、更に存知ませねど、畢竟は、讒慢を申付けられ居るので御座りませう。君公の御

沙汰に由り、罪を得ましたものは、また、君公の御沙汰に由つて、その罪を宥恕ある事、敢て珍らしき事でも御座りませぬ。況して、社稷の存亡にも、關するほどの場合、臨機の御處置あつて然る可し、と考へまする』

蹈々と演立てる、井上の意見にも、一應の道理はあるが、さればといふて、此際に、高杉の罪を許して、一方の采配を、執らせる事は、他の家來に對しても、遠慮す可き事であるのは勿論、賞罰の正しからざるは、後の取締にも關するから、流石に、長門守は躊躇して、容易に決しかねて居た。

『晋作の外にも人はあらう。其方の見込を申しては、何うぢや』

『御辭には御座りますれど、此御役は、高杉に限りまする』

『外に適任のものはない、と申すか』

『御意に御座りまする』

事は、焦眉の急に、迫つて居る。此場合に、彼是いふて居ては、時機を失するの恐れがあるので、長門守も、終に決心した。

『然らば、晋作を、呼出せ』

『ハツ、早速呼出しまするで御座りませう』

四

如何に窮すればとて、現に座敷牢にはいつて、居るものを、すぐに引出して、小郡の陣屋を守らせ、戰爭の指揮を、させようといふのであるから、長門守の苦心は、いふ迄もない。井上も、其點は、解つて居るから、假りに宍戸刑馬に、性名を改めさせて、いよ〳〵高杉を、小郡の陣屋へ、詰めさせる事にした。

沿岸の砲臺は、敵の砲撃に依つて、大概は、破壞されて了つて、今は、戰爭の役に、立つ可き砲臺は、殆ど無くなつた。とに角、戰爭は、井上の見込み通りに、敗けて了つたのである。三田尻の方面には、敵兵が上陸して、戰鬪さかんなりとの報告が、時々刻々に來る。どうせ、山口へ、攻め寄せるには、小郡を通るのであるから、此處で、敵兵を惱ましてやらう、と、高杉、井上等は、待ち構へて居た。

所へ、重役の山田宇右衞門が、やつて來て、井上に、面會を求めた。井上が、山田に逢ふて、その來意を、聞いて見ると、

『殿樣の御思召が一變して、講和の取計ひを、取急げ』

と、いふのであつた。井上は、之れを聞くや、例の疳癪を起して、

『當所に於て、未だ一戰も試みぬうち、取急ぎ和睦の取計ひをせよ、とは、如何なる次第で御座るか』

『京都よりの情報に由れば、近く幕府の軍勢が、押寄せ來るとの事、左樣相成つては、藩の全力を擧げて、一戰を試むるの外なかるべく、從つて、外夷との戰ひは、直に和睦して戰爭を、一方づけて置かねば、如何に奪鬪するも、勝利のほどは覺束なし、とあつて、此度の御沙汰が下つたので、御座れば、その邊の事情は、宜しく御察し下され』

『成程、一應は相解りました』

山田は、井上が、不滿らしい顏付をして居るので、いろ〳〵と事情を話して、殿樣の苦衷の在る所を說いた。井上は、しばらく考へて居たが、すツと立上つて、次の室へはいつたから、山田も、少し變だと思つて、跡から立つて、襖の隙から、窺いて見ると、井上は、双肌を脫いで、すでに切腹しよう、とする所であつた。山田は、驚いて飛込み、井上の手を抑へた。

『ま、ま、待たつしやい。何故の切腹か、先づ其次第を、承り度い』

『生ながらにして、毛利家の滅亡を見るに忍びず、切腹して相果る覺悟で御座る』

『それは、又意外の事を承はる。毛利家の滅亡とは、何事で御座る』

『されば、拙者と、伊藤が、英吉利より歸國して、世界の事情を、詳細に申上げたる際には、充分に御解相成りたるものと思ひしに、長防二州が、焦土になる迄も戰ひはすると、仰せられ、我等は、止む事を得ず、一時身をかくすの止むなきに至りたるが、間もなく、御召出しに預り、和睦の事を取計へとの、御沙汰を蒙り、下之關迄到りたるも、事、行違と相成り、さらに敵兵を、小郡に打敗りて、然る後に、和睦の運びを、つけるやう申上げて、今日に至りたる次第なるが、又々、殿樣の御思召が變つて、未だ一戰もなさずして、取急ぎ和睦を取計らへとある。此の如く、朝に、夕に、殿樣の御思召が變るやうでは、毛利の社稷も、最早長くは保ち得まじく存ずる。依つて、拙者は、切腹して潔く相果る、覺悟を致したのぢや』

井上のいふ所にも、一應の道理はあるが、殿樣の御思召にも、無理はない。斯うなると、山田は、板挾みの形となつて、只困るばかりである。折柄、高杉が、悠然と、はいつて來て、

『オイ、聞多、貴樣は、腹を切るのか』

『うむ』

『良い覺悟ぢや。立派にやれ』

『えツ』

『己れが立會ふから、立派にやつて見ろ』

是れには、井上も困つた。實は狂言で、やつて居たのを、高杉に斯ういはれては、井上の考へとは大部違ふから、井上も、全く行詰つて了つた。

『しかし、井上、貴樣は、腹を切る前に、己れの體を、何うするつもりか、先づ其考へを、聞き度い』

『お前の體を……』

『己れが、宇にはいつて居るのを、貴樣の剛腕で引出され、己れは、今、小郡の陣屋を、預つて居るのではないか。それに、貴樣は、切腹して相果る、といふ。貴樣は、自分の事ばかり考へて、己れの事は考へぬのか。貴樣丈けが、拜謁したら可からう』

けれども、その處置のつかぬうちは、貴樣丈けが、死ぬ事は、決して許さぬぞ。どうだ、とに角、不平を忍んで、一應は君公に、

意外にも、高杉の助けを得て、山田は大喜びで、これから、井上を、段々と、說つけた。井上も、終に我を折つて、山口へ、行く事になつたので、高杉も、今度は尾いて行く事になつて、之れから三人は、小郡の陣屋を出かけた。

五

其時代の狀態から云へば、歐米の人を目するに、夷狄禽獸の一言を以て、斥けた時代であるから、毛利父子の意見は、飽く迄も、此夷狄禽獸を、日本の近海から、討ち退けて近寄せない、と云ふのが本旨であつた。朝廷の詔も、それと同樣であつた。此意氣を以て、四箇國の軍艦を、見て居るのであるから、戰を開けば直ぐにも勝てる、と思つて極く簡單な考へを持つて居たのだ。所が慾々開戰して見ると、今迄輕く見たやうてなく、四箇國の軍艦は、存外に強い力を、持つて居る、と云ふ事が解つたのみならず、幕府の方では、慾々長州征伐として、大兵を向けて來る、と云ふ注進が、櫛の齒を引くが如くであつた。下之關の戰を、控へて居て、幕府の大兵を、邀へ擊つと云ふ事は、ても不可能の事であるから、毛利父子も、此點に就て、心を惱ました結果、井上を、小郡から呼び出して、再び講和談判の衝に當らせよう、としたのである。先には、飽く迄も戰ふと云ひ、慾々始めて見ると、思ふやうにならぬから戰を弭めると云ふのは、如何にも其考へが、浮動して居るやうであるが、當時の狀態から云へば、毛利父子ならずとも、大抵は、此位の考へであつたに違ひない。兎に角、和戰の解決は、井上の力に依つて決する、と云ふ迄に、差し迫つて居たのであつた。

井上は、山田と高杉に連れられて、山口の城下へ出て、直ぐ登城することになつた。毛利大膳太夫は、萩から出張して、井上の到着を、待つて居たのである。

『ハツ、申上げます』

『何事ぢや』

『唯今、山田宇右衞門立歸りまして、御座います』

『ウム、左樣か、宇右衞門は、聞多を同道致したか』

『ハツ、井上聞多、同道にて立歸りました』

『よし、それでは之へ通せ』

其取次の者が、去つて間もなく、井上は、宇右衞門に連れられて、毛利父子の御前に出た。

『オー、聞多か、よう早く參つた』

『御沙汰に依つて立歸りました。御用の次第を承り度う存じまする』

『餘の儀ではないが、下之關の戰は、一時和議の取計ひを、致して貰ひたいが、どうぢや』

井上は、ずつと膝を進め、毛利父子の顏を、暫くの間見詰て居たが、

『御沙汰に就て、お伺ひ致します。此度の和議は、一時の權謀に依るもので、御座いまするか、それ共に、御心の申より致さうとしての和議に御座いますか、此儀を伺ひ奉ります』

『それは、一時の權宜に過ぎぬ。幕府が、大兵を向けて、我が藩を討ちに來る、と云ふのであるから、前後に敵を受けては、不利益と考へて、一時の和議を取計ひ、幕府の大兵を、國境に討ち拂ふの考へから、之を申付くるのぢや』

『之は怪しからぬ仰せで御座います。曩に私と伊藤が、英吉利から立歸つて、意見を申上げた際には、縱令長防二州は、黑土になる迄も、戰ひを續ける、と云ふの仰せでありまして、其御思召に從ふて、今日の開戰に相成りました。然るに、未だ戰は何れとも決せざるに、和議の取計ひを致せと仰せらるゝは、如何なる次第で御座いまするか。武門の名家たる、御當家の致方としては、餘りに不甲斐なき事と考へまする。殊に、一度び外人を、欺いた形となつて、此戰を開いた今日、更に又、御心にもない、一時の權宜より出でたる、和議を講じよう、と致しても、外人の方で、之を受付ける譯もなく、私にせよ、伊藤にせよ、左樣な僞りの使ひに、立ちまする事は、平に御辭退申上げまする。それ共に、一時の事でなく、永久の平和の御思召として、和談せよとありますれば、敢へて辭する所では御座いませぬが、一時の權宜より出でたる、和議は、私に於て、御引受け致す事は出來ませぬ』

斯うきつぱり斷られて見ると、今更に如何とも仕方がない。毛利父子は唯井上の顏を見詰るばかりであつた。

六

毛利の云ふ所は、唯藩の利害からのみ打算して、一時の權謀に依る、和議を講じよう、とするのであるが、井上は洋行から歸つて、幾分か世界の形勢にも、通じて居たから、鎖國攘夷と云ふが如き、頑迷なる事は、長く行はれるものでないに依つて、今は其主張を拋つて、一日も早く、開國主義に基くのが、日本國の爲である、と云ふ考へを持つて居るのであつた。此思想が、毛利父子と、井上の意見の相違と、なつて來るのは已むを得ぬ事態であつた。毛利父子も、一時の權宜を以て、和議を講ずる、とは云つたが、井上の爲に、嚴しく劒付けられたから、之れには頗る困つた。今の場合、井上を除いて、誰一人として、敵艦に乘込んで、此談判をする丈の資格を、持つた者はないのであるから、どうしても井上に依る外に、和議を講ずる事は出來ないのである。そこで、毛利父子も、已むを得ず、井上に向つて、

『いや、唯今、余の申した、一時の權宜と云ふのは、多數の藩士が、騷ぎ立てるのを、恐れて申したのである。余の心は、確かに永久の平和を、思つての和議であるから、其方も、其考へを以て、充分の盡力をするやうに致せ』

『ハツ、其御諚を承ります以上、縣命の盡力は仕りませうが、併し、念の爲に、お伺ひ致しまする。永久の平和を、思ふての和議とありますれば、異人に對しては、飽迄も、信義を以て、談判を致さなければなりませぬ。若し私共に於きまして、其趣意を以て、談判をして居りまする場合に、萬一にも、朝廷より尙ほ此戰を續けよ、と云ふの御沙汰が下りました際は、如何相成りまするか』

流石に、井上は、急所を突いた質問をして居る。毛利父子が、何と答へるかと、其樣子を見て居ると、

『其儀に就ては、强ひて尋ねる迄の事はなからう。勅命とあれば致方がない。尙ほ此戰を、續けるの外はなからう』

之れを聽いて、井上は、聊か顏色を變へた。

『之は怪しからぬ仰せ、と考へまする。唯今、君公は、何と仰せられましたか、御心から出た、永久の平和を、思ふての和議である、と仰せになつたでは御座いませぬか。然る以上は、縱令朝廷の御沙汰と雖も、我國の爲にならぬと思へば、飽く迄も諫爭をして、死を以ても、朝廷の御思召を、拒むの御覺悟が、なければなりますまい。或時は、信義を以て、和を講ずると云ひ、又或る時は朝廷の御沙汰ならば、已むを得ず戰を續ける、と云ふが如き、一つ事柄に就て、御思召が始終、變更致すやうでは、我が武士道に於ても、左樣に卑怯な御思召を御持ちなさる事は宜しくあるまいと、考へまする』

斯う云はれては、毛利父子は、一言もない。井上は、思ひ切つて、云ひたい丈の事を、云ひ盡した。尤も、井上の立場からすれば、無理もない。最初は和睦しろ、と云つて用ひられず、間もなく戰を開いたが、むづかしいから和議をしろと云ふ。今度は、戰へと云ふので、其軍備をすれば、又和議を講じろ、と云ふやうに、始終、意見が變るやうでは、うつかり此談判は、引き受ける事が出來ない。大事に大事を取つて、故らに突つ込んで、毛利父子の意見を確めよう、としたのは、井上としては、固より當然の事であつたらうが、斯う云ふ風に、問ひ詰められては、毛利父子も、今は如何とも致方がなくなつて、井上の前に、膝を屈して、額む外に途はなかつた。

『成程、其方の申す通り、余が、一時の權宜と申したのは誤りであつた。又、朝廷の御沙汰ならば、已むを得ぬと云ふたのも、餘りに心弱い申分であつた。余は、今改めて、其方に命ずる。異人に對しては、飽迄も、永久の平和を望んでの和議である、と云ふて、掛け合を開け。又朝廷の御沙汰があればとて、余は、死を以ても、朝廷を御諫め申して開國の御趣旨に、基くやう致すに依つて、其方も、此場合は、忍んで此役を、勤めて貰ひたい。どうぢや』

『其仰せと御座いますれば、水火の苦しみも、辭する所では御座いませぬが、唯今の御言葉には、御變更はございますまいな』

『いや、もう此以上の變更はない。其點に就ては、安心致して、談判に取掛つて、宜からう』

井上は、此位に問ひ詰めて置けば、もう安心と、思つたから、山田と共に、御前を退ると、高杉を加へて、三人鼎坐して、段々相談に掛つた。井上が、秘かに考へたのは、此談判の使節には、適當の人を得なければならぬ。唯英吉利へ、少しばかり行つて來た、と云ふ丈で、自分や伊藤が、之に當らうとしても、それは無理である。種々の點から計つて見れば、どうしても高杉を、使節にする外はないと、覺悟を決めて、井上は膝を進めた。

『偖て、山田氏、事の玆に及んだ以上は、和議の掛合を致す、使節を定める必要があるが、自分の考へでは、高杉が最も適任と思ふに依つて、君公へ、宜しく御推擧を願ひたい』

と、いひ出した、のを聞いて、山田が、ちよつと躊躇したのは、高杉は牢舍から赦されて出た、とは云ふものの、未だ公に赦された譯ではなく、一時の都合上から、小郡の陣を、託する者が、外にないので、全く變則の手續を以て出牢をさせたと云ふに過ぎないのであるから、此以上、尙ほ大切の使節として、毛利藩を代表させる、と云ふが如き大きな役目に、高杉を推擧する事は、山田としても、頗る困つたのである。併し、井上が、之迄に云ひ出すには、充分の覺悟があつての事だらうから、今、自分が、之を拒んだ所で、井上が、さうかと云つて、其說を引つ込める譯はない。然る以上は、矢張り毛利父子へ、此事を取次ぐの外はないのだ。そして、山田は、井上に向つて、

『唯今の御說は、至極とは思ふが、其儀に就ては、拙者一人では、君公へ、申上げた所で致方があるまい。若し、さうは相成らぬと、仰せられた場合には、拙者としても、尙ほ之を押し切つて、願ひ上げるだけの力がないのである から、拙者と同道にて、君前に、此說を唱へて貰ひたいが、如何であらうか』

藩の重役としては、如何にも弱い事を云ふやうであるが、山田の位置としては、斯う云ふの外はなかつたのだらう。井上も、山田の意中を察して、『宜しい。然らば同道申さう』と云ふので、二人は、再び御前へ出て、一應は、山田から此事を申上げ、更に井上からは、『高杉ならずは、此使命を果す者はない』と云ふ次第を、縷々、陳述に及んだ。そこで毛利父子も、已むを得ず、高杉に、此大役を命ずる事にはなつたが、併し、牢から出たばかりの高杉を、直ぐ此大役に任ずる、と云ふ事は、他の藩士の思惑もあるから、其點に就ては、幾分の躊躇があつた。それを察して、井上が、

『恐れながら、自分の考へを一應申上げまする。罪あつて入牢中の高杉を直ちに此大役に任ずる、と云ふ事は、些か無理かも知れませぬが、玆に新たなる家來を、一人御召抱へになつて、其者の才幹を信じ、此大役を命ずる事と致せば敢へて差支へ御座いますまい。高杉には、一時假の名を名乘らせ、相當の位置を與へ、改めて此使節を命ずる事と致しましたら、別に差支へ御座いますまいと考へまするが、此儀は如何で御座いまするか』

と、いふのを聞かれて、毛利父子は、膝を打つて、

『ウム、さう云ふことなら、差支へあるまいが、それは、どう云ふ風に、致す積りぢや』

『高杉を、宍戸刑馬と名乘らせて、御名代の資格を與へ、更に藩士の中より、相當の身分ある者を、差添と致したならば、敢へて差支へも御座いますまい』

『而て、其方は、如何致すか』

『私と伊藤は、先般、異人を欺いた形になつて居りますれば、此際に於ては、双方の間に立つて、斡旋をすること丈に止まり度う存じます。使節の中に加はる事は、異人に對し、遠慮致さねばなるまい、と存じまするから、唯だ何と云ふことなく、双方の周旋をする、と云ふ事に、御含みを願ひまする』

『其儀も至極である。然らば高杉を、宍戸刑馬として、其使節を命ずる事に致さう。其邊の儀は、山田が心得て、萬事、手落なく取計へ』

『ハツ、委細心得ました』

斯う云ふ次第で、愈よ高杉は、宍戸刑馬と云ふ名を以て、此全權大使の任に當る事になつた。同時に、井上は、毛利父子に向つて、

『尙ほ此場合に、御願ひ致したき事が御座いまする』

『何ぢや』

『それは、餘の儀でもございませぬが、伊藤俊輔、身上に就てゞ御座います』

『それを、如何致さうと申すのぢや』

『彼は、國事に奔走致した功に依つて、士分に取立てられましたが、未だ御目見得以下の低い者で御座いまするから此際御目見得以上に、御取立の儀、御願ひ申上げまする』

斯ういふ場合にも、井上の持つて生れた氣性は、現はれて來る。親友の伊藤が、洋行に就ての苦心と云へ、又今迄、國事に奔走した志に對して、兎に角、御目見得以上の取扱を、受けるやうにしてやりたい、と云ふ心から、此機會を利用して、殿樣の前に願ふ、と云ふのは、頗る美しい事と思ふ。毛利父子も、此場合には、それを拒む、と云ふやうなことは出來ないから、直ぐに許される事になつた。玆に於て、伊藤は改めて、井上の働きに依つて、毛利父子に、拜謁する事が出來るやうになつた。

晩年に及んで、伊藤と井上の親交が、益々深くなつた、と云ふのも謂はれのない事ではない。共に死生の間に往來

して、互に心を許した上に、井上が、此親切を盡したのであるから、伊藤が、井上の事を思ひ、井上が、又伊藤の爲に苦勞するのは、當然である。今の世の、單なる酒食の上の親友とは、大分趣きの異ふ所があつた。

七

高杉の父は、小忠太と謂つて、長門守の傅役を勤めて居たのだ。其關係から晋作に對する、長門守の愛顧は、餘程深かつたものと見えて、小忠太が傅役として、相當の食祿を、得て居たに拘らず、晋作には別に、百石を與へられて居た。後に八十石を增されて、ます〳〵信用は厚くなつたが、晋作の氣性として衣食に事を缺かぬから、と云ふて、それに甘んじて、上長の云ふことを、ハイ〳〵と云ふて聽いて居るやうな、弱い人ではなかつたので、遂に罪を得て、幽囚の身とはなつたのである。吉田松陰の門に入つて、一通りの文字はあつたけれども、大した學問は無く、又自らも學問を以て、世に立たうといふ考へなどは、少しもなかつたのであるから、其方に就ては、別に傳へる程の事もない。併し、當時の侍は、一般に、武術を貴んで、學問を輕んじた風があつたから、十人の中、七八人迄は、先づ無學に、近い方であつた。さうした時代の武士としては、高杉は、學問の力も、有つた方であるやうに思ふ。殊に、天下國家の問題に就ては、一個の見識を、持つて居り、なか〳〵奇拔な働きを爲たものであつた。

始めは極端な、攘夷論者であつたが、一度び藩命に依つて、支那の上海に渡り、二週間ばかり、滯在して居る內に、すつかり世界の大勢の、赴く所を呑み込んで、歸つてからは俄かに、開國論を唱へ、攘夷論の如き、世界に通ぜざる、偏屈な議論は、長く續くものでないから、詰りは開國の主義に、基いて行くべきものである、といふ意見を、毛利侯にも奉つたし、又同志の間にも、之を唱へて、開國の主義を、鼓吹したものであつたが、表面に於ては、今迄の通り、攘夷主義を以て、幕府に迫つて居たのである。現に、高輪の御殿山に新設せられた、英吉利公使館の燒討をする際に、自分が遣んで、其指揮をやつたなどは、普通の人に出來ることとでない。攘夷論の行はれざるを悟つて、開國主義

になつた人が、異人屋敷の燒討などを、平氣でやれるものではないが、晋作は、之を平氣で行つたのだから、普通の侍とは、大に異ふ所があつた。

殊に、晋作の長所は、人と對坐して、說き付ける事に、一種の魅力を持つて居た事である。談論風發、聽く者をして、何時も感服させるだけの辯舌を、持つて居たのだが、併し、これは日本人と相對して、日本語で談論する時の事で、外國人に對した場合は、全くそれと趣きを異にするから、エー、ビー、シーも解らず、會話の一端すらも、心得て居らぬ晋作が、英、米、佛、蘭、四ケ國の代表者を相手にして、講和談判をするといふのでは、其間に非常な、不便があつたに違ひない。伊藤と井上が、其間に立つて、通譯をする事にはなつて居たが、此通譯なるものが、甚だ怪しいものであつた。英吉利へ渡つて、僅かに一年足らずの、速成ハイカラが、どうして縱橫に通譯が出來やう。朝晩の挨拶や、日常の用事を足す位の事は、手眞似や顏付をしながらも、どうか斯うか、意を盡すであらうが、正式の講和談判などに、正々堂々と掛合ひをするのを、直ちに通譯して、相手方に、會得させるだけの語學に、充分でなかつた事は、改めていふ迄もなく、さうした怪しい者が、二人揃つて、高杉の主張する所を通譯するといふのだから談判の不徹底なるべきは、固より當然の事であつた。如何に雄辯な、晋作と雖も、之には多少の不自由を、感じたに違ひない。

總體に、人と人とが掛合をする時、言語を同じくして居れば、其思ふ所を、充分に傳へる事も出來るのであつて、少くも二人の間に、第三者が加はつて、甲の云ふ所を取次いで、乙に傳へ、乙は又それを聞いて、自分の云ふ所を取次いで貰つて、甲に移す、といふやうな事では、徹底した話の出來ぬものだ。臺灣へ行つて、或る法院に、被告人を訊問する場合を、參觀した事がある。被告人を、前に控へて、法官が、日本語で一通りの訊問をする。それを通譯官が居て、臺灣語に譯して、被告に傳へ、被告人は、臺灣語で答へ、通譯官が、更に法官に傳へるので、一つの事を二度も三度も、異つた言葉で、やり取りをして居る。其間、言葉の解らない、法官と、被告人が、ぼんやり立つて

互に顔を見て居る間抜けさ加減は、お話になつたものでない。人間と人間との言葉の、やり取りには、互に語つて居る、刹那の間に、言葉の足らざる所を、補ふ、一種微妙な働きを、有つて居て、始めて其語る所が、生きて來るのであるから、兩者の間に、人が介在して、通譯するといつたやうな事は、普通の場合では、敢て差支へもなからうが、談判とか、訊問とか、いふやうな場合になると、頗る困難を感ずるのみならず、徹底的に、要領を得ることは、出來ないに定まつて居る。

併し、高杉は、其不便を忍んで、少しも頓着なく、云ふだけの事を云つて、その話が、先方に解らうが解るまいがそんな事には、少しも構はず、自分の思ふた丈の事は、すべて云ひ盡してしまつたのだから、普通の人と異つて、偉い點はあつたのだ。

聯合艦隊の旗艦は、ユラヤルズと云ふて、艦長は、アレキサンドルと云ふ人であつた。此方の都合の良い事は、サトーと謂ふ人が、此艦に乘込んで居たことであつた。此サトーは、後には英吉利大使として、日本に來た事もあり、長く日本人に交際つて、非常な日本贔屓の人になつたのだが、其時分から日本を贔屓して、いろ〳〵日本國の爲に、好意を盡して呉れた人である。多少は、日本語も解つたやうであるし、此談判に就て、サトーの居た事は、確かに毛利の爲には、此上もなき利益であつた。

八

戰爭には敗けて居ても、藩士の意氣込は、實に旺んなもので無い。人間と人間との言葉の、やり取りには、互に語つて居る、刹那の間に、言葉の足らざる所を、補ふ、一種微妙な働きを、有つて居て、始めて其語る所が、生きて來るのであるから、兩者の間に、人が介在して、通譯するといつたやうな事は、普通の場合では、敢て差支へもなからうが、談判とか、訊問とか、いふやうな場合になると、頗る困難を感ずるのみならず、徹底的に、要領を得ることは、出來ないに定まつて居る。

併し、高杉は、其不便を忍んで、少しも頓着なく、云ふだけの事を云つて、その話が、先方に解らうが解るまいがそんな事には、少しも構はず、自分の思ふた丈の事は、すべて云ひ盡してしまつたのだから、普通の人と異つて、偉い點はあつたのだ。

聯合艦隊の旗艦は、ユラヤルズと云ふて、艦長は、アレキサンドルと云ふ人であつた。此方の都合の良い事は、サトーと謂ふ人が、此艦に乘込んで居たことであつた。此サトーは、後には英吉利大使として、日本に來た事もあり、長く日本人に交際つて、非常な日本贔屓の人になつたのだが、其時分から日本を贔屓して、いろ〳〵日本國の爲に、好意を盡して呉れた人である。多少は、日本語も解つたやうであるし、此談判に就て、サトーの居た事は、確かに毛利の爲には、此上もなき利益であつた。

戰爭には敗けて居ても、藩士の意氣込は、實に旺んなもので無い。從つて、此場合に、和睦をしようなどと、考へて居る者は、餘程の臆病者か、弱虫の外には、殆んど無かつたのであらう。

尤も、戰さに敗けた、といふても、それは、砲臺と軍艦の戰ひであつて、日本の武士が、最も得意とする、武器を執つての立會で、敗けたといふ譯ではないから、眞の敗北とは、考へて居なかつたのであらう。

此點については、高杉も、伊藤、井上も、よく其事情を知つて居るから、取急いで、和睦の談判を開かうとして、可成り焦つて居たのである。愈々高杉が、使節となつて赴く時、その副使としては、杉徳輔・渡邊内藏太の二人が附添ひ、別に伊藤が通譯として下之關へ向つたのであるが、その裏面には、もう少し物語があるのだ。

砲臺は、擊ち崩されても、少なからぬ兵隊が、夫れ〳〵に武器を携へて、非常な勢ひで、控へて居るから、先づその連中を、巧く抑へ付けて、此談判の終る迄は、無謀な事をさせないやうに、相當な人物を送つて、その任に當らせる必要があつたので、山田宇右衞門外四五の役人が、井上と共に、高杉等に先立つて、下之關へ、出掛ける事になつた。

高杉等は、山口を出て、長府迄やつて來ると、長府の家老で、西小豐後といふ人が、高杉等を迎へて、

『君等は、馬關へ行くとの事であるが、何の爲めに行くのか。先づその要件を、聞いて置きたい』

と、いふ質問から、始まつて、盛んに戰爭繼續を主張するので、渡邊内藏太は、之れに答へて、はげしい議論を始めた。

『假令、如何なる議論があるにもせよ、君命に依つて、和議を講ずる、といふに、何の不思議がある。强ひて之れを拒めば、君命に背く事になるが、それでも、足下は、之れを拒むといふのか』

『君等のいふ、君命とは、如何なる事をいふのか、我等は、一向に判らぬ。我等は、異人と開戰する事は、御沙汰を受けて居るけれど、和睦をせよとの御沙汰は、未だ受けて居らぬ。君等が、君命に依つて、和議を講ずるといはれても、その證據を見ぬうちは、信ずる事は出來ぬから、我等は、飽く迄も、戰爭の態度を以て、進む外はない』

そこで、渡邊は勿論、杉も、非常に怒つた、

『これは、怪しからぬ事を承はる。足下の言葉に依れば、我々が、君命を矯めて居るやうに聞えるが、果して左樣思ふて居られるのか、御返答の如何に依つては、勘辨相成らぬ』

と、いつて、刀の柄に、手を掛けた。

高杉は、二人を抑へるやうにして、

『足下は、頻りに戰爭の繼續を主張して、強い事をいはれるが、それ程に、和睦を、不可とせられるならば、眞先に討死をして、その赤心を表すがよい。只口先ばかりで、強さうな事を云はれても、今迄に手傷一つ負はぬやうな、生緩い戰ひをして居られたのでは、强がり甲斐もあるまいぢやないか』

斯ういはれては、西も、默つて居られないから、頻りに理窟はいふが、三人の爲めに、ひどく痛めつけられて、遂に沈默してしまつた。

高杉等は、西に關はず、城山へ登つて、遙かに馬關の方を見て居ると、外國船から、一發の破裂彈を、馬關の町へ擊ち込んだので、忽ち火の手が揚つたから、之れには流石の高杉も、頗る驚いた。

『オイ、杉ツ、これは何とかせぬと、馬關の町は、燒かれてしまふぞ』

『成る程、これは一大事ぢや。何とかして、早く砲擊を中止させぬと、取返しのつかぬ事になるが、どうしたものか』

『何しろ、これだけ離れて居ては、駈付けて行くにしても、到底間に合ふまいから、白旗を揚げて、一時の處、砲擊を中止して貰ふ、外はあるまい』

『それがよからう。然し、その白旗を、どうして手に入れるか。家老の西でさへ、あの鼻息で居るのだから、迚も白旗の手に入る譯はないが、どうしたものぢやらう』

『町の吳服屋へ行けば、白い布は幾らでもあらうから、それを手に入れて、揚げる事にしよう』

『それでは、町へ出て、何とかしよう』

相談が決まつて、一同は、城山を降りた。町へ出て見たが、一軒として、開いて居る家はなく、皆戸を閉めて、何處かへ、逃げて居るから、如何とも仕樣がなかつた。高杉は、手を拍つて、

『巧い事がある。此處では、二の宮のお祭りに、何時も町の者が、白旗を持つて、社の前を、グル〳〵廻るのが、昔からの慣例になつて居るから、その白旗を探し出して、揚げる事にしたら、よからう』

『ウム、それは名案ぢや』

それから、一同は、神社へ、やつて來て、僅かに一人だけ、殘つて居た、神官を捉へて、漸く白旗を出させ、之れを竿につけて、高く揚げたから、軍艦の方でも、砲擊を中止して、一先づ、馬關の町は、燒かれずに濟んだ。

此一行は、馬關へ出て、敵艦へ、乘付けるつもりであつたが、今は、さうした事もして居られないので、すぐに此處から、敵艦へ乘付けようと、大急ぎで、海岸へ出て來た。

幸ひに、二艘の漁船があつて、船頭も、その側に立つて居たから、彼是れいふて拒むのを、無理に押へ付けて、船を出させる事にした。豫め敵の諒解を、得て置く必要があるので、伊藤が、先發する事になつた。

敵の旗艦、ユラヤルズへ乘付けて、伊藤は、怪しげな英語で、頻りに呼び掛けると、甲板に現はれて、欄干に凭れ乍ら、見下して居る異人があつた。それが、例のサトーであつたから、伊藤は、非常に喜んで、

『サトーさん。我々は、和議の爲めに來たのであるから、どうぞ艦長に、會はせて下さい』

之れを聞いた、サトーは、

『よろしい、今、梯子を下します。少しお待ちなさい』

艫て、梯子を下して吳れたから、伊藤は、すぐに上つて行く。

伊藤は、獨て親しくして居たので、サトーとは、話もしよいから、此艦に、サトーが居て吳れたのは、此上もない好都合であつた。

艦長のアレキサンドルは、今度の戰ひに、足部を負傷して、跛足を、引き乍ら、出て來た。伊藤の顏を見ると、ニコ〳〵笑ひ乍ら、

『日本サムライ、誠に惡いいたづらします。私の足、此の通りあります』

といつて、跛足を引いて見せるので、伊藤も、之れには少し弱つた。艦長と、サトーの紹介で、水師提督に面會すると、提督は、伊藤に向つて、

『和議の爲めに來ましたか』

『いかにも、その用件でまゐつたが、談判に應じてくれますか』

『我々は、好んで戰ふのでないから、君等の方で、和議を講ずる、といふなら、何時でも應ずるつもりである』

『それでは、只今、その使節が來るから、逢ふて下さい』

『何といふ人ですか』

『宍戸刑馬といふものです』

『毛利さんの代人ありますか』

『左樣う』

『宍戸さんの資格は』

『家老であります』

之れを聞くと、提督は、サトーの方へ振向いて、何かいふたが、提督へ、小聲で私語いた。

『宍戸美濃といふ人、家老あります。刑馬といふ人、家老ありません』

伊藤も、ちよつと困つた。異人の方では、藩の重役丈けは、すでにしらべてあつたのだ。

『宍戸美濃といふものが、今は備前と名を變へて居るのであります』

伊藤は、頗る苦しかつたが、とに角、申譯にはなつて居るから、提督も、首肯いた。

高杉は、緋縅の鎧を着て、その上に、直垂をつけて居た。頭には、風折烏帽子を戴き、陣刀を帶びて、毛靴を穿いて居るので、その美しいことは、一と通りでなかつた。

遠くから見ると、花車の人形のやうだ。杉と、渡邊は、恰で家來としか見えぬ。伊藤は、提督や、艦長と共に、サトーと並んで、その小舟の來るのを、見て居たが、異人等は、物珍らしさうにして、ぢつと見詰めて居た。

艫て高杉の一列は、ユラヤルズ號へ、乘附けて、伊藤の案内で、艦長と、提督に會ふて、長門守から受取つて居た和議に關する書面を渡した。

『我々が參つたのは、此度の戰ひについて、和議を講ずるためであるが、それに關して、藩主の書面を、一應御覽下さい。其上で、委細の事は、御相談する事に致さう』

と、云はれたので、提督は、艦長と共に、其書面を披いて見ると、

昨年來、朝命を奉じ、幕令に隨ひ、於下之關、外國船を及朝命を違却するの姿に相成居候折柄、先般家來兩人、歸度、長門守、及發程候處、未到着中、京師變動差起、中途にして罷歸、其意を不得果、遺憾之事に候、此上は下之關通船差障無之樣可致候、委細此者より可申候、以上

元治元年八月四日

日本防長國主　花押

斯ういふ曖昧なものであつて、和議の事には、頗る緣の遠い、下之關通船の事が書いてあるのだから、提督も、聊か失望の體であつた。

猶ほ、別に三通の書類を附けて、先般の商船砲擊に關する、申譯の證據にしてある。

第一　攘夷期限の勅令（文久三年四月二十一日）

外夷拒絶の期限五月十日御決定に相成候間、益々軍政相調、醜夷掃攘可有之被仰出候事

第二　攘夷期限に就き將軍の奏上（文久三年四月廿日）

攘夷期限之事、來五月十日、無相違拒絶決定仕候間、及奏聞候、猶列藩へも布告可致候事

第三、攘夷期限の幕達

攘夷之儀五月十日可及拒絶段御達相成候間、右の心得を以、自國海岸防禦筋彌以嚴重相備、襲來の節は掃攘至し候樣可被致候

要するに、毛利の方では、商船砲撃の責任は、幕府に於て、負ふべき筈であつて、自分の方には、何等の責任が無い、といふ事を、主張する前提として、此書面を、突附けたのであるが、異人の方にして見ると、そんな事は、どうでもよいのであつて、砲撃に關する、直接の責任者は、毛利であるに極まつて居るから、既に此戰ひも始まつたやうな譯で、今に至つて、毛利から、斯ういふ書面を出して、曖昧の中に、戰ひを休止しようとするのは、甚だずるい致し方である、と考へて、頗る不滿の樣子であつた。

殊に、長防國主とのみ書いて、毛利大膳太夫の名が無いのであるから、斯樣な書面は、假りに受取つた所で、何等の效果はないのであるから、通譯の手から、其書面を受取ると、すぐに高杉の前へ差出して、

『此書面には、毛利さんの名が書いてありません。長防國主といふやうな、曖昧な署名では、正式の書面として、受取る事は出來ませんから、そちらへ返します』

之れを聞いて、高杉は、

『此度の戰ひは、要するに、下之關の通船を妨げた事が、唯一の原因になつて居るのであるから、改めて之れを許すとしたら、それで可い筈である。此書面には、將來の通船まで、保證する事になつて居るのであるから、それで滿足の出來ぬ筈はない。從つて、此事さへ決したら、戰ひも休止して、然るべきである』

と、答へたのに對して、提督の方の主張は、却々に強いものであつた。

『假令、何と云はれても、毛利さんの署名してない書面は、此和議に付いて何等の效果もないのであるから、受取る必要がない。貴方の方で、何處迄も、誠意を以て、和議を講じよう、とするのならば、書面は、正式に署名したものを持つて居るのが、當然である。又、各砲臺に、据付けてある大砲は、此方が、戰ひに勝つて居るのであるからすべて沒收する事にする。猶ほ一昨日の事であるが、和蘭の水兵が、小船に乘つて、出掛けた處を、下之關の砲臺から、小銃を亂發して、遂に小船と共に、水兵を虜にしてしまつたが、貴方の方で、眞に和議を講ずる考へであるならば、先づ以て、その水兵と小船を、此方へ戻してからでなければ、和議の談判に、應ずる譯にはならぬ』

談判は、どう繰返しても、結局は、其處へ、落付いて居るので、如何に機智才略に富んだ高杉でも、これぱかりは如何とも爲し得なかつた。

そこで、藩主の署名した、正式の書面を、持つて來るまで、一時の休戰は、承知させたが、和蘭の水兵の一條は、よく調べて見なければ、返事の出來ぬ事であるから、之れも併せて、二日間の猶豫を請ふ事にして、其日の談判は、終つたのである。

高杉等は、一先づ長府まで、引揚げて來た。長府には、長門守が、出張して居るから、拜謁を願つて、此問題を決するつもりであつた。處が、和議に對しては、反對する者が多く、其等の者は、高杉等が、伊藤、井上と款を通じて、君命と僞り、此和議に掛かつたものとして、ひどく憤慨して居る者があるので、動もすれば、過激な手段に、出ようとする者が、少からずあつた。

船木の代官が代つて、此時には、久保松太郎といふ人が、代官になつて居た。此人は、伊藤と、極めて親しくして

居たので、伊藤が、高杉等と共に、來たのを見て、コツソリ伊藤を呼んで、

『さて、此度は、非常の御苦心で、何とも申しやうがない。君の盡力は、心から感謝して居るが、何分にも、頑迷な連中が多いので、君等の心事を、よく知つて居る者が少なく、實は、高杉と君を暗殺する、といふて、密かに計畫して居る者があるから、今暫くの間、身を匿して、過激派の襲撃を、避ける事にしたら、どうであらうか』

と、意外の事を打明けられて、伊藤は、呆れ返つた。

『それは、誠に親切の忠告であつて、感謝の辭もない位である。英吉利から歸つた當座は、さういふ事もあつて、一時は身を匿したが、昨今に至つては、そんな莫迦らしい事を、考へて居る者は、只の一人も無からう、と思つて居た。殊に、君命と僞つて、和議を講ずるなど、といふ事は、實際に於て、出來得べき事でもなし、又、それ迄にして、和講の衝に當らう、といふ考へは、更に持つて居ないのである。偏に、毛利の社稷を、大切に思ひ、且つは、長防二州の安全を思つて、今日まで身を拋つて、働いて來たのに、そんな莫迦な事を、考へて居る奴があるとすれば、餘りに莫迦々々しいから、わしは、今日限り、こんな役目は、御免を蒙る事にする。高杉も、恐らくわしと同じ考へであらうから、我々に代つて、相當の人物が、此役目を引受けたら、よからう』

『さう怒られては、此秘密を洩した、拙者の責任が重くなるばかりだ。斯うした莫迦な事を、企てゝ居る者がある、と云ふたのも、つまりは、君等の一身を安全にして、君國の爲めに盡して貰はうと、思つたればこそであるのに、却つて君が、さう怒つてしまつては、拙者が、甚だ迷惑をするから、一時のところ身を匿して、その疑ひが晴れたら、もう一度出て來て、此大役を、果して吳れなければ、それこそ、毛利の社稷は危いのであるから、どうか、高杉と井上も、下之關から引揚げて來るに違ひないから、先づそれ迄は、拙者の云ふ通りに、なつて居て貰ひたい』

久保は、條理を盡して、伊藤を、說き付けようとする。伊藤も、久保の親切は、よく知つて居るから、一時は怒つ

たやうなものゝ、久保に對して、何處迄も、剛情を張り通す考へは、起らなかつた。

丁度、そこへ、高杉が、訪ねて來て、此話を聞いたので、伊藤も、遂に我を折つて、久保の望みを、容れる事になつた。

更に迎ひを待つ事にしよう、と云ひ出したので、一時のところ、身を匿して、

久保は、獨て用意して居たものか、百兩の包を、二つ出して、

『これは、ほんの僅かであるが、一時でも身を匿すには、餘計な費用も、掛かる事であらうから、之れを其中へ、加へて貰ひたい』

如何にも、行屆いた致し方で、久保の誠意には、二人も、ひどく感激した。

斯ういふ次第で、高杉と、伊藤は、不意に姿を匿してしまつたから、異人と談判した、結果の報告は、誰れもする者が無くなつてしまつた。

翌日の朝、井上は、下之關から引返して來て、久保に會ふと、此事を話されたので、井上は、全身の血が、頭に上るまで怒つて、

『斯ういふ事もあらうか、と思つたから、若殿に拜謁して、此大役を引受ける時に、念に念を入れて置いたのだ。然るに、斯ういふ事になつた、といふのは、要するに、若殿の威力が、弱くなつた爲めである。それは孰れとしても、此機會を逸しては、再び異人と、和議を講ずる時は來ないから、何でも此際は、高杉と伊藤に、再び出て、此役目を果させなければならぬ、此上は、若殿に拜謁して、大いに論じ付けなければならぬ』

と、いひ乍ら、井上は、プン〳〵怒つて、長門守の御前へ出た。

九

井上が、長府へ着く前に、長門守は、船木の陣屋へ、引揚げて居たので、井上は、すぐに船木へ駈付けて、長門守

の前へ、出たのである。

『今回の和議については、一度、手違ひを生じて、更に、私等三名が、改めて御沙汰を、蒙る事になつたのである が、其當時、私等より、懇々申し上げて置いた趣旨は、能く御承知の儀と、考へて居たにも拘らず、私が、下之關から引揚げて來ると、高杉と伊藤は、既に身を置して、その行く處を知らぬ、といふ有樣に、なつて居た。これは、君側の家來が、飽くまでも、攘夷を主張して、今回の和議に、反對である、といふ爲めから、私等三名を、打斬つてしまふ、といふ計畫があつて、それが爲めに、高杉と伊藤は、其身を置すに至つたのである。斯樣な狀勢に立至つたのは、偏に君公の眞意が、家來共に、貫徹して居らぬからである、と思ふ外はない。右樣の次第では、今後共、如何なる變事が、生ずるかも解らぬから、私等に於ても、此の和議について、使命を辭退いたす外はありませぬ』と、いふ意味の事を、何の遠慮もなく、長門守に向つて、これ迄に言ひ盡したのは、流石に井上である。長門守は、さうした事情の起つた事は、少しも知らなかつたのであるから、井上の言ふ所を聞かれて、頻りに首肯いて居られた。

『其方の申す所は、能く相解つた。今後は、左樣の事がないやうに、能く注意いたすに依つて、和議の使者は、相變らず三名にて、引繼ぐやう致せ』

『御言葉では御座いますが、獨り君公の御思召が、左樣で御座いましても、重役の者共が、御思召に從つて、充分に過激派の取締りを致すのでなければ、何の甲斐もなく、徒らに斯うした事情から、時間を過す內に、またまた和議の機を、失する如き事があつては、それこそ一大事でありますから、此使命は、他の者へ御任せ下さるやう、願ひ上げます』

『それは、一應尤もでもあるが、改めて重役等へ、嚴重に申渡す事に致すから、和議の一條は、其方等三名にて、飽く迄も引受くるやうに致せ』

『ハ、ツ、誠に有難き御諚を、承りまして、私は、滿足に存じまするが、猶ほ念の爲め、私の面前に於て、重役等へ、確と御申渡しの儀を、願ひ上げまする』

そこで、長門守は、重役を呼出して、井上の居る前で、

『今後は、井上等に對し、穩かならぬ企てを爲す者の取締りを、嚴重に致す事は勿論、萬一にも、その取締りに叛く者のあつた場合には、臨機の處分を致せ』

此命令には、重役等も恐縮して、再び左樣な事はさせぬ、といふ御請をして、高杉と伊藤を、再び引出す事にしたのである。

然るに、高杉と伊藤は、あまりの莫迦々々しさに、疳癪を起して、容易に出て來よう、としなかつた。茲に於て、長門守は、山縣半藏と、小姓一人を、二人の所へ遣す事にして、山縣から、二人に對して、君命の詳細を傳へたから、遂に二人も、我を折つて、長門守の御前へ出て來た。

和議の方針は、大體に於て、內定はしてあつたのだが、何しろ、異人の方の要求が、豫期した以上に、大きいものであつたから、更に評議をする事になつて、議論百出の有樣であつた。

伊藤の意見は、

『何分にも、自分等三名の資格が、藩に於ては低いのであるから、愈々といふ時になつて、つまらぬ故障が起り、それが爲めに、和議の談判に、差障を生ずるやうな事があつては困るから、家老を首め、藩廳に於て、重き役を勤める者を、此一行に、加へて欲しい』

と、いふ事を唱へて、それには、大した議論もなく、伊藤の言ふ通りになつた。

家老の中から、宍戸備前、毛利出雲、井原主計の三人が、行く事になり、重役の中からは、山田宇右衞門、楢崎彌八郎、渡邊內藏太、波多野金吾等が、加はる事になつて、別に、北條瀨兵衞、矢島半平、村田藏六、戶田龜之助、松

村甲龜の數名が、同行する事に決した。

其内の波多野は、後の廣澤兵介であつて、村田は、大村益次郎の事である。どちらも、一廉の人物であつたが、村田の蘭學と兵法は、藩中無二のものであつた。又波多野は、非常に識見のあつた人で、其頃から、同輩の中では、却々に重きを爲して居た。

高杉が、最初の談判に、書面の事で、異人に言質を與へてあるから、それを書き改めて、持つて行く事になつた。前の書面には、單に『日本防長國主』と、認めてあつたので、氏名の無い書面は、受取る事が出來ぬ、といふて突返されたので、それは書き改める事にした。その文章も、全然、前のとは違へて、書く事になつたが、要するに、前の書面と一つにして、示す事になつたのである。

昨年以來、朝命幕令に從ひ、下ノ關に於て外國船を、及砲擊候處、豈計、暴發の名を蒙り、違背朝命する姿に相成、折柄家來兩人、歸便を以て、懇諭之趣有之に付、朝旨伺定度、長門守及發馬之處、未着中京師變動差起、不得已、中途より歸國、不得達其意候、過る三日、貴國軍艦姫島へ來着之由に付、下ノ關通船差障無之段、可及應接と、家臣兩人に書翰持參申付候得共、出帆後に付、猶亦、於下ノ關、可及應接之處、時刻も移り、終に戰爭に立至り、素より宿怨も無之、數萬之國民を苦しめ候儀、不本意の事に付、和議を冀之外、無他事候、此儀宜敷御酌量被下度、委細家老毛利出雲其外可申述候、以上

八月十日

松平大膳太夫兩判

高杉等は、旗艦のユラヤルズ號へ乘付けて、慇々二度目の談判に掛かつたのだが、船木から附いて來た、多數の人は、すべて陸上に待合せ、船へ乘込んだのは、高杉等三名と、外に井原が居たのである。

そこで、異人の方から、正式に要求の箇條を示した。

其中の主なる點は、第一が、償金の三百萬弗を支拂へ、といふ事で、第二は、下之關を四ケ國管理の下に置いて、自由港にする、といふ二ケ條であつた。其外の、砲臺を取毀してとか、或は大砲を引渡せ、とかいふやうな箇條は、此場合に於て、大した問題ではなかつた。

高杉は、その要求書を見て、

『此要求は、可成り重大な事であるが、思ふに、我藩を戰敗者として、見て居られるやうであるけれど、如何なる次第で、斯かる過重な要求をせられるのであるか、其趣意を承り度い』

『貴下の方は、現に戰ひには敗れて、和議を請ふて居るのであるから、我々の方から見れば、貴下の方は、正に戰敗者、である。從つて、此要求は、至當である、と信じます』

『それは、貴下の方が、間違つて居る。凡そ戰敗者とは云へぬ譯だ。一勝一敗は、固より戰爭中の一過程であつて、別に不思議とするには足らぬ。明日にも、此方の勝利にならぬとも限らぬのだから、一度や二度の戰ひで、戰敗者としての取扱ひは、迷惑千萬である。又、和議を申出たのは、双方の誤解の點あつて、此戰ひになつたのであるから、一應は、斯うして話し合つて見るのも可からう、と考へたからの事で、世の所謂、降伏とは、意味が違ふのである』

高杉が、談判の調子は、全く戰敗者としての談判であるから、若し其事について、或は不都合であるとか、或は要求すべき點がある、といふのならば、朝廷に對して、爲すべき事であつて、我藩が、その全責任を、負ふ事は出來ぬ。殊に、莫大な償金を出す、といふが如き事は、思ひもよらぬ次第である。殊に、下之關の事に關しては、飽く迄も、

人等も、頗る驚いたらしい。高杉も、其點については、異でなく、朝廷の御沙汰に從つて、爲した事であるから、これには、『下之關を通過する、商船を砲擊した事は、或は不都合であるとか、或は要求すべ

き點がある、といふのならば、朝廷に對して、爲すべき事であつて、我藩が、その全責任を、負ふ事は出來ぬ。殊に、莫大な償金を出す、といふが如き事は、思ひもよらぬ次第である。殊に、下之關の事に關しては、飽く迄も、

人等も、頗る驚いたらしい。高杉も、其點については、異でなく、朝廷の御沙汰に從つて、爲した事であるから、これには、『下之關を通過する、商船を砲擊した事は、或は不都合であるとか、或は要求すべ

き點がある、といふのならば、朝廷に對して、爲すべき事であつて、我藩が、その全責任を、負ふ事は出來ぬ。殊に、莫大な償金を出す、といふが如き事は、思ひもよらぬ次第である。殊に、下之關の事に關しては、飽く迄も、

お斷りする外はない。元來、日本の國は、上に一人の天子を戴いて、三百諸侯が、六十餘州を分割して、お預かりして居る、といふのに過ぎないのであるから、縱令、一坪の地所たりとも、外國人に對して、お委せする事は出來ぬ。それも、朝廷からの御沙汰ならば格別、今の場合、我藩としては、斷乎として、此一箇條は、お斷りする外はない』

『日本政府、德川さんあります。初め、德川さん懸合ひましたが、毛利さん行くよろしい、話ありまして、毛利さん懸合ひましたところ、毛利さん、朝廷へ行くよろしい、話あります。朝廷さん懸合ひましたら、德川さん行くよろしいあります。全體、何處の政府、本當の政府ありますか、日本の主權者、何處に在りますか、少しも解りません』

これは無理もない譯で、つまり云へば、責任のなすり合ひをして居たのであるから、異人等が、斯うした疑ひを持つのは、尤も千萬である。今また、同じやうな事を云ふて、高杉から、要求を刎付けられたので、その疑問を披瀝して談判の目標とすべき、責任の所在を知らうと、考へて、斯ういふ事を、云ひ出したのであらう。そこで、高杉は、『あんた等は、日本の國體を知らないから、さういふ迷ひを生ずるのであるが、全體、日本は、上に、一人の天子を戴き、下に、德川將軍なるものがあつて、國家を治めて居るのであるから、此度のやうな、國際關係の問題が、起つた場合には、その全責任は、德川將軍に於て、負ふべきものである。從つて、其談判も、幕府に對して、爲すべき事であつて、朝廷や、大名に對して、如何に嚴しく云ふて來ても、それは駄目である』

『併し、下之關の、商船砲擊は、毛利さんの家來がしたのであるから、其責任は、毛利さんに掛かつて行くのが、當然の事ではあるまいか』

『大名は、それ〴〵に領地を分けて、その支配をして居る、といふ丈けの事で、すべては、朝廷と幕府の命に依つて動く事になつて居るのであるから、假令、下關の砲擊が、毛利の手で、爲されたとしても、その責任は、朝廷と幕

府に、歸すべきであつて毛利には、何等の責任もないのである』

『德川幕府は、既に通商條約に、調印をして居るのであるから、左樣な命令を下す筈もなく、從つて、此事の責任は幕府にないものであると、考へるが、此點はどうであるか』

『砲擊に關する、御沙汰は、朝廷から下つて居るが、それに就いての責任は、幕府に在るのだから、談判は、幕府に向つて爲すのが、當然であり、又要求すべき事があるなら、それも幕府に向つて爲すべきである』

『左樣に聞いてみると、愈々解らなくなつて來るが、も少し解るやうに、說明して慾しい』

『よろしい、承知した。然らば、日本の國體が、どういふものであるか、といふ事を、これから說明する事にしよう、併し、その說明は、可成り長くなるが、最後まで聞いて、吳れるか、その御返辭に依つて、物語る事に致さう』

『說明の長いこと、少しも構ひません。能く解るやう、話して下さい』

茲に於て、高杉は、國體の說明を始めたのであるが、思ひ切り、古い所から、說き始めたから、一日や二日はそれで時間を、潰す事になる譯だ。

『抑も、國常立尊は……』

と、神代の事から始めて、順序に從ひ、說明をするのであるから、之れには、異人の方ても、頗る弱つた。

『天之瓊牙を以て、滄冥を探る、その劍の先に、滴つた露が凝つて、磤馭盧島となる……』

恰で、手品師の說明染みた事を始めたので、異人には、何が何だか、薩張り解らない。殊に、その通譯をする者が伊藤と、井上であるから、迚も滿足な通譯の、出來る譯はない。前にも云つた通り、ロンドンに居る事、僅かに半年餘り、朝夕の挨拶や、小買物の英語ぐらゐは出來るにしても、こんな難しい話の通譯は、全然出來なかつたに違ひない。

異人の方の通譯は、イギリス人のサトーであるが、これとても俗な日本語が少しばかり解るといつた、程度のもの

であるから、要するに、通譯が、三人寄つて、通譯の用を爲さぬのである。

高杉は、そんな事にお構ひなく、一流の雄辯を以て、國體に關する說明をつゞけるので、つまり異人は、何の事か解らぬ儘に、その說明を、聞いて居る譯で、迷惑な事、此上なしであつた。

高杉の偉い所は、斯うした場合に、現はれて來るのだ。對手が、解らうが解るまいが、そんな事に頓着なく、言ふだけの事を言つて、その要求を、斷りさへすればよいのであるから、話の解る解らないは、少しも問題にして居ないのだ。

全體、異人等が、日本へわざ〳〵、やつて來て、斯ういふ懸合をするのに、日本語が解らないといふのは、異人の方が惡いので、其責任は、日本の方にないのであるといふのが、高杉の考へらしく、思ひ切り、困らせてやれ、といふ調子で、喋舌り立てるのであるから、聞いて居る方にすれば、迚も堪へられるものでない。

それにしても、相手に通じない、といふ事を、知り乍ら、平氣で喋舌りつゞけるのは、高杉の如き人物にして、初めて出來るのであつて、普通の人間には、決して出來る事ではない。昔から、聾と話をした者はなからう。

少の間、休息する事になつた。高杉の說明は、中止された。其時に、サトーは、伊藤と、井上に向つて、

『高杉さんの說明は、少しも判りません。判らない事を、何時まで聞いて居ても、仕樣がありませんから、何とか、話の折合をつけたい、と思ふが、どうですか』

『それは、どうにもなりませう。併し、あなたの方の要求が、餘りに過大である爲めに、斯ういふ事にもなつて來たのであから、土地と償金の問題を除いて、其他の要求には、應ずる事にして、折合をつける事にしたらどうですか』

『土地と償金の問題を除けば、此談判は、全く骨拔になつて了ふのであるから、困ります』

『イヤ、骨拔にはなりますまい。改めて幕府へ懸合へば、どうにかなるでせうから、寧そ、さうした方が、いゝと思ひますが、あなたの考へはどうでありますか』

『幕府へ懸合つて、どうにかなるといふ見込がありますか』

『其點については、私の方でも、蔭ながら、お手傳をいたさう』

『其事は、必ず實行出來ますか』

『私等二人で、お引受けいたさう』

話が、斯ういふ風になつて、來たので、サトーも考へた。どうせ、こんな懸合をして居た所で、迚も見込はないのであるから、これは、二人の言ふ通り、幕府へ對して、直接に談判する方が、有利であるとも、考へられるし、此戰爭について、毛利の方で、砲臺を取毀したり、大砲の引渡しもしたり、或は、謝罪の意味を含んだ、使者も寄越して居るのであるから、勝利者としての面目は、不充分ながらも、立つて居るのである。殊に、幕府への談判について、毛利の方から加勢もする、といふのであるから、二人の云ふ通りにした方が、或は好都合であるかも知れないと考へたので、これから、サトーが、水師提督や、參謀の方へ、だん〳〵話し込んで、遂に、二人の云ふ通りにしよう、と迄に、運びをつけたのであつた。

砲臺の取毀や、大砲の引渡しについて、異人の方から、不遠慮に上陸して來ると、和議に反對の過激派と、どういふ衝突が、起るかも知れないし、又毛利の面目上、何とかして此事だけは、巧く遁れたいものだと、思つて、井上はこれから徐々、異人を脅かしに掛かつたのである。

『下之關の附近には、無數の地雷火が伏せてあつて、その取除きが、容易な事でないから、澤山の兵士が、勢揃ひして、上陸する事は、差控へて貰ひたい、斯樣に約束した以上は、必ず約束の通りするのであるから、一切を私等に任せて、あなた等は、たゞ監視する、といふ位の事にして欲しい』

『よく判りました。其事は、伊藤さんと、あなたに任せます』

斯ういふ譯で、やうやく談判は、打切りになつたのである。

此時に、最も興味ある逸話がある。償金の事はどうか斯うか德川になすり附ける事になつたが、下之關開港の一條に、就ては、餘り劇しく爭ふて、談判が不調になつては、面白くないと云ふので、伊藤が一同を代表して、山口の城下に、駈け着けて、長門守に、此事を上申に及んだ。

長門守は、敬親侯とも相談の上、伊藤を招いて、

『それ程、異人が、土地を欲しいと、云ふならば、下之關は困るから、彦島を渡して、求めに應じたら宜からう』と云はれたので、伊藤は、其の命を受けて、引き返して來たが、どういふ譯であつたか、伊藤が、それを、高杉に傳へなかつた。唯下之關を開放する事は拒め、といふ事だけを傳へた。高杉は、飽迄も、其旨を奉じて、掛け合つて、下之關の開放は拒絶してしまつた。伊藤が、どう云ふ意見で、高杉に、伊藤が、君公の命なりといふので、高杉に、入れ智慧をして、下之關の代りとして、彦島を四ケ國の手に渡し、共同管理に移して置いたものと假定したならば、どうであらうか。關門海峽の入口を塞がれたやうなもので、どうにも仕樣のない事になつてしまつたらう。少し大袈裟に云へば、日本の獨立の基礎にも觸れる程の大問題である。それを、伊藤が、高杉に傳へずして、單に下之關問題だけの談判に止めさせてしまつたのは、假令、伊藤の說明を聽かずとも、此取計に對しては、伊藤の働きの一つとして、後世に傳ふべき事柄であると、思ふ。

扨、斯ういふ次第であるから、一先づ談判は打切りとなつて、四ケ國の聯合艦隊は、横濱に引揚げる事になつた。尤も、德川に對し、更に掛け合ひをするに就ては、相當の相談相手がなければならぬので、それに就ては、伊藤が、窃かに其役目を引受けて、横濱に出かけることになつた。幕府の代表者が、後になつて此掛合を受ける時分に、四ケ國公使が餘りに日本の事情に、精通して居るのに驚いた、と云ふ事であるが、其蔭に、伊藤が、附いて居たことは、少しも知らなかつたのだ。斯ういふ次第で、償金の三百萬兩は、遂に德川幕府の負擔になつてしまつたのだから、面白いではないか。

政治家としての伊藤は、明治になつてからであるが、此書は、主として、幕末の俊輔時代を說く事にしたので、明治には及ばなかつた。此通りの調子で、それ迄も述べる事になれば、とても頁數が許さぬから、不可能である。殊に、井上傳も、此卷に添へることになる以上、ます〳〵頁數の少なきに苦しむので、伊藤の方は、是れ位で切上げる事にした。

井上は、多く伊藤と、相並んで來たから、伊藤の傳中、井上の名は、しば〳〵現はれて來る。此點からいへば伊藤の傳記が、井上の傳記であり、井上の傳記は、同時に、伊藤の傳記といふ事になる譯だ。

兎に角、これから井上の方へ、主として取りかゝる事にしよう。

井上馨

家系及び其爲人

井上は、天保六年の十一月下旬、山口の城下外れに在る、湯田といふ所に生れた。元來が、毛利家の客臣で、普通の家來とは、格式が違つて居た。遠く先祖を尋ぬれば、清和天皇第六の皇子、貞澄親王から出て居る。初め、信州の高井郡に、井上といふ所があつて、其處で、家を成した爲めに、井上姓を名乘ることになつたのである。系圖や家柄に、重きを置く時代の人としては、相當に威勢が利いた家だ。其後、幾多の變遷があつて、井上家が、藝州へ移つて來てから、毛利家との關係が付いて、其家來の如くなつてしまつた。

元就が、中國筋に、覇業を成す時分に、井上の一族が、非常に驀つて居て、其勢力も強く、是が爲に、毛利家の威令が、動もすれば行はれぬ傾向きがあつたので、元就が、非常の英斷を以て、井上の一族を絶滅せしめよう、と圖つた。さかんに武力を用ひて、虱潰に、一軒づゝ滅してゆく。然るに、その一族のうち、五郎三郎といふ人が在つて、平生から柔順で、元就の信用も、厚かつた爲に、其禍を免かれることが出來て、爾來、毛利家の客臣として、殘される事になつた。井上家と毛利家の關係は、斯うした綾になつて居る。祿高は少く、重い役には用ひられなかつたけれど、井上家に對しては、毛利の方でも、餘り輕くは見て居なかつた。初は三百石位、取つて居た時代もあるが、毛利家の財政が、窮迫して來て、どうにも始末が決かない、といふので、家來に與へてある、食祿の中から、其幾分を取上げて、財政整理の方へ廻はすといふ事があり、其影響を受けて、井上家でも、段々食祿が減つて、聞多が、生れた頃には、僅に八十石内外の輕いものになつてしまつた。

乍併、元就以來の舊臣ではあり、又、多少の田地もあつたから、食祿は少く、家族は多かつたが、相當の生活はして居られた。井上の父、光亨は、家附の嗣子でなく、德山藩の棟居家の伜であつたが、井上家に、男子がなかつた爲に、貰はれて來て、相續する事になつたのである。家附の娘との間に出來た子供が、長男、幾太郎、次男、勇吉、

是が後の聞多、明治の侯爵馨である。其外に、女子が四人あつて、割合に子福者の方であつた。家祿は少いが、子供は多く、從つて、氣樂に世を送る、といふ程の餘裕の無い所から、一家を擧げて、内職をやつて居た。光亨は、非常に嚴格な人で、子供に對しても、嚴重な教育をして居たのであるが、聞多が、那アした激しい氣象を有つて居たのも、父の訓董が、與つて力があつたのだ。

昔の武家では、長男さへ、相當な者であれば、其後の子供は、何うなつても可い、といふやうな扱ひをしたものだ。勇吉も、次で、大概は養子に、やられてしまふのであるから、子供の時分から、有耶無耶かの扱ひをされたものだ。勇吉も、次男に生れた爲に、兄の幾太郎が、家督相續の出來る以上は、必要の無い體であるから、同じ藩士の、志道愼平の養子になつて、家附の娘を妻にする事になつた。養父の愼平が、亦、極めて嚴格な人であつた。實父の光亨にも劣らぬ、謹嚴家の手に移されて、勇吉は、大分それにも惱まされたのであるが、晩年の雷爺は、斯うした工合に、實父と養父に挾まれて、鍛へ上げられたのであつた。

實家に比ぶれば、養家の方は、遙に優つて居た。家祿も、二百石は取つて居たのだから、大分内福であつた。從つて、文武の二道を、磨く上にも、極めて都合が好かつた。實家は、疲弊して居ても、實父の光亨が、嚴しい人であつたから、武士の學ぶべき道は、啓いて置いて吳れたが、養家へ來てからは、文武の修業は、相當に出來たのである。此時分から、腕力自慢で、疳癖の強く、何事にも喧嘩腰であつた事が、同じ青年の仲間に、甚く恐れられて居た。安政二年の春、毛利敬親が、參覲交代で、江戸へ出る事になつて、其時に、勇吉も、供廻りの中に加へられて、出府することになつたが、聞多の江戸行は、是が最初であつた。

維新前と維新後の彼

境遇は、其人を動かす、といふ諺の通り、何んな者でも、其境遇に依つて、爲人が、自から移り變つて行くのは、

止む事を得ないが、井上のやうに、其境遇に依つて、爲人の著しく變つたのは多くあるまい。維新前の聞多を見れば、唯直情徑行、一意、天下の事を以て志とした、志士の風貌が、現はれて來るが、明治になつてからの井上を見ると、明けても、暮れても、慾の皮が突張つて、他の物と、自分の物との區別なく、欲しいと思ふものは、直に、自分の懷に入れる、といふ風に見えて、是が爲に、非常に惡聲を放たれた場合もある。世間の人の言ふやうな、惡い人だとは、思つては居ないが、批難を加へれば、隨分加へるだけの餘地はある。其處に、維新前後の井上の區別は明瞭と現はれて居る。其他の人物に於いても、或は左樣であつたかも知れないが、井上のやうに、明きり現はれて來ない。兎に角、聞多は、損な性分に、生れた男である。

今から思へば、維新前に、懸命の働きをして、或場合には、向不見であると迄、思はれる位に、過激な活動もしたもので、其働きが、天下國家の爲であつたか、といふ區別も、判らなくなつてそれともに、毛利藩の爲であつたか、といふ區別も、判らなくなつて居る點はあるが、懸命で、他の爲に働いた、といふこと丈は言へる。俠氣に富む、志士の面影は、現はれて居た。それが、明治政府の役人になると、直に尾去澤の銅山事件で、一時は、『慾の皮の井上』とさへ、綽名した位であつた。乍併、此人の力に依つて、大くなつた者も少なくない。又此人の鼻息に依つて、大い財産を造つた者もあるのだ。それが皆、乾分のやうな關係になつて、井上の周圍に附纏つて居た。仔細に調べて行けば、他人の急危を救うた事も多くあるが、それでも、多くの人には、良く評はれなかつた。或人は、

『井上の俠客肌は、正にそれであつたに違ひないが、併し、市井の俠客肌とは、稍と違ふ所があつて、強い者を助けた、といふ俠客である』

と嘲つた。實際は左樣でなく、弱者の味方をした點もあるのだが、唯斯ういふ工合に、井上が、世間から誤解されたといふものは、要するに他の事を引受けると、全然で自分のことにしてしまつて、夢中になつて世話を燒く、それが

爲に、公私を混淆するやうにもなるし、自他の區別も無くなつて來る。左樣な所から、例の雷流の遣方を見て怪しからぬ奴だ、と思ふ第三者が、前のやうな批評を、爲るやうにもなつたのだ。世間には、井上のやうに、他人の身の上に立入つて、世話を燒く人もあるが、井上程に憎まれないのは、多少其間に、自分といふものを置いて、幾分の遠慮を加へて、他の世話をするから、そこで井上に對する程猛烈な敵も出て來ない。斯ういふ點は、井上が、普通の人と、異つた所があつて、聽て其一生を、誤解されるやうになつた、原因でもあらう、と信ずる。

兎に角、井上といふ人は、洵に世話好きな、善い人であつた。怒つた時には、何んな聲を出して、怒鳴り付けるか、一度も聽いた事はないが、苟も一旦、交際を結んで、少しでも氣に入れば、其人の爲に、自身の事をするやうにして、世話を燒く、といふ所は、正に人間の美質を備へた人だ。井上に、世話を燒いて貰つて、身が立つてから後も尙一家の私事にまで干渉されるので、遂には惡聲を發つやうに、なつた者もあるやうに聞いて居るが、斯樣なのは、世話になる奴の我儘で、井上の方が惡いのではない。全體、他の世話になつて居りながら、其人の遣方の善惡を論ずるのは、間違つて居る。少しでも其人の扶助を受けたならば、一生、其人の前に、頭の上がらないのは當然である。從つて、世話をした方が、干渉がましい事をするのも、善いといふて褒める事は出來ないが、先づ當然のことゝして看過す外はないのだ。井上も、左樣な考へで、他人の身上にまで立入つて、色々な世話燒きをしたのであるから、何れにしても世間で言ふやうな惡人ではない、といふこと丈けは言へる。

元老としての彼

明治廿二年の頃、內閣の上に、黑幕會議といふ事が始まつて、それが何時か、元老會議と稱されるやうになつた。總理大臣が、少し力の弱い人であるから、獨り手放して置いては危ないから、といふので、謂ゆる維新の元勳なるものが、その背後になつて、高等政策の相談をうける。時と場合に依つては、遡んで世話燒きに、指揮けるといつた

やうな事が、幾たびか繰返されて居るうちに、元老會議の名が起り、政治的に、元老といふ階級の人が、幾人か生れて來たのである。

事は、議會政治の前に始まつて、いよ〳〵議會が開けても、矢張り存續する事になつた。實際政治の事に、發言は出來なくなつたが、內閣組織の上には、一種の權力を有つやうになつた。

元老の首一つが、右か左へ動けば、內閣が潰れもするし、また內閣が成立するやうにもなつた。どう考へても、莫迦らしい事、此上なしであるが、實際問題としては、之れを如何とも爲る事を、得なかつたのである。

昨今では、西園寺一人が、元老として居殘り、恐らく此人一代で、元老も、消えて無くなるのであらうが、今迄に元老として數へられたものは、長州派に、伊藤博文、山縣有朋、井上馨があり、薩州派に、黑田淸隆、大山巖、松方正義があつた。

濱閥を超越して、公卿の出身で、元老になつたものは、西園寺ばかりであるが、以上の人を通じて見て、本統に、元老らしい元老は此人のみである。

家格、閱歷、人格、學識、すべての上から見て、此人ほどの元老は、これから先きにも、種切れてあらう、と思ふ。不正を排し、不義を近付けず、多く情實を去つて、道理に基づく、といつた遣口が、とても此人ならでは見られない頗る上乘のものである。

其他の元老は、みな一長一短があり、元老の完璧とは、いひ得ぬ。獨り、政治家の資質を、多く有つて居たのは、伊藤であつた。黑田大山は、惡い事を爲し得ぬ人である、といふに過ぎなかつた。山縣は、全く政治を、理解して居なかつたらしく、井上に到つては、自分の氣儘一ぱいに、思ひついた通りを、押切るといふ丈けの事で、時に善い事もあるが、多くは無理を通した人であつた。

世間では、伊藤、山縣、井上を、長州の三尊と稱して、此三人が、元老として揃つて居た頃の勢力は、實に素晴し

いのであつた。

明治の末期から、大正の初頭に於ける、元老に就て、著者の書いたものがあるから、それを引用する事にしよう。

山縣が、陸軍に根據を置いて、政治の方にも、手を出して居る所は、なか〳〵に凄い點もあるが、實際に於ては、矢張り井上が、元老としての眞の實力は、あつたらしく思はれる。是は、其人の性質にも依るが、井上に限つては、何んな難しい問題に出會つても、直に其可否を、決するだけの勇氣があつた。非常に自我の念の強い、一旦思立つた事は、善惡に拘らず押通す、といつた氣分のあつた爲、他からは惡く評はれて居たが、山縣のやうに、陰險な風は少しもなかつた。伊藤が、未だ世に在る間は、山縣と井上を加へて、之を長州の三尊といふたのであるが、今は、伊藤井上の二尊が逝つて、山縣の一尊が殘つただけで、三人の中の二人が斃れて、一人丈け殘つたのだから、其三人の尊い分が、一人の山縣に集つて、それだけ有難味を增す、といふのが、當然の事の樣には思はれるけれど、實際の上から見ると、山縣の尊い箔も落ちて、今までのやうな調子には行くまい。詰り言へば、伊藤と井上があつての山縣で、又山縣があつての伊藤と井上で、此三人の中、誰が缺けても、都合が惡いのだ。況して、伊藤と井上が、缺げた以上は、山縣の齡も、七十を越えて居るのであるから、左なきだに、人生の寂寥を、感じ易い老人としては、山縣も、頗る心細くなつて來て、或は是が爲に、其死を速めはしないかといふ處もある。旁々以て、三尊の中の生き存つた、山縣は、何の點から見ても、影が薄くなつたには違ひない。

全體、元老といふ者が、正體の解らぬ怪物であつて、吾人國民の眼から見れば、何の變哲もないのだけれど、さればとて、實際に就いて見れば、非常な權威を有つて居て、何時でも政變の時分には、ヒヨコ〳〵乘出して來て、涎を拭きながら、嚴しい理窟を捏る。それに動かされて、周圍のものは理由もなく、ヒヨコ〳〵叩頭をして居るのだから實に可怪なものだ。他の爲した事が惡いから、といふて、叱言を言ひに來る。其元老なる者に、今後を引受けて、やつて御覽なさい』といへば、『イヤ、それは御免蒙むる』と、言ふて、逡巡をしてしまふのだ。けれども、世話を燒くだけは、人並外れて嚴しくする、といふのだから、始末にならぬ代物である。憲法の上からいへば、補弼の責に任ずる者は、內閣の大臣であつて、其以上に、一國の權威を、左右する者は、無い筈である。然るに、此內閣大臣の上に立つて、而も、責任の外に、超然として居て、それで、大臣以上に、權威を有て居るのが、元老といふのだから、何う考へても、元老の正體は解らない事になる。前年、亞米利加の公使が、或名士に向つて、『日本には、元老といふ者があるが、職員錄を見れば、其名前は無い。既に政界を隱遁して居る人か、と思へば、政變が起ると、直に出て來て、世話を燒く。而も、それに非常の權威を有たせてある、といふのだから、不可解い。全體、此元老といふのは、何ういふ譯のものであるか』と、いふて、質問された時には、流石の名士も、答へる事が出來ないで、顏を赤くしたといふ事であるが、全く是は、何處の國の人が、考へて見ても、斯んな不思議な者はあるまい。亦たコンナ正體の解らぬ者があるのは、我日本國の外には無からう。

維新の舞臺に立つて、非常に努力し、幕府を倒して、明治政府を起したに就て、大いに功績のあつた者で、尙引續き、明治政府に、長い間の勤務を怠らず、國家に偉大な功を遺した、といふ人、それを元老と稱するのである、といふ解釋が、若し相當である、とするならば、今の元老と謂はれて居る者のうちにも、頗る疑はしい元老がある。第一に松方といふ人は、維新の大舞臺には、何等の關係を有つて居なかつた。此人の前名、卽ち助左衞門といふ名を言ふて、直に『ハ、ア、あの松方であるか』と感ずる人が、果して幾人あるであらうか。明治四年までは、豐後の日田と いふ所に、縣令を勤めて居たのが、此人だ。山水の眺望に、富んで居る、日田は、詩人や畫家の間には知られても居らうが、一般の人には、唯日田と言ふた所で、恐らく知つて居る者はなからう、と思ふ位に、詰らない土地だ。東京の者は、米相場師として有名な、米倉一平が、生れた所だ、といふので、其仲間の人丈は、知つて居るだらうが、豐後の山中の、淋しい町村に、過ぎない處である。其處の縣令をして居た、松方助左衞門は、漸く明治四年に、大藏省

出仕を命ぜられて、それから、中央の舞臺に、關係を有つたのである。初て大藏省へ出て來た時に、先づ受付の役人を驚かしたのは、大きな髷を結うて、袴を着けた上に、朱鞘の大小を、打込んでやつて來た。其の風態を、見た時には、大藏省の役人が、呆れるほどに驚いた。まだ其頃には、廢刀令が、出て居なかつた時代であるから、極く邊鄙な地方へ行けば、大小を帶して居た、頑固士族もあつたらうが、中央の政府に仕へて居る役人で、髷を結うて袴を着けて而かも、大小を帶して、ヒヨコ〳〵歩いて居る者は無かつた。そこへ、松方が、斯ういふ風態で乘込んで來たから、役人の驚いたのも無理はあるまい。それが、何時か知らず、先帝の御寵恩を蒙つて、結局、元老にまでなつてしまつたのだ。山縣と井上が、動もすれば松方を輕んじて、其說に耳を傾けないのは、斯ういふ點から考へて來て、先輩と後進の觀念を、胸の中に置いて、松方を見るからであらう、と思はれる節もある。乍併、松方も後進ではあつたが、全然、國家に對して、功勞の無かつた譯ではない。明治十三年の頃大隈重信が、大藏卿を罷めた、善後策に就いて、松方の努力は非常なものであつた。全體を言へば、大隈が、政府を引受けた後は、必ず大亂脈で、其後任者になつた者は、大隈の攪亂した、政務の收拾に、皆汗を掻いて苦むのであつた。此時にも、例の不換紙幣を濫發して、財政を、滅茶々々に攪亂して、大藏卿を去つた後で、其後へ出たのが、例の佐野常民であつた。所が、此人は、唯品格の良い、溫厚しい人だ、といふ丈の事で、其後始末の出來るやうな人ではなかつた。そこで、松方が代つて、大藏卿の任に就いて、此始末を着けたのであるが、まだ東京の人の一部には、其記憶に、存つて居る筈だが例の神田橋內の印刷局の構內に、竹柵を廻らして、每日のやうに不換紙幣を燒棄てた事がある。一般の縱覽を許したから、澤山の紙幣が、束で積み上げられては、火を掛けられるのを、涎を流して見て居た人もあらう、と思ふ。那アいふことまでやつて、松方は、大隈の財政攪亂の、後始末を着けたのだ。それであるから今日でも、大隈といへば、松方が、身振ひをするほどに嫌ふのは、大隈の失敗の、後始末には困らされた點があるからであらう、と想像される。此始末を着けてから、俄に松方の名前も、人に知られ、其實力も認められて、それから元

老にまでなつたのであるが、それにしても、松方は、伊藤、井上、山縣に比ぶれば、極めての後輩であつた、といふのは事實である。然らば、大山は何うであるか、といふに、此人は、政治を以て、生命とする人ではなく、世人の知るが如き、軍人肌の人であつて、然も、他を押退けて、自分の仕事をしよう、といふ氣慨も無ければ、又政治の問題に就いて、趣味も有つて居ないのであるから、他が決めた事に贊成する丈で、別に大山の意見として、政治の實際問題に、現はれて來るやうな事は一つも無かつた。

斯ういふ風に、個々に就いて、解剖して來れば、元老會議なるものゝ中心力は、何人に在るか、といふ事も想像されるではないか。山縣が、巧に謹嚴を扮裝ひつゝ長い間に、養ふた勢力は、なか〳〵に深いものはあつたが、例の調子で、容易に煮え切らぬ所があり　其點になると、井上が、何時も乘出して、英斷といふか、或は猛斷といふかは知らぬが、兎に角、始末を決けてしまふ、といふ點に於いて、何時も山縣よりは、井上の方が、一枚上の役者になつて居たのだ。殊に、井上は、我財界の巨頭を捉へて、それを踏臺にして居るから、之に依つて得た潛勢力が、政治家としての勢力にもなつて來て、相當に、權威を振ふ事が出來たのである。井上が、今死んだとして見ると、政治の分野が何うなるか、といふよりは、財界に、井上が、摑んで居た勢力が、何ういふ風に、今後は、分布されて行くかといふ事を、見て居るだけでも、頗る興味のある事と考へる。何れにしても、井上の死は、我政界には、大なる影響を與へないまでも、財界の有樣が、如何に變化して行くかを、見て居るのが、一興であると信ずる。

それに就けても、深く感じるのは、人間は、死ぬ時が大切である。伊藤が、露國に使ひする途中、哈爾賓に於いて朝鮮人の兇手に斃れたので、是が爲に、其末路に花を咲かせて、國葬の禮を以て祀られたではないか。若し井上が、興津の別莊に、あの美しい風光を、樂みながら死んだのでなく、伊藤と同じやうな、最期を遂げたのならば、無論のこと、國葬の禮を以て、祀られるに違ひないのだ。伊藤のやうに、圓滿な性質でなく、人並外れて、圭角の著しかつた爲めに、非常に敵は、多く有つて居たけれど、それでも、維新の功臣としては、確に第一に指を屈すべき人物であ

つたから、好悪の感情を去つて、公平に見れば、疊の上で、月並の死を遂げたのでなければ、伊藤と同じやうな、死後の光彩は、添へられたに違ひない。乍併、斯ういふことは、人間業で、出來ない事で、自然の運命が、支配して居るのであるから、據所ない事ではあるが、さればとて、井上が、今日の場合に死んだのを以て、普通の人として、考へて見れば、敢て遺憾は無からう、と思ふ。

幾百萬の資產は、有つて居ても、所得稅は、僅かに四十八圓しか拂はない。家寶として、子孫に傳へる書畫骨董の最も價値あるものは、多く勞せずして、手に入つた、といふやうな所から、考へて來て、又其邸宅の宏壯なる、庭園の雄大なる、殆ど人間の贅澤といふ事は仕盡して、齡も八十一といふ高齡ならば、何處に不足を、言ふ所もなからう。毛利家の微臣として、見る影も無い、生活をして居た時の事から考へて、今日の事を思ふたならば、恐らく井上も、地下に瞑する事が、出來るであらう。

（此一節は、井上の死の直後に記述したものであるが、今、之を再揭して、その當時を、偲び度く思つたのである）

長州征伐の起因

長州征伐の事は、更めて言ふまでもなく、幕府が、毛利を征伐する爲めであつたが、却つて此事を起した爲に、德川が、征伐されるやうになつたのだから、面白い。歷史上の事實には、往々にして之に類する事がある。

攘夷開港と、議論が分れて、朝廷と德川の間に、面倒が起つて來た。それを幸に、長州藩が、朝廷の權威を、笠に被つて、德川を壓迫し掛けた。僅に二年ばかりの間ではあつたが、長州藩が、京都に於ける、勢力は非常なものであつた。從つて、佐幕派が、長州藩を憎んだ事は非常なものであつた。機會さへあれば、此復讐をしよう、といふ考へは、常に有つて居たのだ。京都の藩邸には、桂小五郎が、詰めて居て、縱橫に切つて廻し、何事も、思ふ壺に嵌うて、トン〳〵拍子に、昇つて行くのは、長州藩の勢力であつた。

程度の宜い所で、手を締めて、その裏を掻かれぬやうにするのが、最も肝要な事ではあるが、何分にも桂の年齡は、若くあつたし、面白半分に、やり付けて行く、何處かに、缺けた所があつて、其際に乘ぜられたのが、文久三年の八月十八日に起つた、京都の政變なるものである。三條中納言以下の七卿が、長州落をやつた。あの事件が、卽ちそれであつた。

長州藩の三家老が、兵を率ゐて、京都へ乘込み、畏れ多くも、宮城へ對して、發砲をしたといふのが、其翌年の事であつた。此一箇條だけで、幕府が、長州藩を責むるの價値は、充分、有つたのだ。加ふるに、下關の戰爭、是は幕府が、開國條約に、判を押して居るから、それで異人の方では、やつて來たのだが、それに砲擊を加へたのだから、曲直は、固より爭ふ迄の事はなく、下關の戰爭は始まつた。此二つの事件を、巧く捉へて、毛利攻擊をやらう、といふのが、德川の計畫であつた。老中の小笠原壹岐守が、藝州廣島まで出張して、毛利侯の名代を招いて、嚴重な談判になつた。其談判が、破裂した結果が、長州征伐の大軍を、起すことになつたのである。

伊藤は、橫濱へ行つたが、井上は、山口の城下に居て、戰爭ならぬ努力をしたので、毛利侯の信任は、益々深くなるばかりであつた。藩士の間には、井上の遣方に就いては、喜ばぬ者もあつた。けれど兎に角、是丈の面倒な事を、無事に治めた力は、又認めなければならず、多少の不平を忍んで、表面は、井上の非難を、爲るものもなかつた。一切の事を終つてから、長門守は、井上を呼出して、政治堂詰合の役人を命ずる、といふ直接の御沙汰が下つた。井上の身としては、無上の光榮であつた。長州藩に於いて、政治堂詰合といふ位に、一種の名譽職に、なつて居たのだ。今の政府のことにして見れば、樞密院顧問官といつたやうな役廻りであるから、邊に此役目に取立てられたのは、井上としては、非常な光榮として、喜ばなければならないのであつた。

折柄始つたのが、德川幕府から長州藩へ、例の二箇條に就いて、難しい談判であつた。其不都合を責めるといふ丈

てなく、謝罪の條件まで示して、峻酷しい談判が始つた。それが秘密にされるほど、下の方の者へは、大きく擴がつて、聞えて來る。其處で、藩士の間には、或は、德川の命令に從へとか、或は、長防二州が黑土に化るまで爭つても、左樣な命令には、從ふに及ばぬ、とか、いふやうな議論が分れて、藩士は二派になつて、はげしく爭ふやうになつた。後の歷史家が、德川の命令に服從しよう、といふた連中を、俗論黨と唱へて、飽迄も德川の命令に反抗して、長州藩の面目を立てようと、主張した方を、正義派と稱するやうになつたのは、此時の事からである。

征長軍起る

毛利の方では、飽迄も遁辭を打つて、德川の命令に從ふまい、といふ方針を取つて、何だ彼だといつて、引延して居る中には、時勢が一變して、或は攻守、地を代ふる事も出來よう、といふやうな考へで成べく此談判は、引延さうとばかりして居たのである。それに引掛かつたのが、小笠原壹岐守で、此人は歷史の上では、甚だ平凡ぬ人になつてしまつたが、實際は、なか〳〵悧巧な、人物であつたけれども、乘出した時代が、惡かつた爲に、却つて平凡い人のやうに思はれてしまつたのは、如何にも氣の毒な次第である。毛利家へ談判の箇條は、

第一、毛利大膳太夫父子は蟄居隱居の事
第二、十萬石減地處分の事
第三、家名は大膳太夫孫興丸に相續せしむべき事
第四、山口の城地は速に破壞すべき事

其他十數箇條の難題を掲げて『サア之に從ふか何うだ、若し彼是故障があるならば、兵力を以て迫るが、それに從ふ事は出來ないか』と、いつての談判であるから、毛利の方でも、重役や老臣の會議を開いて、段々相談する。所が

議論區々て、容易に決しない。そのうちに、尾張副大納言を、征討總督として、兵を率ゐて、廣島へ、乘込んで來た。越前の松平春嶽も、豐前の小倉へ、副總督として乘込んで來る、といふやうな譯で、騷動は時々刻々に、激しくなるばかりであつた。

山縣半藏が、宍戸備後介と變名して、毛利侯名代といふ格で、廣島へ乘込み、談判最中に、捕虜になつてしまつたのも此時の事であつた。毛利藩としては、此一時に依つても、開戰まで進む外なく、談判は破裂したのであつた。所が、薩藩の西鄕吉之助が、現はれて來て、『天下の大勢は、此儘で落付いて居るものではない。近く一大變調が來るものと見て、其場合には、薩藩は、相携へて、進んで行く對手は、長州藩に限る。將來の天下を制すべきものは此二藩である』といふ見込を付けて居たので、今度の征長軍に就いても、西鄕は、反對の意見を有つて居たのである。けれども、幕府の方が、非常の英斷を以て、之を實行する事になつたから、何とかして毛利藩を、此場合に助けて置かなければ、ならぬといふ覺悟は、西鄕の胸中に、決つて居たものか、愈々尾州、越前の兩侯が、進んだ事を聞くと西鄕は變裝して、廣島へ、乘込んで來て、尾州侯に、謁見をしたのであつた。西鄕は、尾州侯の信用が厚く、陪臣の身ではあつたが、尾州侯と、膝組で話をする丈の信認は、得て居たのであるから、此時も、頻に征長軍の理由なき事を說いて、頻に尾州侯の氣を柔らげ、而して、征長軍を引揚げるやう、適當な方法を見出さうとして、頻に協議を凝した。長州侯も、實は、此征長軍に就ては、餘り喜んで居なかつたのであるから、若し西鄕が、其中間に立つて、相當の條件を、毛利家に行はせたならば、大概な事にしても、征長軍は引揚げよう、とまでの運びになつた。西鄕は、直に小倉へ渡り、春嶽にも面會して、それから又周防の岩國へ、引返して來た。

岩國の領主は、吉川監物であるが、此人は、非常に、聰明な、立派な人物であつた。殊に毛利の分家といふ事には、なつて居たが、實際に於いては、矢張り諸侯の一人として、德川家からも、相當の禮を以て、待たれた位の家柄であつた。長州藩士が、薩藩に對して、惡い感情を懷いて居るのは、前からの事であるから、此際に、西鄕が、山口の城下

へ、乗込むのは、却つて不得策である。そこで、岩國へ、乗込んで來て、吉川監物を說付けて、毛利侯を、動かさうといふのであつた。然るに、西鄕の仲裁說が、頗る其當を得て居たので、吉川が非常に喜んで、自から進んで、毛利侯を說く事になつた。

其結果、京都へ押掛けて、宮城へ、發砲に及んだ、三家老には切腹させて、飽までも此一事は、藩主の與り知らざる所であつて、三家老の獨斷で爲した事である、といふことにして、結局を付けることにしたのだ。

長門守の手書

太平も、二百年以上續くと、武士の意氣も衰へて、眞に君家の爲に、身を擲つて勤むる、といふやうな、潔い覺悟は無くなるものか、流石に武門の名家と謳れた、長州藩ですら、幕府が、少し强硬になつて、長州征伐と稱して、嚴重な談判を始めれば、直に腰を拔いて、恭順論を唱へる者が、重役や老臣の中に多いのだから、驚くの外は無い。

毛利侯父子に、蟄居隱居を命じて、幼少の興丸を、當主に立てる、といふ事になれば、幕府からは世話燒の役人が、天降つて來て、毛利の藩政に、干涉を始めるに違ひない。左樣なつて見れば、名義の上に於てこそ、毛利家は、存續して居るのだが、精神上からいへば、全く滅亡したのと、同じ事になつてしまふのである。今、驟合込まれた、二つの事件が、全く毛利家に取つては、辯解の無い罪科であるといはれても、それには、相當の辯疏を、なすべき餘地はあるのだ。毛利の家名は殘つても、大切な當主や世嗣が、蟄居隱居を命ぜられるやうな事になれば、武門としての不名譽であるから、飽までも爭つて、弓矢の上で、勝敗を決する、といふのならば、解つて居るが、大きな聲で叱り付けられたから、といふて、直に謝つてしまふ、といふのは、餘に不甲斐ないことである、といふて、身分の低い藩士には、大分不平もあつたのだが、重役や老臣の意嚮が、さういふ風に決つては、如何とも仕樣がない。據所なく、沈默を守つて居たのである。

之に就ては、政治堂の役人へも、毛利侯から諮問があつたので、併し、其役人の多くは、藩の議論を、吐いて居る重役や老臣の味方であるから、二人や三人で、强い議論を、吐いた所が、迚も物になる、見込は無いのであつた。殊に、井上は、今度の事變に就いて、俄に登用されたので、まだ其役に就いたばかりの身の上とて、別に多くの味方を有して居るでもなく、同僚に對して、何れだけの權威を有つて居ると、いふのでもない。議論は、椋梨藤太といふ人を中心として、恭順論が、盛に唱られた。井上は、唯沈默して、其の說を聽くばかりで、更に議論はせず、空しく引取つて來たのである。

洋行歸りの當時で、自分の邸は、有つて居なかつたから、兄の幾太郎が、住んで居る、湯田の邸に、同居して居たのだ。謂はゞ體裁の好い、食客に過ぎなかつたのであるが、の中で、井上を、一番に愛して居たので、食客としても、洵に都合の好い食客ではあつた。政治堂の會議が、大分長くなつて、湯田へ歸つて來たのは、既う夜の十時頃であつた。此時に、兄の幾太郎から、

『今日の政治堂の會議に、何等の議論も吐かずに唯空しく他の議論を聽いて、歸つて來たのは甚だ以て怪しからぬ。殊に君侯が、蟄居、隱居になるか、ならぬかといふ瀨戸際に、何等の意見も吐かずして立歸る、といふのは、平生の聞多にも、不似合である。善かれ、惡かれ、其意見を吐かぬといふのは、甚だ卑怯な振舞である』

と、いふて激く詰られた。井上は笑ひながら、

『是は兄上の仰せとも、心得ぬ。今日の政治堂の席上に於いて、自分が、考へた通りの意見を、申述べた所で、それが必ず行はれるといふ、見込はない。先づ大概は、一笑に附せられてしまふのは、極つて居る。それを知り乍ら、彼是と議論をした所で、詮も無い事である。忠義を盡すのは、政治堂の評議の席ばかりではない。到底見込の立たない論爭は爲ぬ事にして立歸つて來たのであるが、それが卑怯である、といふならば、卑怯でも宜しい。又不忠でもある、といふのならば、不忠でもない、といふ證據を、お見

せ申す事が出來よう、と思ふ。兄上に於いても、他の評判などに、心を動かされずに、今暫くの間、事の經過を見て居て下さい』

兄の幾太郎は、武士の一徹心から、反對すべき場合に、反對せずに歸るのは、卑怯である、といふて、憤慨するのであつたが、聞多は、唯徒に議論ばかりした所で、致方が無い。そのうちには、效力のある働きをする覺悟であるから、それを待つて居れ、といふ考へで、何等の議論もせずに、歸つて來たのだ、といふのだから、之には幾太郎も返す辭がなかつた。

『汝が、さういふ考へで居るのなら、俺も、安心して居る。兎に角、小身微祿の家ではあるが、元就公以來の客臣として世人にも知られた、井上家の次男に生れた汝が、家名を汚さざるやう、心掛けて呉れゝば、それで滿足である』

『其儀に就いては、御心配下さるな』

『其一言を聽いて、俺も滿足した。もう再び繰返すことはしない。一日の勤務で疲れもあらうから、寢たら宜からう』と、言ふて、兄は、自分の部屋へ行く。聞多は、是から床を伸べさせて、寢ようとした所へ、訪ねて來たのが、長門守の御側を、勤めて居た、正木退三といふ人であつた。

『オ、、是は正木、大層遲くなつて、何用か』

『實は、若殿の御内命で參つたのぢや』

『ナニ、若殿の内命と』

『左樣ぢや』

そこで、井上は、席を改めて、正木を、上席に直し、自分は、下席に退つて、

『而て、御内命とは、何ういふ事か』

『之を御覽なさい』

正木が、差出した、袱紗包みを披いて見れば、意外にも、長門守の直筆で、

朝廷今日の御衰運、痛哭に不堪也、他年の微志、何の日に貫き候はんかと、苦慮此事に候。汝、之を思ふべし。

と書いてあつた。

其頃の事にして見れば、藩主の若殿から、家來の所へ、直筆の書面を下される、といふのが、既に容易ならぬ事であるのに、其文意に依つて、之を察すれば、『朝廷の御衰運は、實に著しいものである。我藩が、御扶助申上げなければ、三百諸侯の中で、之を成し遂げる者はない。それに就いても、心配は今度の事件であるから、深く其事を思ふて、藩の爲に盡せ』と、いふやうに、解釋する外はない。さうして見ると、『三十六萬石の家中で、長門守が、頼に思つて居るのは、お前一人である』といふ意味にもなるのだ。井上としては何程、此書面を得た時の喜悦は、深かつたか知れない。實際、此書面がある爲に、長い間、井上は、毛利家の後見役として、眞の親類よりは、威勢が利いたのであつた。

『若殿は、それまでの思召があるのに、貴樣は、此場合に手を束ねて、事の經過を、見過す所存か』

『イヤ、何とも恐入つた。左までの思召とは、今まで考へずに、自然に時機の來るのを待受けよう、としたのは、如何にも迂濶千萬であつた。宜しい、然らば是より、直に登城して、拜謁の上、萬事は、其際申上げることに致さう』

『ウム、然らば直に登城いたすか』

『如何にも、左樣しよう、と思ふから、一歩先へ參つて、若殿樣へ、其旨を申上げて、置いて呉れ』

『宜しい、承知した』

正木は、一歩先に、城内へ立歸る。井上は、是から身支度を整へて、登城する事になつた。

御前會議の準備

長門守は、正木退三から、井上が、今直に登城する、といふ事を聽いて、實は心待に待つて居るのだ。如何に我慢の強い長門守でも、重なる國難に氣落がして、見るも氣の毒な程に、痩せ衰へて居る。自分は、是から幕府の命令に依つて、蟄居隱居をさせられよう、とする場合である。若し左樣なつた日には、もう生き甲斐の無い身で、手も足も出せない事に、なるのであるから、成べくは左樣なりたくない、と、思ふのは、人の情として當然である。所が、重役や老臣は、十萬石の減地處分に甘んじて、藩主父子に、蟄居隱居をさせる事さへ、承諾はうといふのだから、考へて見れば、隨分心細い次第で、天下事無きの日には、殿樣扱ひをされて、困難な場合になると、邪魔者扱ひにされる。さうした家來に、相談した所で、此結末が何う付くものでない。そこで、自分が信賴して居る、井上に向つて、秘密に書面まで送つて、此難場を救つて呉れといふ事を、賴み込まれたのだ。それを、井上が、宜しい、と承知をして、今直ぐ出て來る、といふのだから、長門守としては、斯樣嬉しい事はなかつた。

井上が、正木の案內で、御前へ出た時に、長門守は、恰で手を執らんばかりにして、井上に向つて、

『此難局を、救ふて呉れ』

と、いふ御依賴があつた。そこで、井上は、

『宜しい。何事も承知んで居りまするから、御心配遊ばすな。それに就いて、明朝は、重役老臣一同を、御集め遊ばして、會議を開く事に致しては如何でござりまするか、若しさういふ事になれば、自分は、命に賭けて、恭順論を唱へる者共を說破し、飽までも幕府に向つて、强硬の態度を以て、御家を救ふべく盡粹いたしまするから、先づ以て、御前會議を、御開き下さるやうに願ひたい』

『それは承知いたしたが、併し呼出す者の身分は、何ういふ風に、區別いたすか』

『左樣、御一門、御分家、重役、老臣、又相當の役目を、帶びて居りまする者一同、此標準を以ちまして、お召出し然るべしと、考へまする』

『詰り目見以上の者は、大概呼分す事に相成るのぢやのう』

『先づ左樣で、ござりまする』

『而て、其期日は、何時に致すか』

『もはや、猶豫を致す場合でありませねば、明早朝の御觸出、然るべしと、考へまする』

『餘りに、火急のやうぢやが……』

『縱令、如何に火急でありませうとも、斯樣な場合に、時を移さず集まるのは、臣下の務でござりまするし、それに豫めの相談を、なすの暇もなく、打揃ふて參りまする所へ、君侯よりの御沙汰も下りまする上に、又拘者の意見も述べまする。そこで、初て正しい意見が、行はれるやうになるのでござりまするから、此儀は是非斷行するに限りまする』

『成程』

斯う聽いて見れば、無理の無い事であるから、そこで、長門守は、深更に及ぶまで、井上と協議の上、直に使番を呼出して、それ〳〵に、明早朝の會議の通告を爲る事になつた。時に元治元年の九月二十五日の拂曉前であつた。

御前會議と彼

敵の使者が、隣國までやつて來て、談判が破裂すれば、同時に兵を進める、といふ勢威を示して、手强い壓迫を加へられて居る場合に、一も二もなく恐入つて、其の命に從ふのは、當時の武士道から論じたならば、甚だ不甲斐なき事であつて、苟も武士らしい者の行爲とは言へぬ。飽までも是非曲直を爭ふて、それが容れられぬ場合には、干戈に訴へても爭ひ、然る後に、和解の方法を、盡すのは止むを得ないとしても、何等の爭ひもせずに、懸合込まれたから直に謝つてしまふ、といふのは、町人でも、骨のある者は、それ程弱くはない。然るに、毛利家が、今、幕府か

ら強い談判を、持込まれて居るのに、何の反抗もなさずして、忽ち降伏してしまふ、といふのは、單に利害の上からばかり、考へて居ての覺悟で、大義名分の上からの分別は、更に加つて居なかつた。されば、恭順を名として、降伏を藩主に强ふる一派を指して、後に俗論派といふ、厭な名を付けたのも、無理は無い。乍併、其の俗論派の中に、大概な重役や老臣が、這入つて居たのであるから、從つて、藩論を定むる上に於ては、非常な勢力を有つて居たのである。殊に、熊谷式部、椋梨藤太、山縣與一兵衞、岡本吉之進、進藤吉兵衞等を首め、それぞれに黨を結び、派を作つて、城下の圓龍寺、又は淨榮寺などいふ寺院に集合して、頻に恭順論を、唱へて居たのだ。之に對抗して、最も强硬の議論を唱へた一派は、前田孫右衞門、毛利登人、渡邊內藏太、大和彌八郎等を首めとして、例の奇兵隊は、高杉晉作が主唱者となつて、盛に强硬な說を吐いて居た。表面から戰爭を開け、とは言はぬが、武備恭順論と稱して、『毛利家から、幕府へ對しての咎が、若し容れられざる時は、止むことを得ぬから、對手にもならう』といふ、勢を示して掛からう、といふのが、此一派の主張する所であつた。

愈々九月二十五日の朝、四刻といふから今の十時頃になつて、追々に集つて來る、藩士の面々、今日は、長門守も一生懸命の場合で、昨夜は、殆ど睡眠を廢する程の忙しさであつた。尤も、其の前に、樣々の名義を以て、謹愼を命ぜられたり、或は入牢をしたりして居る、忠烈な武士が、澤山にある。それ等に對しては、遽に赦免の沙汰を下して主戰派の勢を付ける、といふやうな事もしたのだ。現に、廣澤兵介の如きも、謹愼を命ぜられて居た一人であるが此晩に赦されて、自邸へ歸つて、密に味方の結束を、付ける事もして居たのだ。それであるから、遽の御前會議ではあるし、旁々、城下の混雜は一通りでなかつた。

御前會議の模樣を、細に話せば、隨分長くもなるから、概略の事にして置くが、兎に角、重役や老臣の中には、無暗に降參してしまはう、といふ議論が多かつたので、其尻に附いて、椋梨以下の俗論派が、盛に軟說を唱へた。玆に於いて、井上は、徐々議論の口火を切つた。

『下關並に京都の事變は、決して毛利家の罪科としての御許可を得ずして、入京したのは不都合である、といふが、果して朝廷が、長州人の入京を御差止めになつて居るか、何うか、實は甚だ疑はしい事であつて、自分等には、何うしても左樣いふ、御沙汰が下つた事とは思へぬ。從つて、三家老以下の諸士も、自分と同じやうな、考へを有つて、入京したに違ひない。殊に、三條中納言以下七卿の御勘氣御赦免を嘆願する、といふ事が、入洛の趣意になつて居るのであるから、之を遮二無二に拒んだ、幕府の處置は、既に其當を失して居るのであつて、其曲直は、既に明になつて居るゆゑ、毛利家は、少しの曲事も、働いて居るのではない。然るに、理不盡にも、幕府より、我藩士に對して、發砲を致したる爲に、止むことを得ず之に應戰致したる迄の事で、決して我藩より好んで、戰爭を挑んだものではない。其戰爭中に、我藩士の擊出した砲丸が、御所の中に、落下致したのは、洵に畏れ多い次第で、何とも朝廷に對しては、辯疎も出來ぬ仕儀ではあるが、乍併、我藩が、今日まで朝廷へ對しての御奉公は、少からず忠誠の心を現はして居るのであるから、此一事を以て、直に我藩を、朝敵同樣の御扱ひをなさる、といふこともあるまい、と思ふ。我藩士の擊出した砲丸が、御所の中に落下したのは、戰陣の位地が、既にさういふ風になつて居たので、寔に止むことを得ない。唯御所の中に、砲丸が落下した、といふ丈の事を以て、吾人の精神までが、朝敵同樣である、といふのは、如何にも曲論である。又下關の衝戰も、之れと同じ事で、固より我藩が、好んで開いた戰爭でなく、異國方より、攻寄せて來られた爲に、止むことを得ず、其對手をしたまでのことで、其原因は、先年の商船擊攘に基いた、としても、其事が、既に朝廷の詔に依て、爲した事であつて見れば、我藩に、何等の責任は無いのである。それが原因となつて、今度の戰爭が起きたのであるから、我藩に於いては、何等の責を負ふべき、必要は無いのだ。此二箇條を口實として、幕府が、談判に參つても、吾人は一應、之を拒むの理由はある。況して、滅地處分とか、君侯の蟄居隱居とかいふやうな、武門の名家として、此上も無き、恥辱を蒙むりながら、理非を爭はずして從ふ、といふが如きことは、吾

人の如く、先祖以來、藩の粟を食んで居る者が、此際に於いて、左樣な腰拔の議論は、吐け
ぬ道理である。弓矢の爭ひで敗者となるも、それは武門の常で、止む事を得ないが、一矢を
發たず、一兵を傷けずして、直に敵に降を乞ふ、といふやうな事は、縱令、是が爲に、家名
は存續せられても、御先祖は、草葉の蔭で、御滿足になる筈はない。武門の恥辱は、此上も
無いのである。全體、高祿を戴いて、長い歲月を、安樂に、此世を送つて居た、重役老臣の
方々が、此期に及んで、左樣な弱音を吐かれるとは、如何にも其意を得ぬ事であつて、吾人
は、一向に承服致し兼ねる。唯吾人は、一死以て、御家の爲に、又藩の爲に努めるの外に、
何等の思案も無いのである』

毛利伊勢が、熟と井上を睨みながら、

『足下の言はるゝ所に、一應の道理はあるやうであるが、さればとて、君家の御利益になる
說とも心得ぬ。今僅に、長防二州、三十六萬石の力を以て、西國三十藩の大兵を引受けて、
何處に勝利の見込があるか。唯疊の上で強がつた、說を吐く事は、三歲の童子にも出來ることであるが、靜に御家の前途を考へ、戰爭の結果を思ふたならば、左樣な暴論は、吐けぬ道理である。今減地の處分は受けても、それは、藩士の努力に依つて、又回復の時も來る。御當主樣には、洵に相濟まぬ次第ではあるが、一時御窮屈を、御忍び下されたならば、機會を得て、今日の御地位に御迎へする事は、左までに困難な事とも思へぬ。唯此場合に於いては、事を安穩に治めて、御家に不祥の事が起らぬやうにするのが、吾人が義務であると、心得る。然るに、腰拔の議論だとか、或は御先祖以來の御恩を、忘却した者の如くに、言ふて、それとなく、吾人に當付けての說は、甚だ以て怪しからぬ儀で、聞き棄てにならぬ。御家に對する忠義の心は、お身一人の引受けでも、あるまい』

と、思ひ切つてやり付けたから、俗論派の連中は、如何にも痛快だ、といふやうな顏をして、井上の方を、瞥と見た。

『昔の諺にも、口は禍法なもの、といふ事がござるが、御承知か。貴公方が、今日の窮境に、我藩を引入れ、御家を、安泰の位地に置いて、天下の事に與かる工夫が付かぬ、といふだけでも、貴公方の失策は、充分にある譯ぢや。事が、今日の如く相成つたから、といふて、其罪を、他人に歸して、己は知らぬ顏をして居る、といふ、左樣な卑しい者は、武士の風上にも置けぬ。唯一時の恥辱であるから、忍んでも宜い、といふが如き、卑しい言葉は、町人の中でも、稍々男らしき者は、左樣な事は申しませぬぞ。一時の恥も、矢張り末代までの恥である、といふ事に、お氣が付かれたならば、此際に於いて、唯徒に、幕府の命に從ふ、といふやうな事は、言はれぬ筈ぢや。何れにも致せ、吾人は、死を以てするも、御家の恥辱を防がなければならぬ、と心得るから、生命の惜しきものは格別、君家の爲に、死を輕んずる人は、皆來りて、自分等と、事を共にするやうに致したい』

井上も、毛利伊勢の言ふた說が、癪に觸つたので、手嚴く極め付けた。それから、樣々の議論が起きて、その中には、殿樣の御前といふ事さへ忘れて、拳を固めて、今にも打合を始めよう、とする者もあつた。長門守も、是では治まらぬ、と思つたから、恰度午餐時になつたから、といふので、食事をして後、又會議を開かう、といふ事を、言ひ出すと、井上が、開き直つて、

『こりや、怪しからぬ事を仰せになる。御家が立つか、立たぬかの場合に、食事の一度や二度位は、何うありまするか。聞多の如きは、三歲の時より、食事は致して居りまする。一度や二度の食事を取らぬから、といふて、それが爲に、命を失ふやうな、弱い體では、ござりませぬ』

と言はれて、長門守も、澁々ながら會議を續けることにした。是が爲に、一同は、糧糧攻めの苦みに遭つて、聞多の說に、傾いて居たのだから、入つ過ぎといふから、午後の四時頃になつてから、御前會議の結果は、飽までも幕府と爭はう、といふ事に決つた。卽ち場合に依れば、戰爭を開くも、止むを得ない、といふ事になつたのである。

是までに、御前會議を、巧くやり付けるに就て、井上等の苦心は、なか〳〵に深いものがあつた。大概は、役廻り

や、家柄に依つて、席順は定つて居るが、斯様な場合の會議は、幾分か平生の秩序も、亂れて混雜もある。そこで、高杉、廣澤、大和、渡邊等の連中が、多くの人の中に立交つて、盛に強い議論を吹込む。陰になれば、弱い説を吐く人でも、豈夫に、御前會議の席上で、臆面もなく弱い説は吐けないから、さういふ連中を押へては、強い方へ引込む。それからそれへと、強い空氣を漲して、井上の説を、暗に助けた。加ふるに、殿樣は、自分の身を安全にするのには左樣する外はないのであるから、井上の説に傾くやうになる。上下一致して開戰となるのだから、俗論派が、如何に口巧者に説いても、容易に其議論は、通過する譯はなかつた。約り言へば、井上派の爲に、先手を打たれて、何事も後手に廻つたのだから、俗論派が、敗れたのも無理はない。斯ういふ次第で、御前會議は、遂に主戰論に決したのである。

餘計な親切が仇

御前會議の一節は、井上の生涯を通じて、最も誇りある歷史としてある位で、重役や老臣を、向ふに廻しての議論振は、全く當年の聞多が、何程に元氣なものであつたか、といふ事の想像がされる位である。他にも、説を立てた人があつたらうが、兎に角、聞多の説に依つて、重役や老臣が閉息してしまつたのであるから、此時の藩論を、主戰論に傾けるまでに、聞多の骨折は、非常なるものであつた。

御前會議が終ると、それ〴〵に御暇が出た。井上は、挌席に退つて、一同の退散するのを待つた後、更に長門守に內謁して、今後の方策に就いて、意見を述べよう、といふ考へで、挌へて居た。所へ、家老の一人であつた、宍戸備前といふ人が、徐かに這入つて來た。之を見ると、井上は、席を讓つて、

『サア、何うぞ此方へ』

『イヤ、構はつしやるな』

備前は席に着いて、

『時に、井上、今日の足下の武者振は、實に勇ましいものでござつた。豫ね〴〵承知の上ではあるが、流石に、彼の強い議論を聽いては、弱音を吹いて居る者が、盾を突く事の出來ぬのも、無理はないと思ふた。正直の事を申せば拙者とても、足下と同じ意見ぢやが、何分にも口不調法で、他を感服させる程の事もいへぬから、そこで據所なく、今日まで沈默は、守つて居たが、初て足下の骨折で、藩の面目も立つやうに相成つて、拙者は、此位嬉しい事は無いのぢやが、偖て、玆に一つ當惑いたして居るのは、明日にも、君侯の御沙汰が下つて、足下に、重いお役を、御授けになつた時、縱令、藩論は、斯樣に決つても、心の中まで解けて居らぬ、反對の人々が、全く足下の指揮に從ふか、何うか、其邊の事を考へると、隨分心配にも相成る。恐るべき大敵を、前に挌へて居て、藩士の心が、二つに分れて居るとあつては、戰爭の上にも妙であるまい。此一事に就いては、何とせらるゝ覺悟であるか。其所存の程も、內々聽いて置きたいのぢや』

是は、備前が心配するのは、無理の無い事であつた。御前會議の席に於いて、辯舌の上で、井上に敗けた、としても、心の中が、非戰論であつて見れば、愈々開戰といふ場合になつて、色々な理窟を捏られた日には、何うする事も出來ない。殊に、關西三十幾藩の兵を驅催して、攻め込んで來る、征長軍に對して、三十六萬石の家中が、一致して向つても、勝利は如何あらうか、といふ疑のある所へ、內部が二派にも三派にも分れては、愈々勝算が立たない事になるのであるから、備前が、それを憂ひて、相談を掛けるのは當然な事である。井上は、何事か考へて居るものと見えて、左迄に、當惑して居る樣子もなかつた。

『其儀に就ては、御心配御無用、自分に於いても、少しく思ふ仔細もあれば、何うぞ御任せ置きを願ひたい』

『ウム、無論、それに違ひない。足下のことぢやから、何か思案はあるに違ひなからうが、併し拙者として見れば、また此上も無い心配であるから、そこで御相談申すのぢや。差當つては、各所に屯して居る人々が、果して明日以

後に、何ういふ態度を執られるか、それが頗る心配でならぬ。見苦しき同士討でも始めて、取返しの付かぬ、騒動を惹起しはせぬか、と、それ等の事を、心配の餘り、御相談申すのぢやから、差支へなき事は一應打明けて、貰ひ度いものぢや』

『それまでに仰せの上は、一應申述べませう。此一事は、極めて秘密にして下さらぬ、と困る』

『それは、承知の上、口外する氣遣ひはない』

『然らば、御話し申すが、實は、君侯より第四大隊の兵士を、借り受ける事に、相成つて居る。唯今も、隊長の足立太郎が、參るのを待受けて居る位で、今晩より明朝に掛けて、圓龍寺と淨榮寺へ、逆襲を致し、此兵力を以て、重立ちたる異論者を、片端から執つて押へて、一氣に彼等の氣勢を挫き、以下の者は、總て其罪を赦して、藩へ忠節を盡させる、覺悟であります故、此點に就ては、更に心配はござらぬ』

之を聽くと、備前は驚いた。圓龍寺と淨榮寺へ、逆襲をして、反對派の者を、片端から捉へてしまふといふやうな激しい事をやつて、若し是が原因となつて、兩派の爭鬪が、起きた日には、それこそ一大事である。井上の事であるから、此位な猪突は行兼ねない、と思つたればこそ、備前も、態々此席まで、やつて來て、色々尋ねたのであるが、井上の打明話を、聽いて見ると、此儘に引取る事は出來ない。

『左樣な、無法な事を致して、若し先方にも、相當の用意があつて、戰ひを開く、といふやうな事になつたならば、敵の兵士が、一人も來ぬ中に、味方同士の暗鬪が起つては、實に他藩の聞えもあり、旁々以て宜しくあるまい、と思ふが、金體、此場合の事は……』

『先づ暫く御待ち下さい。それ程の御心配はござらぬ。逆襲を致すに就いても、多少の手加減は用ひまする。戰爭をするのが目的でなく、彼等の不平を取鎭めるのが、目的であつて見れば、其點に就いての御心配は御無用、聞多も、御家の御爲を思ふてする事であるから、不向見な事は仕りませぬ。萬事は、拙者に、御任せ置きを願ひたい』

斯う云はれてしまへば、備前も、强ひて抑へる事もならず、左なきだに强情な、井上が、斯う思込んで、既に兵士を集める手當までしてある、と聞いては、此上の爭論は無用である、と思ふて、備前は、

『さういふ次第ならば、强ひて爭はぬが、何うか御家の御利益といふ事を、念頭に置いて、成べく事を穩かの中に、治めるやうにして下さい』

『仰せまでもなく、其儀に就いては、自分も、苦心いたして居ります』

『イヤ、それを聽いて安心いたした。それでは、一歩お先へ、下城を致す』

『終日の御勤務、御苦勞でござりました』

備前は、城を下り、自分の邸へ來るまでに、不圖考へ付いたのは、井上が、那アした性質の所へ、圓龍寺や、淨榮寺に集つて居る連中が、又火の樣な性質を、有つて居る壯士ばかりであるから、此の二つが、一つになつて爭つたならば、何んな騒動になるかも知れぬ。井上とても、御家を思ふ一念から、是までの苦心をして居るのであるから、反對の者が、憎む程の惡人ではないのだ。是は自分の役柄としても、雙方の間に立つて、調停の勞を執るのが、至當である。それには、早く彼等の屯所へ、出掛けて行つて、仲裁の勞を取る外はない、と、斯う考へて、備前は、全く親切な心から、圓龍寺へ、出掛けて行つたのが、飛んだ間違ひの原因で、井上の顏から、體へ掛けて、十幾所の恐るべき傷が痕つて、一生の語り草になつた、袖付襷の闇討は、是から序幕に、なるのである。

宍戸の調停は失敗

諺に、鼠穴の引倒し、といふことがあつて、親切に考へた事でも、それが、却つて不爲になる事もある。井上の元氣が、餘りに好くて、圓龍寺や、淨榮寺の方へ逆襲をする、と言ふたことが、宍戸備前の考へにすると、心配で堪

らなかつたから、兩者の調停を圖らうとした。是は全く、親切の心から出たのであるが、却つて、井上の一生に、唯一度といふ、危難を釀す原因になつたのだから、人間の事は、實に測り知ることが出來ない。

恭順論を唱へる、藩士を指して、之を一概に、不忠の臣であるとか、或は臆病であるとか、頭から貶斥てしまふのは、些と酷評であらう、と思ふ。結局をいへば、毛利家を、安泰の位地に置きたい、といふ、其處に、強い信念があつて、唱へて來た議論であるから、縱令、多くの中には、戰をするのが恐ろしい、といふやうな者も、在つたか知れないが、それが在つたから、といふて、全體の人を、悉く不忠の者としてしまふのは、餘りに酷評である。今日のやうな、時勢になつて考へれば、其時分に、恭順論を、唱へた連中は、先見の明が無かつたやうであるが、それは、成敗の蹟から、星霜を經ての批評で、其時代の人として考へたならば、恭順論も、毛利家の爲になる、一つの說として唱へたのであらうから、これを糞貶に貶尽でしまふのは、氣の毒のやうな感じもする。乍併、それは大體の上から言ふたならば、井上等の唱へる、議論の如き、勝敗は、眼中に置かずして、飽く迄も爭ひ、其爭ふた末に、毛利の家が何うならうと、弓矢の上の勝敗は、武門の常であるから、是は已む事を得ない、として諦める。其處に、武士の意地はある、と論じて居るのだから、此點から論じたならば、恭順論を唱へた連中は、一言半句の答も、出來ないのであつた。去れば今日になると、歷史家が、筆を執つても、恭順論を唱へた、連中を指して、直ちに俗論派といふて居る。又其方に屬した人は、其後、相當な功勞は有つても、皆採用されずに、後の半生を、不平の裡に送つてしまつたのは、最初に乘り出す時の考へが、誤つた爲にさうなつたので、人を恨むといふよりは、自分の見識の短かつた事を、恨むの外は無いのである。

議論の上の爭は別として、腕力の上の爭ならば、俗論派にも、なか〳〵強い人が居たのであるから、さう容易くは屈しないのである。殊に、圓龍寺や、淨榮寺に、屯して居る、藩士の勢は、眞に素晴らしいもので、主戰論を唱へる、井上等を目するに、國賊を以てする位で、今日の御前會議にこそ負けたけれど、明日以後の、實地の働きに於ては、井上等を、手も足も出ない程に、困らせてやらうといふ意氣込で、哩々隱ぎ立てゝ居た。所へ、家老上席の宍戸備前が見えたので、急に靜まり返つて、

『此場合に、備前殿の來たのは、何か仔細のある事だらう』

と、一同は、堅唾を呑んで、其樣子を窺つて居る。

宍戸備前と、毛利家とは、容易ならぬ關係があつた。

の苦心の、一通りでなかつた事は、言ふ迄もないが、其一半は、宍戸備前の先祖の働が、加つて居たのだ。從つて、家老上席として、毛利家からは、親族同樣の待遇を、受けて居たのだ。俗に言ふ、毛利三家とは、吉川、小早川、宍戸、之を指して言ふたので、吉川と、小早川は、毛利の子息が分家したのであるから、眞の親戚であるが、宍戸は、家來筋であつて、吉川、小早川の兩家の如く、毛利家に對する、血緣は無かつたのである。けれども、兩家と對立させて、三家としての待遇をして居たのだから、此一事から考へても、宍戸の家は、容易ならぬ格式のあつた、といふことが解る。藩士の多くは、宍戸の名を言はずに、大家老と言ふて居た位である。其備前が來たのであるから、一同が注意したのも、無理はない。備前は、重立ちたる者を集めて、

『偖て、各々に御相談を致したいのは、今日の御前會議に就てぢあるが、どうも各々が、井上一派との折合が惡いやうで、拙者は、それが如何にも憂慮に堪へないのである。今や幕府の大軍は、我が國境に迫る、といふ場合に、激しい內訌を起すやうな事があれば、それこそ由々敷一大事であるのみならず、我が君家の興廢も、測り知ることが出來ない事になる。東と西に、議論は岐れても、結局を言へば、君家の御爲めを圖つての事で、別に之を憎む程の事もなからう、と思ふから、お互に打解けて、手を取つての相談と、なつたならば、又感情も解けて、折合も付く場合もあらう、と考へる。仍て各々と、井上一派との間の調停は、拙者に、一切御任せを願ひたい、と思ふが、如何でござらうか』

と、事を分けたる、備前の相談ではあるが、癇癪の蟲が、頭の頂上にまで、込上げて居る、一同の者には、斯うした穏かな調停は、耳に入らぬ。

『大家老様の御意見ではありまするが、我々に於ては、彼等と、同席致すことも相成るまい、と考へまする。獅子身中の蟲にも等しき、奸物共が、何で君家の御爲などに相成りませう。我々の眼から見ますれば、井上等の一派は、城狐社鼠の徒にも等しく、所詮は、毛利家の御爲にならぬ、賊臣共と思ふて居りまする。左様な者と打解けて、談合致せとは、大家老様の御言葉とも心得ませぬ。殊に、井上の如きは、脫灑した上に、異人の國へ迄參つて、我が國體にも關はるやうな事を、仕出來した不埒の者でありまする。決して斯様な者と、今後共に相携へて行くことは出來ませぬ』

『マア、お待ちなさい。さう言ふてしまふては、花も實もない。お互に、意見の行違ひから、憎み合ふては居ても、本を洗へば、同じ木に咲いた花ぢや。暫く私の恨を忘れて、公平に考へたならば、拙者の取計ひに、御任せ下さるのも、矢張り御家の御爲であるから、是非忍んで、此一事は、御任せを願ひたい』

『イヤ、成りませぬ。其儀に就ては、如何様仰せがあつても、我々に於ては、承服致し兼ねまする』

『フヽム左様致すと、恁うでも此爭は押通すと、斯様に、言はつしやるのか』

『如何にも、仰せの通りでござる』

『然らば、各々に御尋ね致す事がある』

『そりや、恁ういふ事で、ござりまするか』

『各々は、それ程に、井上を憎んで居られても、今日の御前會議の結果として、若し君公より、井上へ對して、幕府と一戰を試むるに就き、御名代の格式でも、與へられるやうな事があつた場合に、それでも井上等と、共に進む事は出來ぬ、と言はつしやるか』

『サア、それは……』

『君公の御名代といふ事に相成つて、此戰の采配を、御預り申した場合に、各々が、井上の指揮命令に從はぬ、となつたならば、詰り君公の御沙汰に背く事になり、不忠此上も無きことになるのぢやが、それ迄にして、井上の一派と爭ふを、君家の御爲になる、と、思ふて居らつしやるか』

『折角の事ではあれど、御斷り申しませう』

『然らば、飽く迄も、井上の一派と爭ふ、お覺悟か』

『左樣』

備前は、暫くの間、考へて居たが、

『さう言はれては、致し方がない。拙者は、手を引くの外は無けれど、若し井上が、君命を蒙つて、何事かの指揮を致した場合には、何となさる』

『イヤ、其御心配には及ばぬ。君命の下る迄に、井上の一人や二人、處分に何の手數が要りませうぞ』

『何ンと、井上を處分てしまはう、と、言はつしやるのか』

『左樣』

『それ迄の覺悟とあれば、致し方が無い。併し、尙ほ一應は考へてもらひたい。各々に手足があれば、井上にも手足

がある。各々に、多くの味方があれば、井上にも、多くの味方がある。餘りに我意を張り通して、人を侮る時は、却つて破れを招くこともある。戰の事から申しても、夜討朝駈といふ變法もあれば、强い者が、勝つとばかりは限らぬ。尤も是はホンの譬へ話ぢやが、ハツハ、、、、、』

餘りに一同が、勢に乘じて、井上一派を、侮つて居るやうな、容子が見えたから、宍戸は、それとなく急所を突いた心組で、暗に、井上の方にも、相當の用意はある、といふ事を仄かしたのであつた。縱令何と言ふた所で、是れ迄に固つて居る、頑固連の頭が、解ける譯もなく、宍戸の忠告は、水の泡となつて、已むことを得ず、宍戸は、空しく屋敷へ、引取つて來た。

袖付橋の闇討

井上は、御前會議が、濟んだ後、一番に遲く下城して、廣澤兵介の屋敷へ立寄り、明日からの打合せに、時を移した。此廣澤が明治になつてから、九段坂上の妾宅で暗殺された、參議の廣澤兵介である。『堀のお梅』といふ小說本が出て、大層世間の評判になつたが、あの本を見ると、廣澤が、長州人の事で、其道に掛けて强者ではあつたらうが、それにしてもでさへ、此人には、一目置いて、話をした位である。惜しい哉、其才幹が、累を爲して、終に暗殺されてしまつた。不思議な事には、何者が殺したか、未だに其下手人が分らない。木戸も死に、井上も死んだ。伊藤も、山縣も、すでに此世に居らぬ以上、廣澤を殺した本人は、何の某といふ者であつた、と、もう判りさうなものだが、未だに知れずに居るのは、どういふ譯か。

前には、波多野金吾といふて居たが、此の時分には、もう廣澤兵介になつて居たのだ。幕府へ對する議論が、井上の一派と、全く同一であつたから、井上も、廣澤を相談對手として、何事も打明けて居たのである。高杉は、一足先

きに、萩の城下へ引取つた。是は、自分の部下の者や、同志を纏める爲に、歸つて行つたのであるが、其後で、もう相談も濟んで、酒宴に移つた。井上は、今日の疲もあるし旁々、時刻も大分後れたから、歸宅しようとするのであつた。

『俺は、もう歸るぞ』

『マア宜からう。もう少し話して行け』

『イヤ、母も心配して居るのぢやから、もう歸らう』

『さうか、誰か附けてやるから、待つて居れ』

『何ぢや。そりや何の事ぢや』

『時が時、殊に、今日の御前會議の後であるから、萬一の事でもあると、一大事ぢや。お供を附けてやらうと、いふのぢやよ』

『馬鹿な事を言ふな。武士が夜行をするのに、守つて呉れる者がなければ歩けぬ、といふ事があるか』

と、言ひながら、井上は、右の袖を捲つて、腕を叩きながら、

『聞多の腕には、條鐵がある。心配は無いさ、ハツハ、、、、、』

斯う言はれては、强ひては言へぬ。

『それぢや。隨分氣を注けて行け』

『ウム、そりや大丈夫』

身仕度を整へて、待受けて居た、從僕の淺吉に、提灯を點けさせて廣澤の屋敷を出て、一杯機嫌の千鳥足で、ぶらり〳〵とやつて行く。城下續きとはいふものゝ、途中は七八町、人家が途切れて、寂しい並木になつて居る。袖付橋を渡つて、恰度通り掛つたのは一本松、此袖付橋に就いて珍話がある。何しろ是だけの事件が、あつた處であるし、

名前も袖付橋といふので、何となく偉さうに、聞える橋であるから、定めし立派な橋だらう、と思ふて、先年、山口へ行つた時に、此橋を見に行つた。所が、幾ら捜しても、橋らしい物は無い。そこで通行人に、

『袖付橋は、何の邊にありますか』

と、言つて尋ねると、其人は、にや〳〵笑ひながら、

『お前さんの立つて居る、其脚下にあるのが、袖付橋ですよ』

と言はれて、始めて氣が付いて見ると、二間ばかりの溝のやうな川に、小さい石橋が架つて居た。其上を歩いて居ても、氣の付かない位の、よく田舍道などにある、土橋に等しいものであつた。現に、自分が、其上に立つて居ても、分らない位の……それが袖付橋だ、といふことが、解つた時には、僕も聊か呆れた。一本松といふ處には、監獄署が建つてある。昔は並木であつた、といふが、今でも餘り賑かな處ではない。尤も監獄が出來て居る位だから、どうせ寂しい處には違ひない。

宍戸備前が、立去つた後に、圓龍寺へ集つた者が、段々相談の上で、どうせ生かして置けぬ、井上聞多の事であるから、同じ殺すものならば、一刻も早いが宜からう、といふ事に決つて、兒玉七十郎、中井榮之丞、周布藤吾、木村新の四人が引受けて、井上の歸りを待受けて、ばツさり殺る事になつた。先に廻つて、一本松の暗闇に、刀の鯉口を寬げて、待つて居るとは、神ならぬ身の聞多は、更に知る由もなく、淺吉を先きに、ぶらり〳〵と、やつて來た。途端に、闇の中から、躍り出た一人の武士が、

『待てッ』

聲をかけられて、井上が、一歩退いて身構へると、同時に、

『井上かッ』

と、尋ねられたから、

『ウム、聞多ぢや』

此答が、終るか終らぬ中、ヤツと掛けた、氣合と共に、拔討に眞向から、折り掛けて來た。偖はと思つて、井上は、身體を交はしたが、交はし切れずに、右の頰から顎へ掛けて、ザツクリ割込まれて、ワーツと思はず聲を立てゝ、顏を押へながら、後へ引かうとする。後から飛出した一人が、今度は足を掬つたから、井上は、前へパツタリ倒れた。同時に、拂はれた横一文字、胴斫りにされたかと、思ひの外、幸運な井上は、倒れる時に、帶が緩くなつて居た爲に、大刀の柄頭が、大地に當つた途端に、脊中へ廻り、其上を斫られたので、がつちり音がして、傷は重かつたが、自分の大刀で、胴斫りになる事は免れた。刀を拔合す間もなく、斫り倒されたのだから、井上は、其儘四つ這ひで七八間、バタ〳〵〳〵と逃出した。

『それツ、早く殺つてしまへツ』

と、後から押重なつて、追馳ける。現れた者は、前に言ふた四人、突いてしまへば何でもないのだが、斬らうと決めて來たので、味方が四人あるだけに、却つて邪魔になつて、思ふやうには斬れなかつたが、井上は、是が爲に十三箇處の重輕傷を負ふた。僅かの隙を見て、立上つた井上が、腰に手をやると、大刀は、脊中に廻つて、小刀丈けは前にあつたから、それを引拔いて、チヤリン〳〵と拔合せながら、横飛に飛んだ途端に、小溝に足を落して、仰向けに倒れた。

『それツ、止めを刺せ』

と、いふので、乘し掛つて止めの一刀、胸下目掛けて、ブツツと刺すと、カチンと音がして、刀は外れて、大地へ二三寸突刺した。其折柄、淺吉が『人殺し、人殺し』と騷立てゝ、屋敷へ知らせる。彼處に一軒、此處に二軒と、點々に在つた屋敷から、追々人が飛出して來た。井上の兄幾太郎も、手槍を携へて、飛付けて來る、といふやうな譯で、是までに追詰めた井上に、再度の止めを刺す暇もなく、押へられては事面倒と、四人は、闇を幸に、何處ともなく逃

去つてしまつた。

氣丈な母の介抱

幾太郎が、騙付けて見て、驚いた。井上は、瞻の如く、斫り弄まれて、早や蟲の息になつて居る。他の人に手傳つてもらつて、漸く屋敷へ、擔ぎ入れたが、井上は、唯苦しさうな息を吐くばかりで、更に人事は辨へず、今にも息が斷れんとするの有樣であつた。城下へ、人を馳せて、醫者は迎へたが、是が存外の庸醫で、迚も是だけの重傷を手當する技倆は、有つて居ない。幸ひ見舞にやつて來たのが、所郁太郎といふ人であつた。

此人は、美濃の國安八郡の鄕士で、夙に勤王の大義を唱へて、諸國を遍歷した末、大阪へ、やつて來て、緒方洪庵の塾に入つて、蘭書を學び、其傍ら外科手術の助手をさせられて、相當に療治は、出來るやうになつて居た。井上とは、主義の上の友として、極めて親密して居たから、此頃は、城下に足を留めて、近く醫者の開業をしようといふので、準備に掛つて居た所であつたが、一本松の騷ぎを聞付けて、見舞に來て見ると、醫者は二人、來て居るが、療治に掛る事が出來ないで、手を空くして居る。此有樣を見たので、所は、堪り兼ねた。

『宜しツ、拙者が、療治をしよう』と、刀の下緒を取つて、襷に掛け、燒酎を薄く溶いて、創口を洗ひながら、端から縫ひ出した。其席には、二人の醫者も居て、宛然、所の助手といつた樣な有樣で、此創を縫ふ手傳をして居た。

それに就いて、面白い話がある。是だけの大創を縫ふ、器械が揃つて居ない。第一に針が駄目だ。所が、さつそくの智慧で、井上の屋敷へ、二三日前から、疊屋が入つて居たので、其置いて行つた針を以て、縫つたといふのだから縱令手術が巧いにしても、縫はれる者は堪らない。殊に、緒方の塾で、少し位學んだからといふのだから、といふて、外科の名手といふ譯でもなく、使ふ道具が疊針で、縫ふた者が、怪しい醫者樣だ、晩年になつて、井上が裸體になると、身體中滅茶々々に、創の痕が殘つて、見るも無慘な、當時の事を思出す程に、甚かつたのも無理はない。それでも、所が居たから、命は助つたのだ。五十幾針縫ひ終つたら、夜が明けたのだから、詰り一晩中、縫つて居たやうなものだ。氣の利いた仕立屋なら、單物の三枚や四枚は縫つてしまふだらう。縫ふた醫者の氣も長かつたが、縫はれて居た井上も、隨分氣の長いものであつた。療治は終つたが、井上は、全く人事不省だ。追々にやつて來る、見舞の客も此有樣を見ては、もう井上の命は、無いものと諦めて、眞の同志は、涙を流して歸る。蔭で喜んだのは、俗論黨の連中であつた。是で大奸物の井上は殪れたから、高杉、廣澤を始め、其他の奴等は、是より追々に殺けて行くといふやうな事も口走るやうになつて、山口から萩へ掛けての城下は、再び俗論黨の勢力になつてしまつた。

何しろ、十三箇處も斬られて、出血は甚しいし、療治は思ふやうでない。後の手當も、充分とはいへなかつた。本人は、人事不省で、湯水も咽喉へは通らぬ。此有樣を見ては、どんな者でも、助かるとは思へなかつたらう。如何にも苦しさうな、唸き聲を出して居る、樣子を見て、兄の幾太郎は、迚も我慢が出來ないので、井上の枕許に、ぢつと坐つて、唸つて居る、井上の苦しさうな顏を、見て居たが、口の中で、何か頻に獨言のやうな事を言ふて、軈て刀の柄に手を掛けて、片膝立直した。途端に、隣の座敷から出て來たのは、母のお勝であつた。

『オヤ、幾太郎、お前は、何をして居るのか』

聲を掛けられて、思はず振返つたが、幾太郎の常ならぬ、顏色を見て、

『お前、全體、何をして居るのか』

『ハイ』

『ハイではない、刀の柄に手を掛けて、恐ろしい身構をして居たやうぢやが、何をして居つたのか』

と、詰問られて、幾太郎は、答へた。

『聞多の苦しさうな、此態を見ましては、兄の情として、堪へ難く、寧そ一思ひに刺殺さうか、と思ひまして……』

『エツ、何といふお前は、恐ろしい事をする。まだ息のある弟を刺殺さうなど、といふのは、容易ならぬ事ぢやぞ、殊

に、妾の眼の黒い中は、縦令どんなことがあつても、さういふ事はさせませぬ。聞多は、私の伴ぢや。他の者には、手は附けさせぬ。天命が來て、死ぬのならば據處ないが、現在の兄が、手に掛けやうとは、何事か』

幾久太郎は叱られて、

『何とも、相濟まぬ事を、致しました』

『もう、左樣な考へは、起して下さるな。私の一心でも、屹度助けて見せる』

是から、母のお勝が、必死になつて看病を始めた。昔の武士は、妙な所に、親切氣を起したものだ。現在の弟が、斬られて苦んで居るのが、可憐想であるから、寧そ一思ひに殺してやらう、などとは、今の人情では、迚も測ることの出來ない事である。

母のお勝が、一心の看護で、三日目には『水を呉れろ』と、言へるやうになつて、水を呑ませて見ると、咽喉へ通つた樣子だ。それからは一層、苦しさも增したやうであるが、時々刻々に、氣が付いて來て、所の見込では『此具合なら、どうか命は、取留めるだらう』と、いふ迄になつて來た。一家の者も、愁眉を開いて、其看護に努めるやうになつた。

命運の強き人

昔の武士に、最も尙ぶべき事は、如何なる場合にも油斷のない、といふのが、一般の武士の風習になつて居た。それであるから、闇討に遭つて、横死は遂げても、刀の柄に、手を掛けて居れば、其人の家は殘されて、知行も半分だけは、相續人へ與れる事になつて居た。如何に不意討をされても、刀の柄に、手を掛ける餘裕の、無いやうな者は、武士としては、認められない位に、平生から嚴格な養成を、受けて居たのが、其頃の武門の常習であつた。然るに、井上は、不意を討たれて、刀を拔く暇が無く、前に倒れた所を、襟に掛はれたのが、最も重い傷であつた。若し此時、

に、井上が、刀を拔いて倒れたなら、無論胴斬になつてしまつたのだが、其刀を拔く暇が無く倒れた、といふのが僥倖になつて、敵手が、横に拂つた刀は、井上の腰にある大刀で、ガツキリ止つて、致命傷とならずに濟んだ。不意を討たれて、刀を拔合はす間が無かつたのは、武士の不覺であるが、其不覺が、却つて命を助けた因になつた、といふ。是が運の好い人とでも、いふのであらうか。又仰向けに倒れた所を、止めの刀を刺されよう、とした時に、ガチンと音がして、刀は外れて、大地へ突刺した。其暇に四方から、人が集つて來たので、二度目の止めを刺すことが出來ずに、曲者は退散した。初から刺殺す心算であつたならば、無論仕損ずるやうな事は無かつたらうが、斬殺すといふ心算で居た爲に、四人で斬つたけれど、重傷を負はせた丈で、命を取ることが出來なかつた。止めを刺す時に、ガチリと音がして、刀が外れたのは何であるか、といへば、之に就ては、一場の艶話があるのだ。

其頃、京都の祇園に、中西君尾といふ藝妓があつた。此君尾と、井上が、深く契つて居た所から、愈々英吉利へ出掛ける、といふ時に、井上は、君尾に袂別を告げる心組で、竊に會ひに來た。無論眞實の事は言へないから、嘘八百の出任せで、或る事情の爲に、遠い國へ行く、再び生きて會へないかも知れない、といつたやうな事を聞かせた。所が、君尾も、頻に袂別を惜んで、『さういふ譯なら、何卒記念の品を、置いて行つて呉れ』と言はれて、井上は、持つて居た、紙入を與へ、其代りに、君尾の方からも、記念を貰ふ事になつて、君尾が渡したのは、一面の鏡であつた。今と違ふて、其頃の婦人は、鏡を女の魂としてあつたので、大概の者は、懷にして居た。而かも、其鏡は硝子ではなく、金屬の鑄物を磨上たもので、それを、井上が懷にして洋行したのだ。歸つて來てからも、其鏡だけは離さず、懷へ入れて居た。丁度、闇討に遭つた時も、此鏡は、大切に持つて居たので、仰向に倒れた時、止めの刀を刺されたが、幸に其鏡が滑れて、胸の所に來て居た所を突かれたから、ガチンと音がして、刀は外れたのである。究竟いへば、鏡の爲に助かつた命であるから、藝者買も、斯ういふ點から考へれば、全然無駄なものではない。若し藝者買の効能は、どういふ點にあるか、と、聞かれたなら

ば、斯ういふ點にある、と答へれば差支へないのだが、併し、そんな事は、萬人に一人の話で、大概は、鏡を貰はない中に、角の地面も、先祖から讓られた財産も、滅茶々々にして仕舞ふのが落ちだから、寧そ初から近寄らないのが、一番の策だらう。此二つの事情から、井上は、危き命を取留めて、其上に眞實の醫者が、手を出し兼ねて居る場合に所郁太郎が騙付けて、此人の療治で、命が助かつたのだから、井上は、何所までも命運の强かつた人に違ひない。殊に十數箇所の重輕傷を負ふたのであるから、出血も甚かつたらう。大概な者ならば、それ丈でも死んでしまふのだが遂に命が助かつた上に、八十歳まで生き延びたのは、何所までも井上は、命運の强い人であつた。

井上の入牢

高杉が、萩の城下から、騙付けて來て、井上を、見舞つた時は、未だ眞實に、正氣にはならなかつた時である。御前會議が濟んで、萩の城下へ、一度引取つた高杉は、是から先きの働をする、準備に掛つて居たのである。所へ、急報が來て、井上が斬られた、といふのだから、偖ては俗論黨に先んぜられたか、此上は前途のことも判らぬ、と思つて、部下の者の處置を付けて置いて、それから山口へ遣つて來たのだ。來て見れば、死生を約した友の井上が、此有樣であるから、流石に高杉も氣落がして、枕頭に坐つた儘、腕を組んで、其樣子を見て居るばかりであつた。兄の幾太郎が、井上を、搖り起して、高杉の來た事を告げると、漸く頭へ通じたものか、僅に目を開いて、高杉の方を見た。高杉は、此有樣を見て、もう胸は一杯であつたが、偶と見れば、井上の右の手が、動いて居る。疊の上へ、何か字を書いて居るやうであるから、能々見ると、『遁』といふ字を書いて、頻に手を振つて居るから、偖ては此九死一生の重傷を負ふて居て、自分の一身が、斯うなる以上は、お前の身も危いから、早く遁げて、一時身を隱せ、といふ意味かと思へば、益々其氣象の確なのに、感心すると共に、井上の情愛の厚いのに感じて、高杉は、男泣に泣いた。

其日は、高杉も一度萩へ引返して、頗に俗論黨の跋扈するのを抑へて、正義黨の勢力の恢復を圖つたけれど、遂に力及ばずして、高杉の一身は、時々刻々に、危くなつても詰らないから、一時は身を遁れて、再び時機の來るのを待たう、といふ決心になつて、直に山口の城下へ、遣つて來て、井上を訪ねると、此時は、井上も大分創が快くなつて、もう人の見別けも付くやうに、なつて居たから、『オイ井上、俺は、一時身を忍ばせる事に決めた。他から見たら卑怯でもあらうが、さうした方が宜い、と思ふから是より直ぐに下關の方へ行く事にする。お前も、隨分大切に療治をして、奮の身體になつて吳れ』

『何ぢや』

『下關の方も、なか〳〵俗論黨の奴輩が、跋扈て居るから、注意の上にも、注意を怠つては、ならぬぞ』

『そりや、大丈夫、決して心配は、懸けぬ心組だ』

と、言ひながら、高杉は、何か書いて、井上に渡した。井上が、之を見ると七言絶句が一首、今此場合に、身を遁れて、更に機會を見て再會をしよう、といふ意味である。惜い哉、此詩が、井上の手許に、書取つて無いので判らないが、之に對して、井上が、韻を履んだ詩は、遺つて居る。著者は、現に井上に書いて貰つて、持つて居るが、それは斯うである。

元治甲子多、高杉東行將レ避二難於九洲一、臨レ去訪二予病床一、言二其志一、即賦レ此叙レ別

身被二數創一志未レ灰　何時瞰起拂二氛埃一
病苦忘來且侑レ杯　喜君雄略存二方寸一

斯ういふ事情で、高杉は一度、下關へ立去つて、其後、井上は、創が癒つて、もう庭前の散歩位、出來るやうになつた。さうなると、俗論黨は、井上を放任して置くのは、危險で叶はぬから、藩命を笠に、入牢を申附けてしまつた。一度は、野山の獄に繫がれて、更に親類の座敷

牢へ、移される事になつた。どうせ全然創の癒るのを待つて、切腹でも申附けるのであらうが、井上も、斯う成つては、仕方が無いから、唯藩命の下るのを待つて、自刃するの覺悟はして居たのである。

長州再征の事情

長州征伐は、前後二回に亘つて、全く幕府の失敗に歸してしまつた。前には、西郷の盡力で、開戰の事態に迄ならず、尾張總督の英斷で、退陣してしまつたから、双方に、何の損害も無いやうに、見えたけれど、實は、幕府の失敗であつた事は、明白である。

苟も、天下を支配して居る、幕府が、一諸侯に對して、征討の軍を起しながら、戰ひを開かずに、退陣したといふ事が、既に失敗であつて、何の爲めの擧兵であつたか、殆んど其意味を知る事が出來ない。多少の條件は、毛利として、履行させたとしても、擧兵本來の目的は、遂に達し得なかつたのである。

さればとて、幕軍を、退陣せしめたといふ丈けでは、毛利の成功ともいへぬ。殊に、三人の國老は、腹を切つた上に、廣島の國泰寺前に、其首を曝され、また毛利父子は、城を出て、寺院に蟄居した、といふのであるから、決して武門の名譽とは、言ひ得ないのである。

その紛訌の間に、井上の遭難事件があつて、遽に非戰派の勢ひが强くなつた爲めに、主戰派の重立ちたる者は、すべて處分されてしまつたから、長州藩としては、全く幕府に、降伏したと同樣の狀態であつた。

高杉は、既に危きを免れて、筑前へ走り、井上は、傷が癒へて、身體が動くやうになると、牢へ打込まれてしまつた。これで主戰派は、全く閉息した譯になるのだ。

筑前へ逃込んだ高杉は、早川勇、鷹取養巴、月形洗藏等の盡力で、魚市場の俠客、石藏屋卯平に救はれ、更に平尾山の野村望東尼方へ、無事に潛伏し得る事になつた。

毛利父子の蟄居や、三國老の切腹は、高杉が、國を去つてからの出來事であつたから、其事の在つたのを、高杉が聞き込んだのは、年の暮れ、十二月の下旬であつた。

國許の事情を聞いたので、高杉は、同志の引留めるのも肯かず、遽に下之關へ引返して來て、これから奔走を始めたのだが、其間の働きは、眞に神出鬼沒、何人も、豫期し得なかつた程の機敏さで、同志の者が、追々に集まつて來たのを、巧みに引纏めて、遂には、山縣狂介を說いて、奇兵隊を、動かす事になつたのだ。

それ迄の經緯を、詳しく述ぶれば、長くなるし、また此全集中の高杉の本傳と、重復する恐れもあるから、茲には唯その概要を掲げる丈けにして置く。

慶應元年の正月を迎へて、未だ松飾りのある內に、兵を起して、先づ下之關の陣屋を燒いた。同時に、藩船を奪ふて、折からの風雪を冒し、激浪と鬪つて、萩の城下へ、遽に逆寄せをしたのである。

山縣は、殘る奇兵隊士を率ゐ、別に同志を集めて、陸路を、萩に向つた。途中、多少の衝突はあつたが、すべて打破りつゝ、萩へ着いて、高杉の兵と、一つになつた。それから、激しい戰ひがあつて、非戰派の家老、粟屋隼人を斬つて、城へ乘込み、遂に主戰派の立場を、覆の如くにしてしまつた。

井上が、牢から救ひ出されたのも、それと同時であつた。伊藤が、伏潛して居た、山の中から、這出して來たのも此時であつた。かくて、萩の藩廳は、全く高杉一派の爲めに、占領されてしまつたから、毛利父子も、再び城へ、戻つて來た。

それから、國境の防禦と共に、幕府に向つて、宣戰狀を發した。幕府としては、厭でも、再び兵を差向くるの外は無かつたのである。紀州中納言が、征討總督となり、將軍家茂は、長州親征と稱して、江戶を發する事になつた。然し、愈よ長州再征と決してから、實際に一萬の大兵が、長防の國境へ臨む迄には、可成りの月日が經つたのであるから、其間に、色々な事が起つて居る。今は、一切を省略して、直ちに井上の消息に就て、語る事にしよう。

別府潜伏中の井上

今度は將軍家茂の親征だといふので、毛利の方でも、それに對して充分の準備を爲ねばならぬ。例の大村益二郎が未だ村田藏六の時で、和蘭の兵書と日本の軍學とを折衷して、藝備の國境には、それ〴〵の防禦も出來て、藩士の意氣も、頗る振つて居る。只一つ心配なのは、近國の諸侯がどうするか、若し德川の威勢を憚かつて、嘘にも應援らしいことを爲れては、毛利の爲めに由々しき一大事である。假し味方はして呉れないまでも、中立は是非守つて貰ひ度いのだ。それを爲るには、各自に方面を定めて遊說する必要がある。高杉と井上は專ら其事について、同志を各所へ割付けては出立を爲せる、當時の二人の働きといふものは、實に目覺しいものであつた。

井上は、負傷の疲勞が、全く本腹せず、無理に奔走して居たのであつたから、何分にも働きが思ふやうでなかつた。瘢が大きかつた丈け、何うかすると痛むことがあつて、流石の剛情者も、些か閉口して居た。

『やア、何うぢや』

『おう、高杉か』

『顏色が惡いな』

『うむ』

『未だ本當に癒らんのぢやらう』

『左樣かも知れんよ』

『痛むか』

『時々痛む事もあるが、それよりも困るのは、息切の爲る事ぢやよ』

『そりやア不可、彼れ丈けの血が出たのぢやから、疲れがあるのぢやらう』

『うむ』

負けぬ氣の井上は、左迄に弱味は見せないが、容態の上に、疲勞の狀は現はれて居た。

『己れは、例の一條で、四國へ渡るつもりぢや』

『四國へ、行くのか』

『幕府の兵が、押寄せて來るのには、未だ却々間があると思ふから、そのうちに、四國の同志を募つて、萬一の場合に備へやう、と思ふのぢや』

『そりや、可からう』

『貴樣も、その間に、充分の養生をして、身體を丈夫にしたら、何うかと思ふ』

『左樣さな』

高杉は頻りに繰返して、それを勸めて居るのであつたが、井上は、氣が進まぬらしい。

井上の心にも、少し保養をしたい、といふ考へはあつたのだが、此場合に悠々と、湯治場巡りもなるまいし、自分は爲るとした所で、他が許すものでもなからう。藩の存亡に關する、事件が起きて居る場合には、國を離れるのは宜しくない、と、斯う思つて居たから、高杉の勸めるのに對しても、判然した返辭はしなかつたのである。

『貴樣、何を考へて居る、考へる事はない筈ぢや。瘢の跡療治に行くのに、誰れに遠慮もなからうぢやないか』

『同志の人々が、寢食を忘れて、藩の爲に心配して居る場合ぢやから、保養に出かけるのはどうかと思つて、考へて居るのぢやよ』

『貴樣の氣象としては、左樣かも知れぬが、要するに、是れからは體が大切ぢやからな。それでは、斯うしたら可からう。別府の溫泉は、大層瘢に利くさうであるから、湯治をして居る傍ら、彼の附近の同志を尋ねたり、小さい諸侯の動靜を搜る事にしたら、どうぢや』

『なる程、それなら可いかも知れぬな』

井上も乘氣になつた。高杉は、一と搖り、膝を進めた。

『小倉藩は、到底見込はないが、彼の附近の大小名は、衝いて置くのも可からう。そりや、貴樣の駈引で、種々に行つて見るのも、面白いぢやないか』

『如何にも左樣ぢや。小倉藩にしても、足元で變な事を爲れては、充分に外へ手は出せまいからな』

『さ、左樣なつたら、今度の戰爭は、必ず勝つに決つて居る。貴樣は別府、己れは四國、そのうちには、桂も歸つて來る。伊藤は、跡に殘つて、我々の音信を繼ぐ役目ぢや』

『可矣、出かけることにしよう』

二人の相談は纏まつて、井上は、愈よ別府溫泉へ、行く事になつた。井上は、旅裝を整へて、下之關へ向つた。高杉は、二三日後れて、ひそかに四國へ渡つた。下之關には、伊藤が居て、井上を迎へた。

『能く遣つて來たのう』

『まア、那邊かで飲みながら、語る事にしようか』

『可からう』

下地は好きなり、御意は可し。遊ぶ事と、飲む事に於ては、徹底して居たが、殊に、仲善の兩人は、稻荷町へ來て馴染の林龜を選んだ。

『オイ伊藤、誰れか呼ぶか』

『まア、後刻で可からう』

『不思議に、遠慮仕居るのう』

井上は、少し考へて、

『あツ、成程、こりや遠慮のある譯ぢや』

『何が……』

『何がツて、貴樣、小新の一件は、何うしたか』

『馬鹿な事をいふなツ』

『ハツハヽヽヽヽ』

『貴樣は、詰らん事をいふて、不可よ、彼りや、一時の出來事ぢや』

『一時の出來事とは、巧い事をいひ居る。今夜も、一時の出來事か、それとも永代の出來事になるか、それが面白いのぢや』

『そンな事は、何うでも可からう』

『イヤ、却々可くないぞ。貴樣、己れに隱して居るな』

『何を』

『この家で、永代の出來事があつた、といふぢやないか、ハツハヽヽヽヽ』

『馬鹿なツ……』

井上が、烈しく切込む皮肉には、流石の伊藤も、受太刀であつた。それも其筈、小新に嫌られて、別に手入れた、或る秘密の物があるのを指して、暗に責められるのであつた。

伊藤が、手に入れた、永代の獲物については、深く語るの要もなからう。それは永代の獲物として、伊藤の死後迄も生殘つて居られた、例の御方であるから、その點は、二人の對話丈けに留めて、敢て詳しい說明は、せぬ事に爲る。

『時に、高杉は、何うしたか』

『山口で、別れて來たが、多分は出立したらう、と思ふ』

『出立したとは、そりや那邊へ』
『四國へ渡る、といふて居た』
『四國とは、妙ぢやな』
『それには、仔細のある事ぢや』
『左樣か、そりや、何ういふ事情か』
井上は聲をひそめて、高杉と相談の一條を、漏れなく語つた。伊藤に、異存のあらう筈もなく、殊には、井上が、それを兼ねて、湯治場行きは、頗る思付きであると、思つた。
『其後の容體が悪いから、己も、心配して居たのぢや。別府へ行くのは、良い事ぢや。充分に養生をして來るが、可い』
『うむ、己れも左樣は思ふが、餘り落付いても居られまいよ』
『併し、行くにしても要愼は爲ぬと……』
『イヤ、それは心配するな』
『何ういふ事にして、行くか』
『町人姿にでもなつて、行く外はなからう』
『左樣さ、まアそれが、可からう』
『何日、行くか』
『今夜にでも、船の都合が可かつたら』
『相變らず性急な事ぢや、ハツハ、、、、、』
仲居が、酒肴を運び込むと、二三人の御酌も來て、座敷は賑はつて來た。

後れて來たのは、お靜といふて、井上が、豫ての馴染だ。
『やツ、貴樣、何うして來居つた』
『何うしてツて、そりや無禮や、郎君が、呼びなはつたのやな』
『ふーむ』
伊藤の方を、ヂロリと見る。伊藤は、眼を脫らして、ニヤ〳〵笑つて居た。
『悪い事を爲る奴ぢや』
私語が如くに、井上は、斯ういふて、伊藤を睨むと、伊藤は、ケロンとして居る。伊藤が、油を絞られた、仕返しの悪戯であつた。お靜が、井上の手に入るまでには、隨分骨も折つたのであつて、伊藤は、尻尾を持上げる役を勤めたのだ。井上は、手に入れた當座こそ、せツせと通つて、熱も高かつたが、そのうち他にも、美しいのが手に入つて、お靜の方は、更に見返へりもしないやうになつたので、さうなると、困るものは伊藤であつた。お靜は、伊藤の顏さへ見ると、
『貴君の言やはる事は、皆んな嘘や。貴君のやうな嘘吐は、外にはありまへん』
『何故かツて、井上はんの事は何うぢや』
『何故か』
『イヤ、そりや違ふ』
『違やアしまへん。井上はんのやうな、御武家らしうもない、同じ廓で、彼アいふ事をしなはるとは、仇や敵ぢやおまへんに、貴君も、媒介しなはつた人にも似合はん。それを默まつて居なはるか』
ヂリ〳〵攻めつけられる毎に、伊藤も、閉口して居たのだ。其處で、井上へ告げずに、秘密で呼びにやつたのである。

『オイ、お靜ツ』
『はア』
『レツかりして居れ、油斷を爲ると逃げられるぞ。井上は、他からも迎ひが來て居るから、捉まつて居て放れるなよ』
『馬鹿な惡戯を始め居つて、大概にしろ』
『ハツハ、、、、、、左樣眞面目になるな、お靜も、しつかり談判しろ』
さかんに煽りつけるので、お靜は、井上の手を抑へて、頻りに苦情を持出す。仲居も、之れに應援する、といふ騒ぎで、井上も、兜を脱いで降參した。
伊藤が、不意の復讐に、獨り井上は困つたが、その代り座敷は、之が爲めに賑かになつて、井上も、今は包圍のうちに陷つた。
『己れが惡かつたから、最早許して呉れ』
お靜は、漸く抑へた手を放した。
『郎君が、惡いと言やはるなら、もう勘忍しますが……』
『そりや、有難い』
『これから性の惡い事は、しなはらんか』
『もう、懲々ぢや』
『妾の斯うして居るうちは、必としなはらんな』
『うむ、可し』
井上が、兜を脱いだのを見て、伊藤は、頻りに嬉しがつて居る。
『流石の剛情者も、お靜には敵はんのう』

『馬鹿な事をいふな。貴樣が、詰らん事をし居つて、己れを、斯ういふ目に逢はせたのぢや。そのうちに、仕返しを爲るぞ』
『ハツハ、、、、、、左樣口惜しがらんでも可からう』
井上は、それを聞き流して、
『オイ、お靜ツ』
『はア……』
『小新を、呼びにやれ』
仲居も、手を拍つて喜んだ。
『それが、宜しうおませう』
之れには、伊藤が驚いた。
『待て〳〵、馬鹿な事を爲るなツ、そんな奴、呼ばれて堪まるか』
今度は、井上が、攻める方に廻つた。
『面白い、伊藤が困るぢやから、はやく呼んでやれ』
『そりや、ならんぞ』
『構はん〳〵、はやく呼べ、それから猶う一人、例のを呼んで、此所で鞘當を爲せろ。伊藤は、差詰め仲裁役ぢや、伊藤も、之れには閉口して、
『それ丈けは、勘辨して吳れ』
『イヤ、そりやならん。はやく呼んで來い』

『オイ井上、それ丈けは謝まるから、止めて吳れ』

お靜も、見て居て、氣の毒になつた。それに小新許りなら格別、例のを呼んで、角突合をさせるのは、良くない酒落だ、と思つて、

『まア、止しなはれ。伊藤はんも、彼アして困つて居やはる由つて、もう可いでは、おまへんか』

仲裁は、時に取つての氏神だ。伊藤は、百萬の援兵を、得た心地になつた。

『お靜、お前は、流石苦勞人ぢや。井上の考へは良くないのう』

『貴君が、惡戲しなはつたのが原因や』

『そりや左樣ぢや。その代り、お前が、井上と交情直りぢや。謂はゞ己れは、結びの神さ』

『オホ、、、、、、口實が巧いものや由つて、妾、まけますわ』

『何うして貴樣等が、伊藤に勝てるか、小新に嫌られて、彼アいふ獲物を爲るのぢやもの、その道にかけては、剛の者ぢや』

『眞正になア』

『今度は、井上の味方か』

『そりや、當然だツせ』

『何故か』

『何故かツて、井上はんは、情郎やおまへんか』

伊藤は、額を抑へて、

『これは御馳走ぢや、ハツハ、、、、、』

酒は、一しきりはずんで、間に合はぬ位なのに、盃は飛び廻つた。

酒宴の濟んだ後ちに、伊藤から、強て勸めたので、お靜を、連れてゆく事になつた。それは何ういふ理由だといふに、井上が、姿を變へてゆくのだが、要愼の上に、要愼をしない、と、何ういふ間違がない、ともいへぬ。何處までも町人に、なつてゆくのだから、女連れとなれば、眞に保養の爲めの湯治場廻り、とも思はれるだらう、といふ見込みから、井上も、終に承知したのであつた。

伊藤が、勸めたからには違ひないが、その實、井上も連て行きたかつたのだらう。翌日は、其姿を變へるのについて、種々の相談があつた。伊藤の考へでは、

『何うも、井上は、普通の町人では面白くない。少し變つたものになつたら、可からう』

と、いふのであつた。

『然らば、何が可からう』

『さうさ、己れの考へでは、土方の親分かな』

井上も、流石に驚いた。

『えツ、己が、土方の親分だ』

『うむ』

『そりや、餘り酷い見立ぢやないか』

『併し、貴樣の調子が、普通の町人ぢやない。幾分か俠を賣る、町人の方に近い。まア、土方の親分が、可からう』

『左樣かな』

兄弟よりも睦まじく、而も、死生の間を、共に出入して來た、二人の間柄で、互ひに少しの隔意もないのだ。從つて、長所も知れば、短所も見える。伊藤が、井上の氣風を見拔いて、それに相當した、土方の親分といふ見立は、面

白かつた。

『左樣と決まつたら、はやく支度にかゝるが、可い』

『うむ』

『髷も其儘ぢや不可、衣服は勿論のこと、一切を親分らしく爲ねばならんのぢや』

『宜しく、頼む』

『可笑。これから己が、悉皆變へてやらう』

伊藤が、何も彼も引受けて、遂々親分らしく、造り上げた。

『さ、立派な親分が、出來たぞ』

『左樣か』

『左樣かツて、自分が、それになつたのぢやから、その覺悟でなけりや、不可よ』

『可し〳〵』

『見た所が左樣でも、態度や言葉が武士では、却つて他の疑ひを惹くから、その邊の事は、能く注意せぬと失敗ぞ』

『そりやア、己れも、一生懸命だ』

さて左樣なつて見ると、何だか調子が悪い。故意と世話に、粹けて出ようと、すると、却つて鹿爪らしくなつて、冷たい汗が出て來る。其所で、連れて行く女も、そのやうにしてゆかねばならぬ。親分の女房さんだから、何所までも姉御の支度だ。

『やア、お靜ツ、よく似合ふたぞ』

井上が、先づ感服の賞辭、伊藤も合槌をうつて、

『眞に能く似せ居うた、何う見ても親分の女房ぢや。千兩々々』

お靜は、顏を赤くして、

『そないに冷かしなはつて、妾い、厭や』

『厭やか、嬉しいか、こりや判らん哩』

そのうちに、林龜の主婦も出て來れば、仲居も、ワイ〳〵囃し立てる。その騷ぎは普通でなかつた。昨今の女は、湯治場巡りなどを、何でもない事に思つて居るが、昔の事にすると、たとへ孌妓のやうなものでも、却々そンな事はなかつた。客の勸めで、行くとなつてからの支度が、一と騷ぎだ。況して、途中に一晩も二晩も費し、山河越えて行く抔の事は、一生に有るか無しのことであつた。

別府の温泉といへば、音に聞えた名湯ではあるが、下之關邊りの男でも、容易に行く事の出來ぬ、其處へ行かれる、といふのだから、お靜の喜びは、尋常りでなかつた。

『且那樣の御容子は……』

今、氣がついたかの樣に、主婦は、珍らしさうにして尋ねた。井上は、微笑を含んで、

『何うぢや、よく似合つたか』

『はア』

『何うぢや』

豈夫に、土方の親分に、その儘に生寫しとも言ひかねて、只だ愛嬌笑ひを、して居ると、やがて支度も出來て、船の出るには、最早間もない。立際の一ばいに、また氣を吐いて、井上は、お靜と共に、立ち上る。伊藤は、乘船場まで見送つて來た。林龜夫婦も仲居も、それ〴〵に從いて來たのは、勿論である。

日本の温泉場も、多く在るけれど、豐後の別府ほどの土地は、多く無からう。別府の市街全部は、殆んど溫泉で、

その湧出す量の、澤山な點と、概して透明な綺麗な點と、この二つに於ては、他に比類のないものと思ふ。其種類に於ても、硫黄、炭酸を始め、有らゆるものがあつて、二尺か三尺離れて、湧く湯の成分が、すべて違つて居るなどは、最も珍とするに足る。穴さへ掘れば、直ぐ湧いて出るのだから、面白い。海岸へ行くと、これは又た、奇妙な砂湯と、いふものがあつて、滿潮の時は、悉皆隱れて了ふが、干潮の際は、海水のビシヤ〳〵やつて居る位ゐの所でも、砂を掘ると、ブク〳〵湧いて出て、その中に、身體を入れて、上へ砂をかけて、寢て居ると、程度よく尻の下から、曖いのが出て來て、その氣持の良い事は、尋常でない。恐らく是れ丈けでも、別府の誇りと爲すに足りよう。

今の大分が、昔の國府で、二里離れて、別府が在る。別府とは、國府の別れ、といふ意味であらう。市街の右に、近く聳ゆるものは、大友宗麟の城址で、有名な四極山といふのだ。前は、一面に大きな灣で、左右から陸が突出て、恰も袋のやうになつて居る。極くの昔は、この灣の所が市街であつたのだが、地震の爲めに、全部陷落して、今の灣になつたのだ、といふ。何しろ眺望の良い事も、この上なしであるが、溫泉は、町の到る處に在るが、それ〴〵に區別はあつて、別府の町にあるのが、不老泉だとか、稱は、それ〴〵に違つて居る。濱脇といふのは、鶴湯だとか、觀市街の方で、此處にも大きなのが、澤山ある。町を離れて、山の半腹に、觀海寺の溫泉と、いふのがある。讀んで字の如く、海濱を、眼の下に見て、まことに雄大な眺望である。ずツと離れて、鐵輪といふのは、全く町の氣を忘れた質朴な、これも良い土地である。只だ出入が、些さか不便に過ぎるのが疵であつたが、今では、道も拓けて、自動車も通ふ。その上に、坊主地獄といふのがあつて、大きな池のやうに、なつて居て、ブクリ〳〵と湧いて出るのが、坊主頭のやうに、なつて居るので、この名があるのだ、といふ。さらに血の池地獄といふのもあるが、是れは眞赤な色で、氣味のよくないものだ。人の好みに依つて、手拭でも何でも、染めて呉れる。チヨイと入れると、すぐ赤く染まるので、此地の名物の一つとして、溫泉染なるものが、出來て居る。近頃になつて、柴石といふ土地に、湯瀧が出來た。けれど、少し不便なのと、持主に商賣氣が少くないので、餘まり評判には、上つては居なかつたが、その湯瀧

の量の多いのと、驚くするのも程度よくするのも、人の好み通りになるのだから、頗る珍とす可しである。

別府の名も、廣く人に知られて、頗る繁昌するやうに、なつて來たが、それと同時に、町の風儀も亂れて來て、一般の湯治場と同じやうに、種々の非難もあるやうだが、これは時代の感化で、何ともしようがない。純粹の藝妓の外に、二枚鑑札もあるから、この點の便利は、非常なものだ。病氣の療治に來て、別の病氣を有つて歸る人も、少くないやうだが、通人の警察署長は保證して、この土地に、梅毒患者の無いのは、全く溫泉が豐富であるのと、効驗の著るしい爲めである、といはれたが、併し腎虛は、此限りにあらずだらう。

縣廳の所在地は大分であるが、その繁昌を比べたら、別府には及ばない。大分は、陰氣な濕ツぽい所だけれど、別府は、陽氣な瀧瀨だ所である。その代り、調子は浮いて居る。

宿屋は、大體に於て、先づ完備して居る方だ。鐵道が通じたので、和洋折衷の大きな、ホテルも出來た。一度は是非行つて見る、價値がある。殊に、神戸から船に乘つて、瀨戸內海の絶勝を眺めつゝ、別府行の美人携帶となつたら、一段の樂みであらう。

井上が出かけた、慶應の當時には、今日のやうな繁昌はなかつたが、粗野質朴のうちに、また情味の掬す可きものがあつた、といふことだ。

現時では、溫泉場も、贅澤な人の遊び場といふ風に、なつて了つたが、昔は、全く病身の人の保養場であつた。別府の溫泉が、能く病氣に利く、といふので、近國の富者が、醫者の藥にも厭いて、湯治にでも行つて見よう、といつたやうな調子で、續々遣つて來る。また近村近鄕の人が、負傷をしたとか、病氣になつたとか、或は二三日の入湯に、氣保養をして來よう、といふので詰かける。未だ海岸通りには、漁夫の家が、軒を接して居た時代でも、湯治客を迎へる爲めの宿屋が、二た月に一軒位は、殖えて來るので、町は追々に、賑つて來るばかりであつた。

その宿屋のうちに、若松屋といふのが在つて、主人の彦七は、負けじ魂の達引も強く、所謂男の意地といふものを知つて居たので、町の人に重んぜられたのは勿論、漁夫の仲間にも、若彦の旦那は豪い、といはれて、探く尊ばれて居たものだ。妻のフジといふのが、また世話好きで、よく世間ていふ、似たもの夫婦、といふのであつた。

夫婦の調子が良いのと、客扱ひに注意が深いのと、この二つが呼物になつて、一度泊つた客は、それからそれへと吹聽するので、若彦の繁昌は、日一日と、榮えて來るばかりであつた。

下之關からの船が着いて、ドヤ〳〵と、一時に上陸る、幾人の客は、それ〴〵馴染の宿屋へはいつた。跡は荷揚げに勇ましい、船頭の叫ぶ聲が、聞えるばかりである。

『それぢやア、旦那、若彦にしやすかね』

『さ、今もいふ通り、己れは、少しも勝手が解らんのだから、宜しく賴むよ』

『そンだら、若彦になせえ、却々よく世話する家だからね』

『左樣か、然らば、其家と極めよう』

『ハツハ、、、、、、旦那は妙だね。然らばだなンて、時々變な事を、言はツしやるな』

『然らば、と申したのが悪いか』

『悪かアねえが、そりやア武士のいふ事でさア、町人にや可笑しいや』

自分は、餘程氣をつけて居るつもりだが、他から聞くと、角張つて耳觸りになるものか、左樣いはれて見れば、自分にも、成程と感じるのであつた。

『己れの出入場に、お武家が多かつたので、いくらか傳染つたのだらう』

『左樣かね』

お靜も傍から、

『郎君、氣をつけなはらんと、お武士はんに、間違へられまンがな』

『うむ、可し〳〵。是れから氣をつける、心配するな』

二人は、巧く調子を合せて、互ひに莞爾笑つた。案内者の船頭は、若松屋の門口へ立つて、

『やア旦那ツ、御客さんですよ』

彦七は、帳場から飛出して、

『入らツしやいまし、お早い御着きさまで、さア何卒……』

客への挨拶と、家人への命令とが、一度に出るのだから、何が何だか解らない位ゐに喧ましいが、宿屋へ着いた時の、感想は快よいものだ。井上は、ズツと上つた。お靜は、洗石に女だけあつて、幾何か紙に包んで、船頭に與へたので、三度ばかりつづけて、叩頭した。

『何うも有難うござえやす。こンな事をされちやア、却つて困らア、へ、、、、、、』

無理に押出したやうな笑聲、これは聞いて、厭な感じが起る。困らアといふた時は、既う紙包みを、指の先で押しながら、胸算に幾何といふことが、解つて居るのだ。

『助さん、御苦勞だツたね』

『旦那、良いお客さんですぜ、大切にして下せえよ』

『お前さん、御飯が未だなら、一ばい食つて行つたら、何うだい』

『有難う、それぢやア、食つて行かうか』

遠慮のないもので、直ぐに上つて來た。そのうちに、井上は、二階へ案内された。

夫婦にしては、少し變な調子がある。といふて、好いた同士の湯治場巡り、といふ風でもない。女は無論粹者であ

るが、男は、果して何であらうか。自ら名乗る所に依れば、土方の元締だ、といふが、何うも怪しい所がある。よく氣をつけて見れば、土方らしくは思へぬ。色こそ淺黒いが、何處となく氣品があつて、言語も、更に卑しくない。一段と眼につくのは、生々と。した顔の刀痕である。善か惡かは判らないが、兎に角、一癖ある人物には違ひない。氏名を聞けば、町人に不似合な、春山といふ苗字もあり、花助といふ洒落た名は、一時の假名らしくも思はれて、給仕に出る女の話にも、

『何うも、彼の御客さんは、秘密の在る人に違ひない。この間も、衣物を着替へる時、ちらりと見たら、背中に、大層な刀痕があつた。眼も、ギヨロ〳〵して居て、何だか氣味の惡い御方です』

と、聞いて見れば、疑ひも深くなるばかりだ。

四五日居れば、大概の人は、何れほどの身分であるか位みは、商賣柄とて、見て取るものだが、今度の御客は、少しも見當がつかない。併し、二本帶した人の、成れの果だ、といふ丈けは、朧氣ながらも見え透いた。金放れも綺麗で、餘り手數もかゝらず、薄氣味は惡いやうなものゝ、さて嫌ふほどの客でもない。長く滯留して居るうちに、彦七の妻が髪結の事から、お靜に近づいて、漸々話をして見ると、元は藝者をした人だ、といふことが、略ぼ解つた。けれど、肝腎の旦那樣の事になると、何を聞いても、笑つて居て、さらに確とした、答へをしなかつた。

『それでは、失禮な事を申上げるやうで御座りますが、御一途になつてから、未だ幾歳も經ちませんのですか』

と、いつたやうな調子で、窮所へ切込むと、お靜は、甚だ迷惑らしい顏付で、

『オホ、、、、、、二人は、何と見えて……』

『そりや、御夫婦で御座いませう』

『はア』

『お長いのですか、それとも近く御一緒に、おなり遊ばしたのですか』

『昨年からやよつて、未だ新らしいのや』

『旦那樣は、今こそ彼アして、おいで遊ばしても、元は、矢張り然る可き御身分の……』

話は、漸く進んで來たが、お靜は、この先きを、答へる事は出來ないのだ。いつも其處になると、何か口實を設けては、逃げて了ふのであつた。しかし、大概は、それと察して、彦七夫婦は、春山を、身分ある人として、取扱ひに氣をつけるやうになつた。

若松屋に、內湯もあるが、それには何時も、はいつたことがなく、お靜は、女の事であるから、內湯で濟ますが、春山は、必ず外湯へゆく。而かも、晝間は寢て居て、夜おそくなつてから、一人でゆくのだ。他と一途にゆく事を、避ける樣子が見えるので、之れも疑ひの、一つにはなつて居た。

一日のこと、町の寄合に、彦七が出て、頻りに雜談に耽つて居ると、楠湯へ、夜遲くなつてから、變な人が來る、といふ話を、町のものがして居るので、彦七が聞き咎めた。

『そりやア、何んな人だね』

『何でも、他の噂さでは、貴家の御客さんだ、といふことです』

『へへー、私の家には、變な人は、泊つちや居ないが、全體、何う云ふ話なンですか』

『甚太い刀痕だそうです。脊中などは、滅茶々々に、斬られて居るさうだ』

『ふふーむ』

『何でも、それを隱さうとして、夜遲く來ては、暗い方に、脊中を向けて居るさうだ』

『ははア、變な人といふのは、何ういふ所が變なのです』

『それが、變なのでせう』

『何故か』

『何故ツて、隠すから變だ、といふのでさア』
『ハツハ、、、、、』
彦七は、高調子で笑ひ出した。
『何が、可笑しいのです』
『刀痕といふものは、見悪いものだ。それを隠すのは當然ぢやないか。自慢に、刀痕を見せる奴に、碌なものはありませんよ。隠す丈けに、其御方は偉い。それを變な人だ、なんていふのは、如何にも可笑しいぢやないか』
『成程、いはれて見れば、そンなものかね』
『第一怪しいものなら、私が御客に、して置かないよ』
『左様ですな、貴下の事だから……』
人は、平生が大切だ。彦七の平生といふものが、普通の宿屋の主人でなく、町の信用も、一段と深い所があるから、その彦七に、斯う言ひ出されて、話は、それ限りで止んだ。

井上の春山は、例の如く、楠湯へやつて來た。夜遅くなつて來る事に定めてあるから、何時も、澤山の浴客は居ない。僅の五六人位るのもので、極く静かにはいれるから、これが、何よりの樂みであつた。今夜も、二三人の外には、誰れも居なかつたから、悠々溫まつて行かう、と、思つて居る所へ、ドカ〳〵と一時に十四五人、はいつて來た。見れば、何れも下等な奴ばかりで、勞働者も居れば、遊人も居る。衣物を脱いで、はいる迄の騒ぎ、といふたら、恰で一揆でも起すやうだ。井上は、澁い顔をして、浴槽の隅の方に、小さくなつて居ると、

『オイ、遠州ツ……』
『何だ、備前……』

各自、生國の名を呼び合ふて居る。大名の集會のやうだ。
『先刻、己れが、いふ通りなンだから、大概にして堪忍して了ひねえ』
『厭だよ、己ア厭だツてば……』
『そンなに拗るなよ。まア、己れが預かる、といふのだから、任せて置きねえ』
『左様はならねえのだ。己ア、體を張つて、遣る丈け、遣つて見ねえぢやア、この腹が承知しねえツてば……』
『馬鹿に、剛情を張るぢやねえか。己れが、斯うして心配するンだから、汝えだツて、少しやア察しるが可いやな』
『汝えにや濟まねえが、己ア、不可ねえ』
『左様か、そいぢやア仕やうがないから、己ア、手を引くぜ』
『何うか、左様して吳れ』
これで、二人は默まつた。何か仲間で、喧嘩でもして居るのを、宥めて居たのらしい。
『ヤイ、文吉ツ、些と咽喉を聞かせねえな』
『今日は、御免だ』
『そンなに、お高くならないで、親切に聞いてやらうツてンだから、まア唸つて見ねえな、不可ねえか』
『己のなンざア、浴槽の中で唸るやうな、そんな安い聲ぢやア、ねえンだ』
『ふン、吐かしやアがらア、最早聞いてやらねえぞ』
『己れだツて、頼まれねえ』
最前から、二人の押問答を、聞いて居たのが、文身を見た丈けでも、威勢のよい男であつた。
『そンなにして聞きたがらねえでも、小夜の中山へ行きやア、石が泣くよ。ヘン、笑かしやアがる』
『オヤ、乙な事をいふぢやねえか。唄はうと、唄うめえと、それや、己の勝手だ』

『聞かうと、聞くめえと、これも、己れの勝手だ』
『可笑しな事を、いふな』
『それが、何うしたツてンだ』
『なんだ、この野郎ツ』
兩手に湯を掬つて、ざぶツと浴ける。浴けられた男の脊後には、井上が、はいつて居たのだ。頭から湯を浴びた、井上は、すくツと立上つた。
『これツ、何を爲るか』
『何だと、何が何うしたツてンだ』
『拙者の頭から湯をかけたのは、何者か、さア、是れへ出ろツ』
『えツ、拙者だツて……』
湯氣の蒸發ので、よく顏が判らなかつた。一人の奴が、透して見ると、
『あア、旦那々々』
『誰れだ〳〵』
『例のだよ、ほら、一件のだよ、はやく謝罪まつちまへツてば……』
『オヤ〳〵、左樣だな』
『旦那、濟みませんでした。勘辨して下せえ』
勇みの連中は、ガヤ〳〵いひながら、逃げるやうにして、出てゆく。一同を見送つて、井上も、何が何だか、少しも解らなかつた。無暗に謝罪つて出てゆくものを、逐ひ詰めて、其次第を、糺すほどの事ではなかつたから、その跡で、井上も、徐々〳〵上つて來て、衣物の置場を見ると、自分の衣物がない。

『やツ、これは……』
驚いて、狼狽の餘り、間違へて行つたものとしても、これは酷すぎる。縞柄が似て居るとか、色合が同じであつたとかいふものでなく、全然、似ても似付かぬ、ひどい衣物が、殘されて在つた。旅宿を出た時に、すぐ氣がついたのは、胴卷をして居た事で、井上は、要心のよい人であるから、胴卷は、何時も體につけて居るが、外湯へ、はいる時は、お靜に、預けて來るのを、今夜は忘れて、持つて出たのだ。一寸立歸つて、預けて來よう、とは思つたけれど、毎時も、二人か三人の、浴客ではあるし、見通しになつて居る所で、入浴の儘ま、見張つて居られるのだから、それが爲めに、立ち歸るのも面倒になつて、其儘遣つて來たのだ。所が、今の騷ぎで、混雜を極めて居るうちに、盜られたのに違ひない。疳癪には觸つたが、何うも仕方がないから、殘つた薄汚ない、筒袖の長袢纏を、氣味惡さうに着て、井上は、若松屋へ歸つて來た。
『お歸り遊ばせ、七番さま、御歸りだよ』
『酷い目に逢つた。これを見て呉れ』
着て居るのへ指さしながら、斯ういふたので、彦七は、
『私も、今晩は、旦那樣が、變つた衣物を着ておいで遊ばすので、妙だとは思つて居りました。全體何う遊ばしたので御座いますか』
『イヤハヤ、お話にもならぬ、馬鹿氣た事ぢや』
楠湯の一條を、詳しく物語つた。
『それは、何とも申上げやうもない、意外、御災難で御座いました』
『自分の油斷から起つた事で、只だ斷念める外はない』
『村役人の方へ、早速申遣しませう』

井上は、之れを押へた。

『それには及ばぬ。盜れた本人の私が、堪へたら可いぢやないか』

『それでも、斯ういふ事を、捨て置きますと、別府の町には、悪い奴が居て、外湯へも、迂濶はいれない抔と、良くない噂さが起ちましては、自然と町の衰微にもなりますから、村役人まで、屆けて置いた方が、宜しいのです』

『併し、左樣したとて盜られたものが、出て來るのでもなからうから、まア屆けるのは、止めてもらひ度い』

『イエ、出ないとも限りませんから、兎に角、屆けて置きませう』

之れには、井上も弱つた。屆けられては跡が面倒だ、と思つて、いろ〳〵にいふけれど、物堅い性質の彦七は、却々承知を仕さうもなかつた。

『それでは、屆ける事にしよう、が、今夜の事にも及ぶまい。明日の事にして吳れ』

『斯ういふ事は、速いのが第一ですから、取敢へず屆ける丈けの事は、致して置きませう。いづれ詳しい事は、明日といたしまして……』

『左樣か、それでは、汝への氣に入つたやうに、して置くが可い』

彦七が、剛情を張るので、井上も、面倒になつたと見えて、その儘ま梯子を上りかけた。後姿を見送つて、彦七は、

『何うも可怪しいな、事に由つたら、長州樣の密偵かも、知れないぞ』

と、思つたのも無理はない。泊りに來た時から、井上の擧動に、不審の點が多かつたのであるが、今夜の一件から、彦七の疑ひは、益々深くなつた。

座敷へはいつた井上は、お靜にも、此事を物語つた。

『妾の方には、お金はありまへんが、この先き何ないに、なるのでおませうか』

『お金がないと、心細うてな』

『まア、心配するな、何とか工夫もあらう』

と、口にはいふたが、工夫も何もなかつた。お靜の懷裡に、僅少な金があるのを、賴の綱で、その他に、何の工夫も未だないのである。

自分の油斷から起つた出來事で、何とも仕樣のない事だが、差當つて困るのは、金の都合であつた。この邊りには是ぞといふ知己もなく、幸ひお靜が、何程か有つて居る、といふので、それの有るうちに、何んとか處置をつけないと、進退のならぬ事にもならう。また、下之關を出る時、彼アした都合で、お靜を伴て來る事になつたが、永く引き付けて置くのは、宜ろしくない事であつて、何事か起つた時には、足手纏ひになるばかりで、何の利益にもならないのだ。それに、國元を離れてから、誰れとも、音信が絶えて居るので、その後の狀況も、聞いて見度い。彼是れ考へて見ると、お靜を歸すのが、一番に可い、と心付いた。

『お靜……』

『はア』

『お前に、相談がある』

『妾に相談と、いやはりますのは、何でおますか』

『他の事でもないが、お前は、下之關へ、歸つて貰ひ度い』

『えツ、妾に歸れ、といやはつて、郎君は、何ないにしやはるのや』

『己れは、跡へ殘つて、もう暫時、居るつもりぢや』

『歸れといやはりや、歸りもしまツが、妾一人で、彼の船へ乘るのやよつて……』

『そンな事は、いはずと可い。お前が歸るとなれば、相當のものをつけてやる』

お靜は、井上の氣性を、よく知つて居た。この上、押返して云へば、直ぐ疳癪を起すから、お靜は、默まつて了つたが、不平の樣子は、能く見えるやうだ。

『この手紙は、伊藤に逢ふて、手渡しするのぢや。可いか』

『はア』

『返事は急ぐ、と書いて置いたが、お前からも、能く話してくれ』

其晩は、快よく酒を飮んで寢た。翌日の便船で、お靜は、樂しかりし別府を後に、下之關へ歸つて行く。

靜の事は、先方で知つて居る、といふのは、何より幸ひと、その人に、連れになつて貰つて、お靜は、樂しかりし別

井上は、指を折つて、伊藤からの返事を、待つて居ると、その船が、下之關へ着いて、それから更に、別府へ、引返して來たが、何の返事もなかつた。その後も、船の出入は繁くあるが、終に伊藤からの音信はなかつた。十幾日を經て、お靜から、手紙が屆いて、そのうちに、斯ういふ事が書いてあつた。

『伊藤さんは、那邊へ行つたか、誰れに聞いても解らない。それに、戰爭が始まるとかいふので、人が騷いで居て、何だか氣味が悪い、別府に居る方が、遙かに樂みだ』

と、いふやうな意味であつた。井上は、何となく歸り度い、心地は爲るが、伊藤との約束があつて、勝手には歸れないが。併し、伊藤は、何うして居るか。幕軍の押寄せて來るのは、如何いふ事になつたか。國元の有樣は、何うであらうか等と、いろ〳〵の事を考へて、寂しく日を送つて居るうちに、いよ〳〵金に、差支へて來たから、流石の井上も閉口した。

宿料は、大分滯つて來て、この方も、何とか爲ねばならぬが、只だ不思議なのは、さらに催促を受けない事だ。すべて、斯ういふ商賣のものは、彼の客は、懷裡が怪しいな、と見たら、無遠慮に、勘定を嚴重しく、いふ者であるの

に、この家の主人には、さらに左樣いふ事がなかつた。それはいつて來た。

『お一人で、お寂しう御座いませう』

『やツ、御主人か、さア、はいらツしやい』

『御免遊ばせ』

彦七は、徐かにはいつて來た。今日こそは、勘定の談判を受けるのだなと、氣のはやい井上は、既う覺悟して居る。人間といふものは、懷裡が寂しくなると、幾何か氣がひけるから、癖見も出て來るものである。金が無くて、宿料の滯つて居る所へ、その家の主人が、遣つて來れば、先づ其用事を聞かぬうちから、宿料の催促だな、と感じる。これは誰れにしても、一度その境遇に接したものは、皆な覺えのあることだ。されば、井上も、彦七が、はいつて來た時は、少し不味い顏もしたが、段々談話をつゞけて居ると、更に左樣した擧動もなく、それに話好きな男であつたから、井上も、終には釣込まれてしまつた。

『貴君は、普通の町人では、ないやうに思ひますが、いづれ御身分の御方で御座いませうな』

『イヤ、そンな事はない。私は、町人だよ』

『へへー、けれども、旦那樣の歩き方が違ひます。何うしても、御武家の歩き方で御座いますから、はゝア、之れは御身分の御方が、故意と斯うして、姿を變へて居るのだな、と、私は思ひますので、失禮とは存じましたが、一寸伺つて見たので御座います』

之を聞いて、井上が、不審に思ふたのは、今の一言のうちに、武士の歩き方といふたのは、何ういふ歩き方か、それが聞いて見度くなつた。

『汝へが、今いふた、武家の歩き方とは、何ういふのか、私には解らんが……』

『へ、、、、、、御自分には御判りのないものですが、他から見て居ますとすぐ判ります。斯ういふ稼業を、いたして居りますと、御客樣の御樣子ばかり、見て居りますから、左樣いふ事は、直ぐに氣がつきますので、御婦人方でも、その御樣子を、一寸見ますと、すぐに素人か粹者か、といふのが判りますから、いくら僞裝つて居りましても、私の眼には、確乎と判つて居ります』

少し調子を脫して、彦七は、乘地に話込んだ。井上は、何となく伴れて來た、お靜の事迄も、いはれてゐるやうな氣がして、流石に面目が惡かつた。彦七は、更に氣がつかずに、猶ほ語りつゞけるのであつた。

『御武家は、大小を帶して、おいでになりますので、歩き方が違ひます、といふものは、何しろ彼れ丈けのものを、腰に帶すのですから、自然と左りの肩が下つて、歩くのにも町人とは、違つた所があるので、私は慥かに旦那樣を、御武家と見ましたのですが、如何で御座います』

成程、聞いて見れば、左樣かとも思はれる。それにしても、此奴は、何故斯ういふ事をいふて、己に、武士だといふ事を、いはせ度いのか、と思へば、不審は深くなるばかりだ。

『汝への、眼力は恐ろしい。實は、私も二本帶した、身分であつた』

彦七は、跨顏になつて、

『左樣で御座いませうな。私しの見込みに、違つた事はないのです』

『しかし、武士ではないよ』

『それでは、何ういふ御身分で……』

『鄕士とでもいはふか、苗字帶刀を、許されて居る町人で、武士とは違ふよ』

『まア、近い方ですな』

『そりや、左樣かも知れん』

之れで話は一段落になつたのだから、はやく出てゆけば可いに、と思つて居るが、却々そんな樣子はなく、益々落ちついて話込むので、井上も、今は些さか迷惑な思ひで、對手になつて、居るのであつた。

『別府へ、おいでになつてから、もう大分長くなりますが、よく御厭になりませんな』

『私は、湯が好きでな』

『へへー、成程、それでといふ譯ですな』

『うむ』

『御病氣でもないやうですが、矢張り疵の御養生で……』

『まア、そんな事ぢや』

『彼れ丈けの疵は、大變な事で御座いますが、全體、何う遊ばしたのですか』

何よりも一番に困るのが、これを質かれる事であつた。

毛利の家臣で、斯ういふ事情から斬られた、と、打明けて了へば、何の事はないのだが、それのいへない所に苦みがある。

『イヤ、これは詰らない事から、朋友と喧嘩して、意外、負傷をしたのぢや』

『御氣性にも依りませうが、よく生命にも係らず、まア御運が良かつたのですな』

『人間は運がなければ、不可ね』

『對手のものは、何うなりました』

『矢張り、負傷をしたのぢや』

『へへ、それで、其後は、何うなりましたのです』

『今、他人が、はいつて居る』

『畢竟、仲直りですな』

『まア、左樣ぢやらう』

彦七は、興味を有つて、聞いて居るのだらうが、井上の方では、何の位ゐ迷惑か知れない。

『汝の方へ、大分勘定が溜つて、まことに氣の毒だが、今少し待つて貰ひ度い』

負傷の話を免れよう、と思つて、勘定のことを發言した。彦七は、手を振つて、

『イエ、何ういたしまして、その仰せでは、却つて恐れ入ります。彼ァいふ御災難がありましたので、御手元も、御不自由で御座いませう。少々ばかりなら失禮では御座いますが、御立替へも致します故、御心配なく御滯在を願ひます』

『それは忝けない。その親切に甘えて、この儘、泊めて置いて貰はう』

『萬事が、不行屆きでは御座いませうが、その邊は、宜しく御許しを願ひます』

世間一般の空世辭でなく、幾分か氣質の面白い所はあるが、豈夫、之れほど迄に、淡泊く出るとは思はなかつた。井上も、之で一と安心した。

その日は、それで濟んだが、これからといふものは、チヨイ〳〵やつて來ては、話込んでゆく。徒然を慰めるには此上もない話對手であるが、何となく自分の身の上を、搜られるのではないかとの疑ひもあつて、打解けて話すやうにして居るうちにも、要心はして居るのだ。

漸く伊藤から、書面が來た。態々飛脚を立てたので、その文意に由ると、

『同志の計劃も、追々進んで、桂小五郎も、近く歸るとの報知があつて、四國へ渡つた。高杉も、それと、前後して、歸つて來る。幕府の方では、征長といふことに決して、いよ〳〵大軍を差向ける、といふことだ。今度は、將軍の親征だ、といふから、却つて濱士の元氣は盛んである。この一戰は、實に毛利の存亡に關する事であるから、己れも一生懸命になつて、目下奔走して居る。併し、幕軍の出發には、未だ間があるやうだ。聞く所に依れば、藩論が、征長に不同意である、との事であるが、猶ほ幕臣のうちには、不同意を唱へるものがあつて、內部は、紛糾して居るやうだから、出軍は、餘程困難だらう。いづれにしても、幕府の方に、不都合な事が出來れば、此方には利益になるのだから、先づ結構である。事情は、右の如くであるから、お前は、未だ悠々遊んで居れ。いざといふ時に、身體が惡くては、存分の働きも出來ない。しツかり養生して、元の體になつて、此方から知らせたら、すぐに歸つて來い。猶ほ一應の注意をして置くが、濱では、お前が、一番の開戰論者だといふので、佐幕派の憎みが、尋常でない。大分狙はれて居るやうだから、可成く潜んで居るが可い。出來る事なら、身分を落しても可いから、何か隱れて行つて居たら、可からう』

とのことで、金子は五十兩、添へてあつた。

其處で、井上も、種々考へて、自分は今、大切な身の上である。伊藤のいふ通り、少しでも身體を、丈夫にして、幕軍と一戰の時分には、拔群の働きを爲ねばならぬから、入湯しては、ブラ〳〵して居るより、何か勞働でもして居たら、その方が、却つて體の爲めになるだらう、と斯う考へて、彦七へ、相談をかけることに極めた。

彦七は、ニコ〳〵し乍らはいつて來た。井上は、待ち受けて居たのだから、すぐに迎へて、

『さ、これへ……』

『失禮を、いたします』

彦七が席につくを待つて、

『忙しいのに氣の毒であつたが、少し折入つての相談ぢや』

『へヘー、どういふ事で御座いますが』

『實は、斯ういふ次第ぢや』

ぐツと、膝を進むる井上、彦七も、同じやうに進んだ。

『少し仔細があつて、國の方へは、暫時歸らぬ覺悟になつたのぢや。それについては、斯うブラ〳〵して居ることも實は都合上困るし、それに體の爲めにも悪いから、其處で、何ういふ事といふて、こちらに希望はないが、何か行つて見度い、と思ふて、その周旋方を、賴み度いのぢや。心配して貰ふ譯には、なるまいか』

『それは、如何やうにも致しませうが、何をといふ御希望を伺ひませぬと、私にも、取計ひ兼ねますので……』

『それは、道理千萬ぢやが、別に之れといふて、見込んだ事もないのぢやから、可然く考へて、貰ひ度い』

『可然と、仰しやつた所で、私には、何とも考へが、決きかねますが』

『畢竟、身を隱す爲めの覺悟もあるのぢや。拙者の考へでは、極く低いものが可からう、と思ふ』

『低いものと申しましても、この町は、御覽の通りの土地で御座いますから』

これには、彦七も大分窮したらしく、しばらく考へて居たが、

『斯うなすツては、如何で御座いますか』

『うむ』

『この先に、灘龜と申しまして、豐前の長洲から參りましたもので、却々の奴が御座いますが、悪い事も爲る代りに、また達引の強い所もありまして、今では、此邊の大親分になつて、居ります故、これへ申込みましたら、何とか工夫も御座いませう』

『はは ア、そりや好都合らしいが、而て、何ういふ商賣を、致して居るのか』

『土方人足の元締で御座いますが、本職は、博徒で御座います』

博徒の親分と聞いては、井上も、鳥渡困つたが、併し、却つて左樣いふ連中の方が、身を隱すとしたら、可いかも知れない。また一度は、左樣いふ境遇の味も、知つて置く方が可からうと、はやくも決心して、

『博徒は面白い。是非話して貰ひ度い』

『へー、それでは、御出でなさいますか』

『是非、賴み入る』

『先づ私が、下話を致しましてから、御連申す事に致しますが、念の爲め、御斷り申して置きますのは、彼の連中は、少しも禮儀作法を、心得て居りませぬ故、御無禮は働らきませうが、その邊の事は、御含み置きを願ひませぬと、間違ひでも出來た時分に、取返しがつきませんから……』

『その邊の心得は、いはるゝまでもない』

『それさへ、御承知下されば、何とか申込んで見ませう』

『何卒、賴む』

井上が、何と僞つても、彦七の方では信じない。この人は、立派な武士である、と見込んで居るのだ。殊に、博徒の身分になつて、暫時、この地に忍ぶといふは、何か深い仔細のある人に違ひがない。よく世間に有觸れた、仇討物語の人とも違ふやうだが、何でも此頃、長州樣の內輪が、大分ゴタ〳〵したといふから、それに關係の人ではないか、とも考へて居たのだ。

『それでは、灘龜を談じて參りませう』

『御足勞ぢやが、賴む』

これから、彦七は、出て行つた。

『明日からは、己も博徒になるのか、人間の一生は、面白い者ぢや』

と、井上は、左迄に苦勞とも、思つて居ないやうだ。

豐前の長洲は漁場だが、却々富んで居る人が多く、町は、存外に賑はつて、商家も、相當に繁昌して居る。世に有名な宇佐八幡は、これから近い一里で、今では、汽車も通じて居るから、一層良くなつたやうだ。

何處へ行つても、漁夫町といふものは、同じやうな雜風景なもので、喧嘩して居るのか、談話して居るのか、その區別さへ決かぬほどに、無作法千萬なものである。

『やア、人殺しだ〳〵』

わツ〳〵といふ騒ぎで、押し返すやうな人出だ。十五六にもなつたらうか、と、思はれる小僧が、魚を斬る、大きな庖丁を持つて、呆然立つて居ると、その傍らには、三十二三の體格から立派な男が、血に染んで倒れて居る。大勢の人が、その二人を取巻いて、騒いで居るのであるが、誰れ一人として、之れを取扱つてやらう、とするものはなく、只だ大聲あげて騒ぐばかりであつた。

所へ、町の役人も、やつて來て、兎に角、負傷人の手當をして、小僧は、其場から連れて行かれる事になつた。

『へー』

『へーぢやねえぜ、コンな事を行つて、貴樣の首も飛んで了ふぞ』

『首が飛ぶつて、何處へ飛ぶんだ』

『ハツハ、、、、、、太え樣でも、矢張り子供だな。首が何處へ飛ぶつて、こりやア、貴樣が、首を斬られると、いふ事だ』

『何故かね、私、惡くねえだが』

『人を殺して惡くないとは、いくら子供でも、餘まり馬鹿な事をいふもンだ。貴樣は、惡くねえと、思つて居るのか』

『だツて、政兄イが、惡いンだもの……』

『何うして、惡いのか』

『自分が強いからツて、他を餘まり虐めるもンだから、殺されたンだ』

『他の行つた事を、貴樣が、物語りして居るやうだな、殺されたンだな』

やねえか』

『左樣だ』

『幾何惡くつても、政は人間なんだから　人間を殺しちや濟むめえ。それ位ゐの事は、貴樣にも、分つて居るだらう』

『それぢやア、他を虐めるのは、可いのか』

役人も、一寸行詰まつたが、

『理窟らしい事を吐かすな、殺すが惡けりや、虐めるのも惡い。こりやア、何方も良くねえ』

『それだツて、虐めたから殺したンだ。虐めなきや、殺さねえや』

之れを立派な、殺人理由として、平氣で居るのは、單に子供だから、といふばかりではなく、慥かに膽の太い所はある。役人も、今は爭ふて、詮のない事だから、話は、それで止めて了つた。

殺された政藏といふ奴が、少しばかりの小力を頼みにして、動もすると、腕を揮ふて居たのだ。從つて、それを憎むものは多いが、對手になるものは無かつた。この日も、酒の上で、町を荒し廻つて、龜吉が、同じやうな子供と、遊んで居る所へ、やツて來て、子供の頭を、ポカポカ打つので、皆んな逃げて了つたが、逃げ後れた龜吉は、押へられて散々虐められた。其點は子供だから、泣て家へ歸つて來たが、さア之が口惜くつてならぬ。父親は、海へ出て居て、今日は居ないのである。お母も、何か用事があつて居なかつた。龜吉は、魚を斬す、大きな庖刀を、密つと持出して來て、政藏の跡を逐ふた。

子供を虐めてから、濱の方へ、ぶら〳〵とやつて來た、政藏は、豈夫に、龜吉が、復讐に來る、とは思はなか

つた。

『オイ、兄イ』

『何だ』

政藏が、振返へる刹那に、ぐつと脇腹へ、庖刀を突つ込んだ。

『わツ』

と、叫んで、政藏は倒れた。いくら強くても、只ツた一抉り、人間は脆いものである。

殺したものと、殺されたものと、理窟の善悪は、暫らく措いて、殺したのが、良くないと、十人が十人まで、左様いふ可き筈であるのに、之は又た格別の異ひで、却つて龜吉への同情が多く、殺された政藏は、自業自得で、止むを得ない、といふやうな事を、頻りに言ひ觸らすものがあつて、後年恐る可き少年ではあるが、彼奴を殺したのは、感心だ抔と、妙な所に、感心を爲るものもあつた。

龜吉の父といふのが、正直で通り者の漁夫である。老る年の夫婦間に、只ツた一粒者の龜吉が、かの大罪を犯した、といふので、昨夜は遂々〳〵、泣明して了つたのである。それに又た、同情を爲る、仲間の漁夫は、夙くから詰めかけて來て、ワイ〳〵騒いで居るのだ。

『まア、左樣嘆いたつて仕方がねえだ。出來たものは取返えしもつかねえから、少し眠つたら、何うだね』

『左樣だ〳〵、爺さん、眠つたら可いだらう』

親切に慰めて呉れると、猶ほ悲しくなつて、涙は留度もなく、出て來るのだ。

『皆なに、左樣心配を、かけちや濟まねえだが、龜の野郎が、彼んな事を行つたので、已ア、悲しくツてならねえだ』

『けンども、心配したツて、今更ら仕やうも、なかつぺえ』

『殺すまでの事もあるめえに、人を殺しちや、濟まねえからな』

『彼ンな奴、一人位ゐ殺したツて、そンなに、心配するにや及ばねえよ』

他の若い者も、共に口を添へて、

『左樣だとも、町の方ぢや、喜んで居るだ。彼奴が、死にやア安心だつて……そりや嘘ぢやアねえ』

『己が聞いたのぢやア、龜が子供だツてンで、赦して呉れる、といふ事だ』

老爺は乘出して、

『そりや、眞正かな』

『未だ能く解らねえだが、そンな話もあるだから、安心しろといふのだ』

怪しい噂さを傳へて、一時でも安心させよう、と爲る、それも人の親切であつた。

斯んな調子で、三四日は、騒いで送つて了つた。そのうちに、少しは理窟の解るものもあつて、嘆願書を出す事になつた。殆んど仲間のものは、一人も缺かさず、町の方でも、自分から進んで、調印して呉れた人もあつた。

嘘にもせよ、龜吉は、親を養ふ可きもので、殊に平生は親孝行である、といふのが、第一の書立であつた。殺された政藏が、身上の惡い事は、一々箇條を擧げて書いてあつた。當日の血塗れ騒ぎにも、多少の筆加減があつて、嘆願の趣意は、兎に角、立派に出來て居た。

役人の方へは、町の方からも、手を入れて、それ〳〵に頼み込んだ。今のやうに理窟詰で、人情の顧みられない時代とは違つて、左樣いふ點になると、存外に、面白い所があつたものだ。十日餘り經つと、龜吉は、町へ預けの身となつて、一時下げられる事になつた。既う其處まで漕ぎつければ、それから先きは何うともなる。呼吸あるうちには、二度と逢へまい、と思つて居た、兩親の喜びは、實に尋常でなかつた。

『まア可かつたな、龜ツ、汝えは荒つぽくて不可ねえよ。これからは、了見を改めるだぞ』

龜吉は、ケロンとして居る、皆んなの心配したほどでもない。

『だツて、己ア、悪い事をしたんぢやねえ』

『呆れたもンだな、汝えは、政藏を殺したぢやねえか』

『殺さなきや、虐められるもの、仕方がねえや』

少年に似合はぬ、この冀度胸には、聞いて居たものも、顔を見合せて、何といひやうもなかつた。蛇は寸にして其氣在り、とか云ふて、後年に、大分から別府へかけて、飛鳥も落すほどの勢ひで、大きな親分になる奴だけあつて、矢ツ張り並の少年とは、違ふ所があつた。

少年に不似合な、膽玉が有る上に、人間を殺したので、一層度胸が坐つて、それからの龜吉は、全く別人の如くなり、その將來に、注意されるやうになつた。

親父の心配は尋常でなく、窖の揚卸に、吃言もいふて見たが、糠に釘で、一向に功能がないので、斷念めて何事もいはなくなつた。只だ其行末が何うなるかと、それぱかりを、心配するのであつた。

十七八になつて、色氣も出れば、慾氣も出て來た。上中下を通じて、男女ともに一番むづかしいのが、この年頃である。漁夫の中に交つて、面白半分に、稼業を勵んで居るうちに、悪い遊びも、覺えて來るので、龜吉の身について、色々の噂さが起つて、それを聞く度毎に親父の心配は、倍して來るばかりだ。最早言ふまい、と思つては居るが、其處が親子で、左樣ばかりもならなかつた。

『爺さん、今ま歸えツたぜ』

今日は、朝からの雪空で、寒氣も一段とはげしいのに、もない乎、平氣な顏で、ぬツと立つて居る。

『龜ツ、汝え、亦た脫ぷちか』

『ウン』

『ウンぢやアねえぞ、大概にしたら何うだ』

『爺さん、濟まねえとは思つたが、不思追目になつたんで、斯ういふ醜姿だ』

『汝えのやうな、了見の奴が、博奕に勝て堪まるもんか』

『そんな事いふなよ、餘まり酷えや。己だつて勝つ事もあるから、不思はまり込む事もあるのだ』

『そりやア、十遍に一遍位えは勝つだらう、其處が勝負だからな。けれども、汝えのやうに、受ツ尻の吝ねえ奴は、一生行つたツて、何うなるもンか』

『うむ、可いツてことよ。最早厭めるから、安心して臭んねえ』

『嘘にも左樣いつて臭れりやア、嬉れしいのだ。汝は、全體氣が荒えから、萬一や間違でも、しやアしねえかと、そればかりを、己やア、心配して居るンだ。平生は、溫和い人でも、彼れにかゝつちや荒くなるからな』

『最早解つたよ。明日からは海の方を、一ぺえに稼ぐから、爺さん、安心して臭んねえ』

斯ういはれゝば、また嬉しいので、親父は泣いて居た。

二日や三日は、何うか堪忍も爲るが、五日とは續くものでない。相變らず博奕に耽つて、少しも家へは寄付ないので、斷念めたやうでも左樣なると、また心配するのが親の情である。

『大變だ〳〵』

『龜は、居ねえか』

五六人の漁夫が、飛び込んで來た。

『おう、若けえ衆か、何が、大變なンだ』

『龜が喧嘩してな』

『えツ、喧嘩したツて、ど、ど、何ンな様子だ』
『權太の家で、始まつて居たので……』
『博奕か』
『うむ』
『それから、何うした』
『其處へ、喜三郎が、はいつて來て、突然、龜の横ツ面を打つたのだ。すると、龜が怒つて、喜三郎に飛付いた。それから組打になつたんだが、二人が倒れる時に、喜三郎が、下になつて居たので、ゴツンと音がしたのは、頭をぶツつけたんだらう。その儘ま、眼を廻して了つて、何うしても蘇生らねえのだ。さアそれから大騒ぎになつて、ワイ〳〵いつて居るうちに、龜が、見えなくなつたンだ。それで已達ア、捜しに來たのだよ』
聞いて見れば、殺したといふ譯でもないのだが、しかし、對手が死んでは、事が面倒になるのは、知れて居る。
『彼の野郎、またそンな事をして、困つちまうな』
『龜が居ねえと、已達ア、猶ほ困るよ』
『それぢやア、已が行かう』
『左樣して呉れりやア、有難えのだ』
親父は、若い衆と共に、權太の家へ、出掛けて行つた。
政藏の時とは違つて、今度のは、殺すの斬るのと、いふのではなく、謂はゞ寳かけられた喧嘩に、冠る笠はないので、無據く、對手になつたのが、引組んで倒れた機會に、斯ういふ事になつたのだから、世間からも、左迄には責められぬし、其筋の訊問も、輕く濟んで、喜三郎の家族との示談も、思ひの外に、スラ〳〵と運んだ。けれども、親父は、物堅い質の人とて、自分の子が二度までも、人を殺したとあつては、何うも此儘にはならぬ。仲間は、いふ迄もなく、町の人にも濟まないことだ、と、自分の覺悟は、決いて居るのだが、本人の龜吉は、少しも左樣いふ考へのないものか、相變らず、悪所入に、日を送つて居た。
今日は、珍らしく朝から、家に居る龜吉、親父は、
『爺さん』
不意に聲をかけられて、親父は、左も重さうに、首を上げた。
『何んだ、龜ツ』
『已やア、頼みがあるだが、聞いて呉んねえな』
『親子の間に頼みがある、と改まつて……全體、何ンな事だ』
今迄、胡坐をかいて居た、龜吉は、俄かに坐り直して、
『勘當して貰ひ度いんだ』
『何ツ、勘當して呉れと……』
『うむ』
『そ、そ、そりや、何ういふ理由だ』
『理由ツて、別に深い理由はねえのだが、已ア、他國へ行かう、と思つてさ』
『他國ツてえのは、那邊だ』
『未だ那邊ツて決めてねえのだ。爺さんが、承知して呉れりやア、那邊へでも、行つて見よう、と思ふのだ』
『それぢやア、未だ行先は決まらねえのか』
『うむ』
『何だツて、そンな心に、なつたのだ』

『己ア、熟々考えたのだよ』

『考えたツて、そりや、何ういふ考えだ』

『人殺しを、二度もして居るから、何ンなに己が、温順くしたつて　此土地ぢやア駄目だ。誰れ一人、己の對手になつて異れるものもねえ。己だつて、一生こんなことで送るなら、別に苦勞にもならねえのだが、それぢやア、人間に生れた甲斐がねえ、といふもンだ。善玉でも、悪玉でも、何方でも可いから、人の上に立つて、兄イとか、親分とか、いはれるやうに、なりてえのだ。それにやア、土地では駄目だから、何國へ行つて、身を立てよう、と思ふのだ。爺さん、何うだ、可けねえか』

歳にはませた考へて、前途の事を思ふて、斯う決心した、といふのは、矢ツ張り、普通の子供ではなかつた。何うせ親父も、左樣思つて居たのだから、今更らに異存はないのだが、この老年になつて、只つた一人の伜に別れるのか、と思へば、何となく悲しくもなつて、先立つものは涙である。

『やツ、爺さん、泣いてるな』

『己ア、何だか悲しくなつてな』

『何が、悲しいのだ』

『汝えには、親の心は解るめえ、まあ可いや』

『可かねえ、爺さんに泣かれると、何だか、己も悲しくならア……』

『而て見りやア、矢ツ張り親子だな』

『そりやア、極まつてらアな』

是れで少焉は、言も絶れて、睨合の體であつたが、

『汝えが、左樣いふ考えなら、もう己は、何にもいはねえから、自分の思つた通りに、したら可いだらう』

『それぢやア、可いのだね』

『うむ、何うも仕方がねえ』

相談は決まつた。兎に角、土地を離れる、といふ事になつて、行先きは未だ決まらないのだが、取敢へず、長洲には居ない、といふ事丈けは決まつた。

斯ういふ事情から、土地を離れた龜吉が、幾多の苦勞を積んで、別府へ、流れ込んで來た。

長洲を出てからの龜吉は、思ひの儘まに、放蕩も盡した。女にも引つかゝれば、博奕にも耽ける。喧嘩も爲れば、他も惱ました。悪い事の一通りは、行つて退けたが、只だ盜み丈はしなかつた。腕力も、相當に有つて、達引もある所から、那邊へ行つても、兄イで通つた。

流れ〳〵て、別府へはいつたのが、元治の歳であつた。初めは、土方の中を押廻して、博奕をうつて居たのだが、小さな喧嘩の仲裁をして、それが思ひ通りに屆いたので、一寸他の噂さにも乘るやうになつた。自分でも、喧嘩をしたが、その時にも、贈玉を見せて、喝采といはせた。そんな事が、二度三度つゞくと、彼の社會は、極端な英雄崇拜であるから、龜兄イは、大層なもンだ、といふことになる。その機を透さず、金を撒いた。撒くといつても、湯水のやうに使つたのではない。此處といふ究所を見ては、金を活して使ふのだ。その呼吸は、諸國を流浪して、大きな部屋を、渡つて來たので、實地の修業が、出來て居る。それに、自分の器用も加はつて、巧みに切つて廻したから、龜吉の名は、大きくなるばかりだ。斯うなると、求めて乾兒に、なるものが出て來る。そのうちには、身體を賭つて、親分の爲めなら、火水の中へでも飛込まう、といふ者も、四人や五人は在つて、それが又、龜吉を、大きく爲るので あつた。人間の運と云ふものは實に妙な者で、俗に云ふ、トン〳〵拍子。それが卽ち、運の向いて來た時で、工事を受合へば、見す〳〵損と覺悟したのが、却つて儲かる。厭々ながら交際博奕に出れば、それが大當りで、金を背負て歸る、といつたやうな調子で、今は別府一圓は、龜吉の繩張になつて、乾分も、四五百人は出來た。大きな部屋を有